

『生ける死者からの戦時書簡』

エルザ・バーカー

【作品情報】

Elsa Barker 著

『War letters from the living dead man』
(1915)

【著作権について】

本作品の原文は、著作権保護期間が満了している
(パブリックドメイン)と判断される資料に基づいて
います。

【翻訳について】

本日本語訳は、公開者本人による独自翻訳です。
既存の翻訳や他者の著作物は一切使用していません。

【注意事項】

万が一、著作権等に問題がある場合は、速やかに対応(修正・削除)いたしますのでご連絡ください。

【翻訳者】

SEIJI

【免責事項】

本翻訳は個人による学術・研究・情報提供を目的としたものです。内容の正確性・完全性について保証するものではありません。

本翻訳の著作権は翻訳者に帰属します。無断転載はご遠慮ください。

2026/6/23

序文

1914 年の春、ロンドンとニューヨークで、私の著書『生ける死者からの手紙』が出版された。それは、親しい友人たちの間では「X」として知られていた、アメリカ人の判事であり哲学教師であった人物からの自動書記による文章であった。

その本を書くことに関しては、序文でかなり詳しく説明した事情があったので、あの世からの真実の通信であるという仮説以外は、私には成り立たないように思われた。たとえば、それは、私の友人がアメリカ西海岸で亡くなったことを、私がパリで知る数日前に始まっていたのである。

その最初の「X」の本では、私は筆者が誰であるかを明らかにしなかった。家族の同意なしにそうする自由はないと思ったからである。しかし 1914 年の

夏、私がまだヨーロッパに住んでいたころ、『ニューヨーク・サンデー・ワールド』紙にブルース・ハッチ氏との長いインタビューが掲載された。

その中で彼は、『手紙』は、自分の父である故デイヴィッド・P・ハッチ判事——カリフォルニア州ロサンゼルス的人物——からの真実の通信であるという確信を述べていた。

前の本を読んでいない人たちのために言っておきたいのだが、「X」は普通の人間ではなかった。私の知る西洋人の中で、彼ほど、自分自身と人生を支配する力——いわゆる達人の境地——に近づいていた者はいなかった。

1913年に『手紙』が完成したあと、およそ二年間のあいだ、私は、「X」の存在を、二、三度しか感じなかった。そのとき彼は、私個人の問題について、

短い助言を書いただけであった。

1915年2月4日、ニューヨークで、私は突然、ある日、「X」が部屋の中に立っていて、何かを書き込んでいることに気づいた。しかし、以前と同じく、一、二度の例外を除けば、彼が何を書こうとしているのか、私はまったく見当もつかなかった。彼は次のように書いた。

「私が戻って来て、この戦争の物語を、向こう側から見たままに君に語るとき、君は、諸国のあらゆる外務官庁よりも多くを知ることになるだろう。」

私は、この手紙を、前の本に大きな関心を持っていた二人の友人、ヴァンス・トンプソン夫妻に託した。

そして、「X」の快い同意を得て、よりよい「焦点」を作るために、私たち三人が週に一度ほど一緒に座

ることが決まった。彼らの忠実な信頼は、困難な作業の前半を続けていた私にとって、大きな支えであった。

この文章は、私たち三人が一緒に座った日にだけ書かれたのではない。しかし、本の前半のおよそ三分の一は、トンプソン夫妻の家で、夫妻の立ち会いのもとで書かれた。その後、彼らはカリフォルニアへ行き、私は一人で仕事を続けた。

この書記の過程について説明すると、読者の中には興味を持つ人もいるかもしれない。それは、最初の本の初期に見られたような、外から手を激しく機械的に奪われるような状態から、しだいに、内面の静かな心への印象へと変わっていったのである。

もし読者が、強い個性を持つ親しい友人が、自分のそばにいと想像してみるならば、その印象から

肉眼で見る感覚だけを差し引き、実際に考え、感じている存在の微妙な振動だけを残し、さらに、言葉では表せない「内なる視覚」を加えるなら、私がどうして「X」が部屋にいると分かるのかを、少し理解できるだろう。

おそらく、ヘレン・ケラーも、自分の友人たちが近くにいるときには、それが誰なのかを感じ取り、一人ひとりを区別することができたであろう。たとえ彼女が耳も聞こえず、目も見えなかったとしても。

「X」の存在に気づくと、私は、ほかの筆記係がそうするように、鉛筆とノートを手取る。そして、長い練習によって今では容易になった意志の力で、私の表面意識の働きを静める。そこには、思考も、思考の影さえもなくなるまで。すると、その言葉が脳そのものの中へ入って来て、鉛筆の先から、意識的な努力なしに流れ出るのである。それは、まる

で、小さくて非常に敏感な球のような、一つの聴覚器官で、脳の中央で口述を聞いているかのようなのである。

私は、一つの文を書き始めるとき、その文がどのように終わるのか、まったく知らない。今書いている文が最後の文なのか、それとも、そのあとに二千語が続くのかも分からない。私はただ、自ら進んで受け身の状態に入り、前に述べた人格の印象が突然消えるまで、書き続ける。そのときには、もう言葉は来ない。その回の書記は終わるのである。

懐疑的な読者の心には当然、「私自身の潜在意識が、二年前には不可能に思われた世界的悲劇を説明しようとして、この『生ける死者からの戦時書簡』を語らせたのではないか」という疑問が生じるだろう。実際、それは私自身の心にも浮かんだ。

しかし、「X」のために長いあいだ書いてきた経験と、二年間のあいだ、彼のことをたびたび思い出していたにもかかわらず、二、三度の些細な場合を除いては、彼のために何も書かなかったという事実、さらに、超常現象を細かく観察する習慣を身につけていたことによって、私は今、自分の想像の中の「X」、記憶の中の「X」、あるいは他人の心から受けた「X」がそこにいるという暗示と、本当にそこにいる「X」との違いを見分けられると、安心して言うことができる。

私ほど、自分の体験に対して冷静で批判的な者は、おそらくいないだろう。私の神秘的な体験を少しでも経験した人間なら、なおさらである。私は、この手紙が、書かれているとおりのものであるという信念に反対する、あらゆる論理的な議論を、喜んで受け入れる。しかし、そのような議論を、私が持っている真実性の証拠と比較してみると、肯定のほ

うが否定を上回るので、私はそれを受け入れるのである。

この証拠は、あまりにも複雑で、その多くは、あまりにも個人的なものであるため、ここで概略さえ述べることはできない。しかし、『第三十六の手紙』は、その一例にすぎない。それは、ルシタニア号が沈没してから一時間後、しかも、私がそのことを知る九時間前に書かれたものである。さらに、少なくとも興味深い一致と考えられることとして、私がこの第二の本を書き始めた、まさにそのとき、別々の国にいる三人の神秘学の研究者が、「X」が戻って来て、再び私の手を通して書くだらうと感じる、と私に手紙を書いて来た。その後も、ほかの何人かが、言葉や手紙によって、同じことを表明している。

私は、この戦争の出来事の多くを、その起こった時に、自ら「アストラルな状態」で見てきた。私は、イギ

リス軍が大陸で最初に戦った戦闘に、完全に目覚めたままアストラルな参加者として立ち会い、その体験を、イギリスで一人の英国士官に話した。それは、その出来事がまだイギリスで報道される前のことであった。

翌日、友人がパリから持って来たフランスの新聞によって、私の話は確かめられた。

私は、ニューヨークにいながら、スカーバラ砲撃を、それが起こった時刻に見た。そして、その出来事を、新聞に載る何時間も前に、友人に話した。もっとも、私が攻撃を見たそのイギリスの海辺の町の名は、分からなかったのだが。

それでも、たとえ私が、「X」が実際に部屋にいることを感じていても、彼の心の中にあることを読み取ることにはできない。私が知るのは、彼が口述するこ

とだけであり、彼がどれほど多くを知っているのか、あるいは、どれほど少ししか知らないのかも、私には分からない。彼は、ある手紙の中で、自分の判断がその都度許すことだけを、私に話すつもりだと述べている。

一つだけ、私自身が「X」に完全にはついていけない点がある。彼が、時々、ドイツ国民はこうである、ああである、と言うとき、もし私が書くのであれば、私は「プロイセン人」と言っただろう。私には、多くのドイツ人の友人がいる。そして、彼ら一人ひとりに対して、彼らの政府が世界を投げ込んだ恐るべき状況の責任を負わせることは、私にはできない。

私は、「X」が書いたことについて、自分が個人的責任を負うものではなく、ただ彼の言葉を記録しているだけである、ということを強調しなければならない。

1915 年 7 月 28 日、彼の最後の手紙が書かれてから数日後になって、私は初めて気づいた。彼は、この戦争の本を書き終えたのが、オーストリアがセルビアに宣戦布告した最初の日から、ちょうど一年後であり、しかも、教皇が平和への大きな訴えを發した、まさにその日だったのである。

三年以上前に始まった以前の書記の中で、「X」は、決して自分を呼び出さないよう、私に求めている。そして、その後には、質問もしないように助言した。したがって、私は、たいてい、そのどちらも差し控えてきた。

もっとも、この戦争の最終的な結末について、深く心を動かされていた私は、彼に尋ねたいという誘惑に、しばしば強く駆られた。しかし、そのような問いかけは、私自身の表面意識の働きを刺激し、受

け取る力を曇らせてしまうかもしれない、と私は分かっていた。

最近では、私は、眠りに入る直前の幻視の中でさえ、そうした答えを求めることを避けてきた。というのも、もし何かを見てしまったら、この手紙を受け取る際に、私は今ほど受け身でいられなくなるかもしれないからである。

この状況は、どうやら、私の好奇心を永遠に癒してしまったようである。それは、私を、彗星のように孤立したものにし、ほとんど同じほど孤独にもした。

そして、私は、そのままでいることを望めるほど、強くなった。しかし、不思議な逆説によって、この戦争の残虐さに対する私の憎しみが、ますます深くなるにつれて、あらゆる陣営で苦闘している人間たちへの愛もまた、それと共に大きくなっていった。ついに

は、あの戦場で死に、苦しんだ何百万という人々の一人ひとりが、私の兄弟であり、私の友人であるように感じるようになった。愛とは、人生の残酷な現実に触れ、それを神聖なものへと変える奇跡なのである。

この本の第三の手紙——3月10日付のもの——で、「X」は、善の力が悪の力を打ち負かし、平和が世界に戻るだろうと語っている。ただし、それがいつであるかについては、彼は述べていない。

私は、ルシタニア号の沈没を知る前に——しかし、実際にその沈没が起こってから、わずか一時間後に——彼が、「向こう」で働いていた者たちが追いつ返した悪魔たちが、再び力を集めて戻って来て、攻撃を始めた、と書くのを受け取った。そして、彼は、自分は知っているべきだった、と言っている。律動の法則そのものが、悪魔たちが新たな力を蓄えた

あとには、再び前進させるのだ、と。

律動の法則という観点から見ると、その手紙は、私には、この本の中で最も興味深い部分である。それは、彼が何度も語ってきたこと——つまり、「生ける死者」たちでさえ、すべてを知っているわけではない、ということ——を示している。

そして、彼らが私たちよりもはるかに多くを知っている理由は、彼らが、より広い視野と、結論を導くための、より多くの資料を持っているからなのである。

暗黒の力の、その第二の攻撃に関して言えば、「黒いヴェールをかぶった者」との最初の会話を記した手紙が、ルシタニア号についての手紙の、ちょうど直前に書かれていたということは、おそらく意味深いことである。

その物語を別にすれば、この『戦時書簡』の中で、「X」を支配している主要な考えは二つあるように思われる。すなわち、善と悪——愛と憎しみ——の神秘、そして、人類の兄弟愛である。

人の魂を揺さぶるような、善と悪の葛藤についての彼の説明——それは、人間の心の中にも、宇宙の中にも存在する——を通じて、人は、自分自身の悪からも、自分の外にある悪からも、自分を守ることを学べるかもしれない。

この目的のために、「X」は、これまで一般の人々が十分に注意を向けてこなかった、ある種の神秘を明らかにしている。

濃密な物質の世界を貫き、それを越えて広がる「アストラル世界」が存在するということは、神智学そ

の他の文献において、すでに語られてきた。しかし、「X」は、その事実を、読者に実感させる。アストラル世界は、感情と欲望の世界だと言われている。

そして、人間は、訓練されていない目には見えない、きわめて微細な種類の物質から成る、自分のアストラル体、感情体、あるいは欲望体を通して、その世界とつながり、その世界の中で活動しているのである。

さらに、その内側と向こう側には、思考の世界があると言われている。そして、人間にはまた、その世界と接触し、その中で働くための思考体もあるという。

そして、そのようにして、一つの層から、さらに次の層へと進み、ついには、人は、形のないもの、宇宙そのもの——言い換えれば、純粋な神性——へと

達するのである。

「X」が描いている邪悪なアストラル存在とは、アストラル世界に住む存在たちである。そのうちのある者たちは、物質の世界に肉体を持っていない。

ほかの者たちは、人間のアストラル的な自己であり、多かれ少なかれ独立した存在となっていて、眠っている間に、私たちの目には見えない世界を、あちこちと歩き回っている。彼らは、この戦争において、活動してきたのである。

また、土、空気、火、水という四元素に属する存在たちもいると言われている。彼らは、人間とは異なる道筋に沿って進化している。その中には、親切な者もいれば、悪意ある者もいる。こうした元素の存在については、パラケルススの著作の中に、多くの情報を見いだすことができる。彼らもまた、この戦

争で活動してきた。

さらに別の、より高い存在たちは、物質の世界、アストラル世界、思考の世界のすべてにおいて働いており、さらに私たちの認識を越えた、もっと高い世界においても働いている。もし、こうした存在たちの一部の善なる働きがなかったなら、人類は、自らを滅ぼしていたか、あるいは滅ぼされていたであろう。

「X」は、大戦によって生じた憎しみの感情と苦しみ、この時期のアストラル世界を、非常に不快な滞在場所にしてしまっている、と言っている。ローマ・カトリック教会の煉獄は、「X」が描く、死後に試練を受ける場所と同じものである。教会は、大きな知識を持っている。

善と悪は、互いに反対でありながら、補い合う力と

呼ぶことができる。一方は、宇宙の法則——別の言い方をすれば、神の意志——と調和して働き、もう一方は、その法則と調和せずに働く。

読者の中には、「X」が黒魔術について語っていることに衝撃を受ける人もいるかもしれない。

しかし、彼は、人々を驚かせるために書いているのではなく、彼らを守り、教えるために書いているのである。

迷信は、宗教の暗い側面だと言われてきた。

しかし、迷信とは、見下して片づけるものではなく、理解されるべきものである。すべてのものは、理解されるべきなのだ。偉大な心理学者や科学者たちは、もはや、こうした問題を、自分たちが研究するには値しないものだとは考えていない。

ウィリアム・ジェームズ教授、オリヴァー・ロτζジ卿、バラデック博士を見てほしい。現在、神秘現象を研究している著名な科学者たちの名を挙げれば、小さな名簿ができるほどである。私が、自分は目に見えない世界の地図を作ろうとしているのだ、と認めるとき、私は、慎ましくも、立派な仲間たちの中に加わっているのである。

「X」は、若きドイツを誤った方向へ導くうえで、ニーチェに影響を与えた「黒いヴェールをかぶった者」について語っている。おそらく、この世界に大きな影響を与えた力ある男女の背後には、その人を導く、目に見えない存在がいたのだろう。

それは、光に包まれた者か、あるいは、黒いヴェールをかぶった者かのどちらかである。この問題は、実際的にも理論的にも、興味深い。靈感は、魔術と

同じく、黒いものにも、白いものにもなりうる。

ジャンヌ・ダルクの「声」は、今日なら、透聴現象と呼ばれるだろう。歴史によれば、その声は、彼女を、フランスの救済者として、より力ある存在にしたのであって、決して弱くはしなかった。

マルティン・ルターは、「悪魔」に向かってインク壺を投げつけた。しかし、ルターが幻を見たからといって、宗教改革が、それだけ劣ったものになったわけではない。タルソスのサウロもまた、記録者たちを信じるならば、幻を見たのである。

「X」は、自分自身の師——「マスター」——について語っている。私が知っていた、あのカリフォルニアの判事と、私が普段、ありふれたことをおしゃべりしている大多数の男女とを比べると、人間は、「X」よりも、さらに先へ進むことができるかもしれ

ない、という可能性を認めるのは、私には難しいことではない。

ただ、そのように進もうと決意しさえすれば。もし、「X」が、七十年にも満たない人生で、あれほどの存在になれたのなら、永遠を前にしている私たちにも、希望はある。

この『戦時書簡』の第二の大きな思想は、人類の兄弟愛であるように思われる。

世界はこれまで、はっきりと区別されるいくつかの時代を経て進歩してきた。そして、それぞれの時代には、自ら独自の色合いを刻みつけた、支配的な民族が存在した。

「X」は、今やアメリカ合衆国において、新しい民族——いわゆる第六の民族——が生まれようとして

いる、と語っている。

もしアメリカが、この考えを一つの実行可能な仮説として受け入れるなら——「ドイツ、万歳、すべてに優先する」というような考えではなく、「すべてのもののの上に立つアメリカ」ではなく、「すべてのもののためのアメリカ」という考えとして——アメリカは、ドイツが戦争機械を築き上げたように、平和の機械を築き上げることができるかもしれない。

もしアメリカが、ドイツが世界支配を前提としてきたのと同じ徹底さで、理想的な兄弟愛を前提にして取り組むなら、次の世代には、その成果を示すことができるかもしれない。アメリカには、さまざまな民族が混ざり合っているので、どのような精神的実験に必要な材料もそろっている。アジアとヨーロッパは、興味をもってそれを見守るだろう。イギリス、ドイツ、フランス、さらには、内面は精神的でありな

がら、表面だけが物質的である日本、そして、おそらく何よりもロシアは、そのように公然と掲げられた目的を尊重するだろう。この戦争が終わるころには、世界は、普遍的な兄弟愛を歓迎する準備ができるほど、十分に苦しみを味わっているのかもしれない。

すでにアメリカには、その考えに喜んで従おうとする運動が存在している。「X」は、ウッドクラフト運動について語っている。それは、おそらく十万人ほどの男性と少年、そして少数の女性からなる、ゆるやかに組織された団体である。彼らは、余暇の中で、都市では得られない兄弟愛を求めて、自然とキャンプファイヤーへと立ち返っている。

「X」は、自分には、将来果たすべき別の使命があると言っている。私は、その使命が何であるのかも知らないし、そこに私自身が関わるのかどうかも分

からない。しかし、もし彼が、いつの日か、それはウッドクラフトの目的に関係するものだとして私に告げたとしても、私は驚かないだろう。

しかし、私は何か月ものあいだ、この戦争の本と共に過ごしてきたにもかかわらず、いまだに、それを全体の中で見渡すことができず、その価値を測ることもできない。

私は、この本を世界に差し出す。それは、この本が世界のものであるように思われるからであり、また、『生ける死者からの手紙』の読者たちから私に届いた何千通もの手紙の中で、非常に多くの人々が、「X」のさらなる文章を求めているからである。最初の本は、現在、ヨーロッパの四つの言語に翻訳されつつあり、ほかにも翻訳の申し出が来ている。

私は、多くの国々で、この本について親切な手紙を書いてくださったすべての方々に感謝したい。

それは、私自身のためというよりも、むしろ、その人たちのためにこそ、私は、「X」がこの大戦について何を語るのかを聞くという、与えられた機会を受け入れたのである。

あの世からの真実の通信を受け取ること——もちろん、そのような通信が可能であると、私は考えざるをえないのだが——には、筆記者の側に犠牲が伴う。

たとえ、田舎の家の守られた静けさの中であってもそうである。それを、ニューヨークのような巨大で騒がしい都市で、複雑な社交生活の気の散る環境の中で、しかも、このような戦争のさなかに行うこと——その恐怖によって、「感受性の強い人」は特に

強く揺さぶられるのであるが——さらに、親ドイツ派と連合国支持派とが対立する環境の中で行うことは、自己抑制を学ぶ訓練であった。

しかし、戦争は永遠には続かない。そして、いつの日か、喜びは再び世界へ戻って来るだろう。

1915 年 9 月 ニューヨーク

エルザ・バーカー

『War letters from the living dead
man(生ける死者からの戦時書簡)』

第一の手紙

「X」の帰還

遠い星の中で、私は命令を聞いた。

「地上へ戻り、愛と憎しみの神秘を学べ。」

私は、自分がどこへ向かうのか知らなかった。しかし、命じられたとおりに進んだ。

私が地上に近づくと、怒りに満ちた存在たちの軍勢が、私の行く手を阻もうとした。

「お前は、ここで何をしているのだ？」と、彼らは叫んだ。

「ここは我々の領域だ。我々は、いかなる干渉も許

さない。」

私は師を呼んだ。すると、師は私のそばに立った。
その師でさえ、私たちの前に立ちはだかる力の強大さに、厳しい表情をしていた。

「時が来たのだ」と、師は言った。
「長い準備ののちに、それは突然やって来たのだ。」

怒りは宇宙的な力であり、憎しみは宇宙的な力であり、愛は宇宙的な力であり、恐れもまた宇宙的な力である。

あなたは、愛とは美しい感情にすぎないと思っていたのか。憎しみとは、単なる不快な感情にすぎないと思っていたのか。私は、怒りと憎しみと愛と恐れ
の源を見てきた。

そして、その体験が、人間たちに、人類の内側と背後で働いている力を理解させる助けになるかもしれないので、私は、再び世界のために書こうと努力しているのである。

この戦争は、単なる人間の戦争ではない。それは、天使たちの戦争ですらない。その根は、必要そのもののの中にある。

新しい人類が生まれなければならない。そして、人類もまた、人間と同じように、その前にいた者たちの苦痛と血の中から生まれる。しかし、「イヴの呪い」が、彼女が悪の嫉妬深い蛇の声に耳を傾けたことから生じたように、この呪いもまた、世界の内側と周囲にいる悪の力から来る、嫉妬と憎しみのささやきに、人類が耳を傾けたことによって、世界に降りかかったのである。

私は、その力を、姿を持ったものとして見てきた。
私は、それらと向き合い、格闘してきた。私は、戦ってきたからこそ強いのである。

私は、地上で戦争が宣言される、およそ五週間前に、この世界へ戻って来た。しかし、地上の上方に広がる空間では、すでに戦争は始まっていた。各国が長いあいだ軍備を整えていたように、外にいる存在たちもまた、準備を整え、武装していた。私を迎えた悪魔たち——そう、彼らは悪魔だった——の目には、勝利の色が浮かんでいた。

始まりは、すでに作られていた。怒りの種が、オーストリアの心にまかれていたのである。そして、その種は、収穫の 때가近づいていると感じていた者たちによって、地の中で水を与えられていた。

あなたは、善と悪とは、人間の魂が進歩し続けるか

ぎり、共に存在するものだということを理解しなければならない。善の力と悪の力とは、互いに補い合うものである。それらは、実際に姿を持っており、自我を獲得している。そして、自分たちの働きに集中するその姿は、人間の中で最も偉大な天才たちでさえ恥じ入るほどである。

しかし、それらもまた、意識的であれ無意識であれ、私たちが「神の意志」と呼んでいる、あの宇宙の意志の僕なのである。

私は、新たに死んだ人々が、静かに自分の寢床で息を引き取り、隣の部屋へ入って行くようにアストラル世界へ出て行ったという話を、あなたにしていたころから、多くを学んだ。最近、百万人もの魂が、この世を去った。衝撃を受け、引き裂かれ、傷つけられ、自分自身の憎しみと、自分たちを滅ぼそうとした者たちの憎しみによって、打ちのめされなが

ら。

この八か月のあいだに、たとえ静かに死んだ者たち
でさえ、哀れんでやってほしい。彼らは、苦しみの
領域を通り抜けて来たのである——通り抜けるこ
とができた者たちは。多くの者は、その下にとどま
り、戦争で死んだ者たちと共に、渦の中で、ぐるぐ
ると回され続けている。

もし、私が今、この時に、あの世の秘密を明かすこ
とに、大きな目的と、大いなる使命の確信を持って
いなかったなら、私は、星々のあいだを旅して戻っ
て来てから見たこと、そして時には自分も加わった
ことを語って、あなたの心を苦しめるようなことはし
なかっただろう。

もし慰めが必要なら、こう考えて、自分を慰めてほ
しい。人類は今、一つの通過儀礼をくぐり抜けてい

るのである。

利己心のない熱意に仕えて死んだ者たちは、やがて再び肉体を得て、地上で、自分たちの奉仕の実りを受け取るだろう。

しかし、死んだ者すべてが、そのような熱意に満たされていたわけではない。多くの者は、憎しみそのもののために憎んでいた。失敗したのは、その者たちである。

もし、あなたが彼らを哀れみたいなら、哀れんでもよい。しかし、彼らのことは、あまり考えないほうがよい。

彼らは、私がこの世界へ戻り、愛と憎しみの神秘を学ぶよう命じられたとき、私の行く手を阻もうとした悪魔たちの、自ら進んで従った犠牲者なのであ

る。

愛！ そう、この戦争によって生まれた愛は、地上が二千年のキリスト教の歴史の中で知ってきた愛よりも、はるかに大きい。

なぜなら、人類は、ついに目覚めたからである。そして、人類が再び眠り込まないようにすること——それこそが、私が再び、私とあなたたちとの間を隔てている壁を突き破って戻って来た目的なのである。

1915 年 3 月 5 日

第二の手紙

敷居の上の悪魔

ここにいた悪魔の中に、一人、悪魔たちの指導者と思われる者がいた。彼は、ほかの多くの悪魔たちとは違っていた——より個性的で、より自我に満ちていた。

私たちが向かい合って立っているとき、私は彼と会話を始めた。それは、一つには私の好奇心を満たすためであり、もう一つには、彼の警戒を解くためであった。

「お前は誰だ？」と、私は尋ねた。

「お前は、お前たちの仲間の中で、支配者のように見える。」

彼は誇らしげに背筋を伸ばした。

「そのとおり、私は支配者だ」と、彼は言った。

「地上でも、こちらでも、支配者なのだ。」

「地上でもか？」と、私は問い返した。

「そうだ、地上でもだ」と、彼は答えた。

「なぜなら、私は、人間たちの中で偉大な人物である一人の男の、より深い自己だからだ。その男は、他の者たちが彼の意志に従うように、私の意志に従うだろう。」

それから彼は、私を驚かせるような主張をした。

しかし、それをここで繰り返すことは控える。

「もし、お前が、まだ生きている人間の悪しき自己なのだとしたら」と、私は問いただした。

「どうして、お前は、こちらで独立した存在として立ってられるのだ？ どうして、その人間から離れて存在できるのだ？」

「お前は、かなり無知だな」と、彼は私に言った。

「私は、多くのことについて無知だ」と、私は認めた。

「できるだけ、私に教えてくれ。私は、知識に飢えている。」

「では知るがよい」と、彼は尊大に言った。

「私を縛りつけていた地上の姿から、私は抜け出したのだ。彼が、私の支配を認め、私を、自分の天才として崇拝したときに。」

「彼がお前を自由にしたのか？」と、私は尋ねた。

「彼は、私を、自分のマスターとして認めることによって、私を自由にしたのだ。彼の知識は、お前よりもさらに乏しい。そして、彼は、私が軽蔑している名で私を呼んだ。しかし、私が支配しているかぎり、どのような名で支配しようと、私は気にしない。いや、ほとんど気にしない」と、彼は言い直した。

「だが、このようなことは、お前には難しすぎる！」

「私は、お前が思っているより深い存在だ」と、私は言った。

「そして、私は以前にも、お前のような者たちに会ったことがある。」

「お前が会ったのは、私と同類の者たちかもしれない。しかし、私に等しい者ではない。私は、霊たちの王なのだ。」

「お前の王冠には気づいていた」と、私は言った。

「それには、見覚えがある。」

この対話のあいだ、師は黙ってそばに立っていた。しかし、今、私は、言葉にしない問いを胸に、師の方を向いた。師は、私を少し離れた場所へ導き、こう言った。

「人が、自分自身をあまりにも高く持ち上げるとき、その人は、自分の内にいる悪魔を解き放つ。人はし

ばしば、自分が悪魔を支配していて、目に見えない世界へ使いに出しているのだと思う。しかし、実際に命じているのは悪魔の方であり、人間の命令は、その響きを繰り返しているにすぎない。」

「そして、そのことを私に教えるためには、この地獄の光景が必要だったのか！」と、私は叫んだ。

「お前が、いずれ理性や教えによって学んだであろうことを、お前は今、実例によって学んでいるのだ」と、師は言った。

「お前は、本当に、一人の偉大な支配者の悪しき自己を見たのだ。」

「それは、非常に強力だ」と、私は認めた。

「それは、しばらくのあいだ、さらに力を増すだろ

う」と、師は言った。

「そして、そのあと、ゲヘナへ行く。」

「それは、いつゲヘナへ行くのか？」

「戦争が、こちらで力を失い尽くしたあと、世界に平和が戻るときだ。しかし、こちらで戦争が終わるのは、地上に平和が戻るより先になる。」

「どのような戦争が、まさに始まろうとしているのか？」と、私は尋ねた。

「すべての時代を通じて、最大の戦争だ」と、師は言った。

「こちらでも、地上でも、すべての時代を通じて、最大の戦争だ。」

「それは、いつ始まるのか？」

「お前が見たように、こちらでは、すでに始まっている。もし、お前が遠くへ行っていなかったなら、お前はもっと早く、それを知っていただろう。」

「私は、たしかに遠くへ行っていた」と、私は言った。
「一人の天使が、多くの星を私に見せてくれた。そして、私は多くを学んだ。」

「その天使は、お前が、学ぶだけでなく働くことができるほど、十分に強くなり、十分に休息するまで、お前を世界から遠ざけていたのだ。」

「では、私の仕事は、どこにあるのか？」と、私は尋ねた。

「多くの場所にある」と、師は答えた。

「しかし、まず、お前は、ヨーロッパの上に広がるア
ストラル世界を突き進み、危険にさらされている友
人たちを救わなければならない。」

ヘレスポントス海峡を泳いで渡ることなど、あの悪
魔の海を泳いで進むことに比べれば、小さな仕事
にすぎなかった。しかし、私は突破した。一年前で
あれば、私は、それを成し遂げられなかったかもし
れない。なぜなら、善の力は押し負かされていたか
らである。善と悪にも、海に潮の満ち引きがあるよ
うに、満ち引きがある。悪は、満潮に達していた。

私は、危険にあった一人の友人を救い、もう一人
の友人が安全であることを見届けた。

憎しみの海に戻ったとき、私は、ほとんど力を使い
果たしていた。そのとき、長いあいだ私を導いてく

れていた、あの美しい存在——あの天使——がやって来て、私の耳に何かをささやいた。それは、志を刺激する言葉であった。

「もし、お前が自分の務めに失敗しなければ、お前は、この大いなる闘争の歴史家になれるかもしれない」と、その存在は言った。

「志」という言葉に驚かないでほしい。志には、さまざまな種類がある。そして、もし、その背後に愛があるなら、自分自身が役に立ちたいと心から願うことも、ほかのどの言葉で呼ぶのと同じように、「志」と呼んでよいのである。

1915 年 3 月 6 日

第三の手紙

保証

私たちのこの書きものの、まだ初めの段階で、あな

たに伝えておこう。善の力は、一か月前に、悪の力を打ち負かした。そして、こちらでは、すでに決着はついている。いったん動き始めた力は、やがて使い果たされ、世界には平和が戻って来るだろう。

1915 年 3 月 10 日

第四の手紙 理解への道

これ以上、恐ろしい話を語る前に、私は今、あなた

に確かに伝えておきたい。そうした恐怖の中から、この存在の時代において、世界がこれまで知らなかったような美しさが生まれる、ということ。

それは、すぐには訪れない。多くの調整が必要だからである。しかし、その道は、すでに、それを歩もうとする者たちのために開かれている。

この戦争は、墮落したままの人類についての、奇妙な注釈である。戦っている双方が、自分たちこそ正しいのだと声高に主張し、相手を激しく非難している。すべての争いと同じように、一方には、もう一方よりも大きな誤りがある。しかし、勝利する側——そして、それは、より誤りの少ない側である——は、自分たちの大いなる未来へ進んで行く前に、自分たちの敵を理解し、そして赦さなければならない。

国際的な組織は、今のところ失敗しているとはいえ、私は、国際組織そのものに失望してはいない。平和を願う人々、社会主義者たち、そして、普遍的な兄弟愛という理想を、さらに高く掲げている人々は、ただ、この衝撃によって、一時的に機能を失っただけなのである。

今この瞬間でさえ、この争いの最中にあっても、あなた自身の思いと愛を、あなたが敵だと感じている国へ向けてみなさい。その国を理解しようとしなさい。そして、「あの国は悪だ」と自分に言い聞かせることによって理解しようとしてはならない。それは理解ではない。悪は、すべての人間の中にある。その国を理解しようとするなら、しばらくのあいだ、その国になってみなさい。その国の立場に身を置きなさい。たとえば、それが自分自身の過ちによるものであったとしても、自分一人だけが、世界全体を敵に回して立っているとしたら、どのように感じるかを感じ

てみなさい。

あなたは、「自分なら、世界が自らを守るために、自分に敵対せざるをえないような立場に、自分を置くことはなかっただろう」と考えて、少しためらう。しかし、本当にそう言い切れるだろうか。

その国の意識の中に入ることによって、あなたは、まさにそのような立場に自分を置くのである。そして、私は、あなたに、それを一時的に行うよう求める。なぜなら、あなたが、やがて広く行き渡らなければならない、あの国際的な理解と赦しの中心、始まり、そして、ほんの小さな一部分になるためである。その理解と赦しが、ある程度まで広がらないかぎり、長いあいだ語られながら、常に誤解されてきた「普遍的兄弟愛」は、この兄弟愛のない世界の中に、自らの居場所を見つけ始めることさえできないのである。

もし、長いあいだ、自分たちはこの理想のために立っているのだと信じてきた、あらゆる人々の集まりが、今、お互いに和解しようとするなら、もし、自分たちの理想の実現方法がどれほど違っていても、お互いの理想そのものを認めるなら、たとえ今であっても、この戦争を短くし、国家の名誉と忠誠についての、互いに異なる理想のために死ななければならない人々の数を減らす力が、動き始めることができるだろう。

憎しみから愛へ、批判から理解へと向かう反動が、正式な平和宣言のあとに訪れる。そのとき、今は争い合っている、これらすべての霊的な団体も、望みさえすれば、調和して働き始めることができる。もし、その成員たちが、自分たちの狭い誇りと、過去にお互いに向かって言ってきた、あらゆる辛辣な言葉の記憶のために——もし、自分たちが言ってきた

たことを撤回するのを、あまりにも卑小に恐れていて、公に、お互いを兄弟として認めることができないなら——少なくとも、心の中では、そのように感じ始めなさい。やがて、もっと大きな勇気が訪れるかもしれない。そして、ある大胆な指導者が、自分の仲間たちに向かって、かつては信頼と愛をもって共に働いていた相手たちも、それぞれの見方に従って、その理想に仕えていようとしているのだ、と語る日が来るかもしれない。

この考えを、さらに詳しく述べたとしても、あなたにとって、これ以上分かりやすくなるとは思わない。そして、これらの言葉は、私が語らなければならない物語の緊張の中に置かれた、一つの間奏であり、一つの息抜きにすぎないのである。

1915 年 3 月 13 日

第五の手紙

アストラルの怪物たち

戦争が宣言される二週間以上前、あなたが北海を

渡ったとき、私があなたのそばにいたことを知って
いただろうか。あなたは、抗いがたい、圧倒的な衝
動に突き動かされて、ヨーロッパ大陸を離れ、自分
と同じ血を引く人々のもとへ、イギリスへ渡った。そ
のとき、私はあなたのそばにいた。

しかし、あなたが友人たちのもとで安全になったあ
とも、私はそこにはとどまらなかった。私は、戦争を
決定づける中心へ戻った。どれほど反対の主張が
なされようとも、さらに南の地方で、一羽の無責任
な鳥が産み落とした卵を、かえしたのはその国だっ
た——その国へ、私は戻ったのである。

私は、「無責任」と言っただろうか。自分の行為に責
任を持たないのは、狂人だけである。むしろ、「惑わ
されていた」と言うべきだろう。惑わされた魂が、す
べて狂っているわけではないからである。オースト
リア大公を殺したその手は、ほかの多くの手が利

用されてきたのと同じように、進歩に逆らう力によって利用されたのである。その男をも哀れんでやりなさい。そして、原因と結果の法則に、当然のように彼を裁かせなさい。その法廷には、えこひいきはなく、さらに上の裁きへ訴えることもできないのだから。

私は、ドイツへ戻った。この文章では、物事をありのままに呼ばなければならない。もし、私が誰かの感情を傷つけるとしても、私は、人の感情を傷つけるために書いているのではない。事実は事実であり、もっともらしい弁解によって、それを変えることはできない。

私は、ドイツへ戻った。私は、戦争についての協議に耳を傾けた。私は、命令が下されるのを聞いた。なぜなら、私のアストラルの耳は、特別に強くされているため、人間の世界で話されていることを、非

常にはっきりと聞くことができるからである。私のアストラル体は、非常に微細ではあるが、よく油を差された機械のようなものであり、私の意志の、ほんのわずかな動きにも応える。

しかし、すべてのアストラル体が、私のものと同じだと考えてはならない。忘れないでほしい。私は、偉大なマスターの弟子であり、そのマスターの目的は、彼自身の目的ではなく、彼が仕えている進歩の法則の目的なのである。

私は、第二の手紙であなたに書いた、あの怪物を再び見た。ドイツ皇帝が、地獄の扉を開くばねに触れることをためらった、と言う人々は、真実を語っている。戦争の支配者は、自分が平和の支配者であったという記録に、ある種の誇りを持っていた。そして、彼は、自分の前にある責任に震えていた。しかし同時に、その責任に酔いしれてもいた。その

責任は、すでに過度に高ぶっていた彼の自我を、さらに高めたのである。

彼をも哀れんでやりなさい。しかし、彼に対して感傷的になってはならない。意志は自由である。彼は、自分の意志を悪しき霊に委ねることで、自分の自由意志を行使していたのである。しかし、彼の目は、夜には涙で濡れていた。そして、彼は、自分が神と呼んでいる力に祈っていた。神という言葉は、彼の唇の上だけでなく、彼の内なる思いの中にもあった。神という言葉は、人によって、さまざまな意味を持つのである。

また、その悪霊たちの集会には、特定の間人間についているのではない者たちも、多くいた。巨大な元素の存在たちがいた。リットンが、その神秘小説の一つの中で、原始の荒野で、黒魔術師が描いた魔法陣の裂け目を通して、一つの巨大な足が踏み込ん

で来る様子を書いたとき、彼は、自然の中の事実を語っていたのである。

自然！ 視野の狭いあなたには、その言葉の意味が分かっていない。あなたが学んできたことのすべてをもってしても、自然が用いている文字の、まだ最初の文字すら学んでいない。その文字を学びなさい。その言葉を学び始めなさい。化学を学び、生物学を学び、電気を学び、そして、物質の振動の神秘を、あなたが意識して到達できるかぎり、多くの層にわたって学びなさい。未来の知識は、そこにある。人間は、まだ自然を征服し始めたばかりなのだ。

あなたが、物質の世界で見たことのある、どのような憎しみの表現も、昨年、その時が訪れたときに、地上へ解き放たれた憎しみの、弱々しい模倣にすぎなかった。その時とは、いくつかの惑星の軌道

が、その影響を重ね合わせ、普段は行動の自由をもっと制限されている存在たちが、自由に通り抜けられるようになった時である。

あの巨大な足！ 私は、その足を持つ偉大な存在を見た。それは、空気存在であった。しかし、それと結びついていたのは、大地の存在たちであり、さらに、太陽の光が決して届かない、物質のさらに深い層から来た怪物たちであった。

その存在の一つを、私に描写させてくれるだろうか。もう今は、それを恐れる必要はない。なぜなら、それは、惑星の奥深くにある巣へと追い返されたからである。青みがかった、袋のような、醜い体をしていた。長くて太い尾には、剛毛が生えていた。腕と脚は、細長い袋のようであり、頭は、その怪物のような首のひだの中に半ば埋もれた、さらに大きな袋であった。しかし、その目は！ そこには、脂肪

のようなものはまったくなかった。目は大きく、丸く、見開かれ、一瞬の中に凝縮された千年分の悪意を燃やしていた。青白い目であった。もし、あなたが悪意に満ちた黒い目を恐れるなら、それ以上に、悪意に満ちた青白い目を恐れなさい。想像もできないような苦しみと、自分より上にあるすべてのものへの憎しみが、その存在の目には表れていた。それは、もっとも低いアストラルの領域から、毒を吐き、よだれを垂らしながら、惑星の表面へ向かって、それを浴びせていたのである。その大きさは、途方もなく巨大であり、その口には歯がなく、形もなかった。その存在を保っていた栄養が何であったかは、私は語らないことにする。

もう一度言うが、それを恐れてはならない。今、その存在は、地上の表面へ手を伸ばすことはできない。その存在の命も、終わりに近づいている。しかし、その形のない口から吐き出された、アストラル

の病の種は、そうしたものに対処する方法を知っている者たちの、あらゆる努力にもかかわらず、増え続けている。

空気の存在たちは、たとえ邪悪であったとしても、不潔ではない。そして、彼らのうち、本当に邪悪な者は、ほとんどいない——人間に対して親切であったり、無関心であったりする者たちに比べれば、ごくわずかである。

火の存在たちの中でも、より復讐心の強い者たちは、まだ自分たちの存在を感じさせるかもしれない。というのも、目に見えない領域での大きな戦いは、すでに勝利しているとはいえ、なお、散発的な試みは続けられるからである。

しばらくのあいだ、あなたは今いる場所にとどまりなさい。ヨーロッパには、軍隊の危険を超えた、別

の危険が、なお迫っている。待ちなさい——そして祈りなさい。なぜなら、祈りは、アストラルの力であり、その作用は、より高いアストラルの領域にあるため、遠くまで及ぶからである。

待ちなさい——そして祈りなさい。

1915 年 3 月 15 日

第六の手紙

大公

この戦争を引き起こすきっかけとなった、その暗殺

された人物が、死後どのような思いを抱いていたかを、あなたは考えたことがあるだろうか。いや、あなたは考えたことがない。しかし、私は考えた。そして、私は彼を探し、見つけた。

ほかの者たちもまた、彼を探していた。死者たちの魂、そして、地上で眠っている人々のアストラルの魂である。

たしかに、彼の死は、肉体においても、霊においても、安らかなものではなかった。

長いあいだ、暗い雲のように彼の上に垂れこめていた暗殺への恐怖は、たとえ彼が、あの殺人による襲撃によって突然この世を去ることがなかったとしても、死後に、暗く荒れた時期を迎えるよう、彼をあらかじめ傾けていた。これは、私たちが恐れているものが、遅かれ早かれ、私たちを襲うという法則

の、もう一つの例であった。

最初、彼は暗闇と、ぼんやりとした悪夢のような、眠りに似た状態の中へ入っていった。それから、しだいに、よりはっきりとした意識へと目覚めていくにつれて、彼は、苦痛と不安、そして、魂の嘆きとともに目覚めた。恐れていたことが、ついに起こってしまった。そして、自分が肉体の外にいることを知り、彼は自分の体を探した。

いつもの葬儀の儀式は、彼にとって、ほかの多くの魂の場合よりも、さらに陰惨なものであった。なぜなら、死によって与えられた、ほんのわずかな視野の広がりによって、彼は、自分の個人的な死よりも、はるかに大きなことが、この変化に結びついていることを悟ったからである。

彼は、自分の死を引き起こした悪しき存在たちが

ら、攻撃されることはなかった。彼らは、彼に対して、これ以上何を望んでいたというのだろうか。彼は、すでに彼らの目的に役立っていたのである。

もし、あれほど多くの曖昧さや、入り組んだ誤解と疑惑が、その殺害をめぐって集まるような人物が、ほかにいたなら、おそらく、その別の人物が、彼の代わりに苦しんでいただろう。しかし、彼ほど、その殺害が、その目的にうまく役立つ人物が、ほかにいたのだろうか。彼ほど、その人間関係によって、さまざまな力が集中する位置に置かれていた人物が、ほかにいたのだろうか。ドイツ皇帝との関係、彼が好意を持っていなかった人々と、その一族との関係、現在の後継者とロシアとの関係——こうしたことすべて、そして、ほかにも多くの誤解、疑い、混乱の原因が、騒乱の理想的な中心を作り上げていたのである。

そして、その魂は、自分が世界から追い出されたことへの怒りと失望に加えて、この騒乱をも感じていた。彼の子供たちへの不安も、小さなものではなかった。というのも、彼らは、周囲の一族との関係において、特別な立場に置かれていたからである。

あのような出来事を理解できる、あらゆる男、女、子供の思いが、一つの魂へ向かって集中するところを、想像してみなさい。怒り、愛、悲しみ、好奇心、疑い、不安——世界のほとんどすべての国の、ほとんどすべての人の思いが！ それは、彼のアストラル体を完全に砕いてしまうほどのものであった。

普通、支配者が死ぬと、その人には、愛する思い、あるいは、嫌悪の思いが向けられる。しかし、混乱した思いが向けられることはない。その人の役割は終わったのである。王は死んだ。王よ、永遠なれ！

しばらくのあいだ、この大きな王位の継承者は、自分の愛していた伴侶からさえ引き離されていた。彼には、頼るべきものが何もなかった。あらゆる方向から、そして、あらゆる強さの段階で、思い、思い、思いが彼に押し寄せ、彼は、その思いによって引き裂かれ、苦しめられていた。

煉獄にいる彼の魂の安息を願ってささげられた祈りでさえ、愛から生まれるそのような祈りが通常持つような力を、発揮することはできなかった。それらは、彼に向かって押し寄せる思いの奔流の中では、ただの一滴にすぎなかった。そう、私は、「彼に向かって」と言う。なぜなら、彼は長いあいだ、その思いの嵐の中心にとどまっていたからである。

以前、私が世界のために書いたときに話した、あの助け手たちの集団でさえ、彼をあまり助けることが

できなかった。なぜなら、彼ら自身もまた、アストラルの領域で戦争を起こしていた悪しき存在たちから、攻撃されていたからである。

普通、一人の人間の死は、世界にほとんど影響を与えない。その人を愛していた者たちは悲しみ、その人を嫌っていた者たち、あるいは、その死によって利益を得る者たちは喜ぶ。しかし、この人物は、戦争の燃え上がる松明を、その霧のような手に持って、この世を去ったのである。

しばらくして、彼は、自分の友人であるドイツの支配者を探し、見つけた。しかし、その支配者は、彼を見ることができなかった。ただ、部屋の中に、何かの存在を感じていただけである。彼は、半ば恐れていた。これは、何の存在なのだろうか、と彼は思った。それは、自分自身の靈感の源なのだろうか。それは、自分の「偉大な運命」の時が来たこと

を知らせるために現れたのだろうか。彼の弱さから来るためらいは、見るに堪えないほど情けないものであった。しかし、彼の強さ——彼の悪しき自己の強さ——は、その弱さを踏みつけ、戦争の準備は続けられていった。

大公の魂は、あまりにも混乱していたため、その協議において何らかの役割を果たすことはできなかった。彼は、生前は強い人間であり、やがて再び強くなるだろう。しかし、目に見えない影響を及ぼすことができたはずの時期に、彼は何の影響も及ぼさなかった。彼は、自分の姿を見えるようにしようと努めた。そして、少なくとも一度は、それに成功した。

そう、私は彼と話し、助言を与えた。しかし、その時、私には、ほかにもやるべきことがあった。そこで私は、彼を、彼自身の教会の司祭に託して去った。

その司祭は、穏やかでありながら強い魂であり、その騒乱の中であって、岩のように立っていた。

私が、大公に会ったことに触れたのは、いつの日か、この文章を読むことになる一人の人のためである。私は、多くの慰めを与えることはできない。しかし、その人は、あの強く静かな司祭のことを知って、喜ぶだろう。そして、私は、その人にした約束を果たしたことになる。その約束は、これまで、こうした形以外には、どうしても果たすことができなかったのである。

1915 年 3 月 17 日

第七の手紙

「選ばれた民」

諸国は、互いに戦争を宣言し始めた。私は、二十人

の仲間たちとともに、ポツダム宮殿に何時間も立っていた。そして、沈黙した意志の力によって、ドイツ国民の中から皇帝へ向かって押し寄せていた、戦争への意志の圧力を弱めようとしていた。しかも、人々は、ドイツは戦争を望んでいなかったと言うのだ！

「その日」は近いように思われ、戦争は勝利を意味するように思われていた。

今では、ドイツは、イギリスが戦争に加わることはできないと信じていた、と言うのは、ありふれた話になっている。そして、もしイギリスが戦争に加わらなかったなら、この文章が書かれている時点までには、すでに決着はついていただろう。ドイツ海軍は、フランス海軍と戦い、それを打ち破っていただろう。

あなたは、自分の気に入らないことを私が言うたびに、たじろぐのをやめたほうがよい。私は、自分が知っていることを述べている。あなたは、ただ、私の言うことを書き留めているだけなのだ。

私と二十人の仲間は、ポツダムとヴィルヘルム通りにおいて、私たちの意志の力を集中させた。もちろん、私たちは、結果がどうなるかを知らなかったわけではない。私たちは知っていた。この戦争は、星々の中に書かれていたのである。しかし、兵士が、その日には敗れると知っていても、自分の務めを果たすように、私たちもまた、戦争の悪魔たちに立ち向かって、自分たちの持ち場を守った。

もっとも偉大なマスターは、私たちと共に立っていなかった。そして、私は、彼がどこにいたのか知らない。おそらく、私たちには理解できない何かの仕事に当たっていたのだろう。もしかすると、さらに

遠い星々から来る、もっと恐ろしい力を食い止めていたのかもしれない。

いや、それは夢物語ではない。もっとも、それは一つの推測にすぎない。遠い星々にも、善だけでなく、悪が存在するのである。

もし、こちらで見守っていた者たちの抑える力がなかったなら、当時ドイツにいた外国人たちの多くは、手足を引き裂かれていただろう。

あなたは、戦争に狂った状態、憎しみに狂った状態について、何を知っているのだろうか。もし、あなたが今の人格のままで、それを感じる事ができたなら、あなたは、私のために今こうして書くことなどできないだろう。あなたが愛し、尊敬している人々のほとんどが、まだ終わっていない戦争の、一方の側にいるというのに。あなたは、憎しみを知性で理解

することはできるし、それを劇のように思い描くこともできる。しかし、あなたは、それを本当には感じていない。たとえ、その結果によって苦しんできたとしても。

ドイツ人の心の中にある最悪のものは、実にひどい——だが、私は、彼らを憎むなと言う。あらゆる民族の中にある最悪のものは、非常に悪い。しかし、ドイツ人は、この地上でもっとも大きないじめ者である。残酷な東洋の民族には、長い文化の年月の中で育ってきた抑制がある。しかし、ドイツ人が知っている抑制は、ドイツの法律の抑制だけである。彼が尊重するのも、ドイツの法律の抑制だけである。

彼には、善悪というものを、抽象的に考える感覚がない。もっとも、自分に近い者たち、自分の親族や同胞との関係において、自分にとって何が正しく、

何が間違っているかについては、非常に敏感であることが多い。しかし、その民族集団の外にいる者たちは、たとえ彼がどれほど洗練されていようとも、彼の名誉の基準の外に置かれているのである。

私が今話しているのは、その民族全体についてであり、長く外国に住んだために、世界の兄弟愛や、国際的な関係のより繊細な感覚を、いくらか身につけた少数の人々についてではない。

そして、このことも覚えておきなさい。ドイツ人は、憎むのと同じほど徹底的に愛することもできる。しかし、彼が愛せるのは、自分のものだけである。つまり、自分の延長、自分の第二の自我、別の姿をした自分自身を愛するのである。ドイツ人は、外国人の妻を愛することができる。もし、その妻をドイツ人に変えることができるなら。ドイツ人は、外国人の友人を愛することもできる。もし、その友人が、自

分の欲しいものを手に入れる邪魔をしないなら。

私は、あの感情的な民族に特有の、突然あふれ出す感情について語っているのではない。私は、彼らの表面的な親切さについて語っているのでもない。それは、感情があふれ出した結果にすぎないからである。

それでもなお、私は言う。この愛しにくい人々を愛しなさい。彼らを、その民族の中心から切り離され、ドイツでないすべてのものへ向かって、溶けるように応えるようになるほど、深く愛しなさい。世界は、ドイツ人の殻に石を投げつけても、その殻を本当に柔らかくすることはできない。彼らが、この戦争で打ち砕かれるとき、彼らは、弱くなったからといって、本質的に、より愛しやすい人々になるわけではない。彼らを理解しようとすることによって、彼らを愛しなさい。

思い上がり、自分を高く掲げるドイツ人が、自分の殻の外にも、自分の内側にあるものより優れたものが存在するかもしれないと理解するには、何十年もかかるだろう。

彼は、力だけを尊重する。彼は、より強い力によって征服されなければならない。そのあとで、より大きな力に対する、やむをえない敬意から、彼は、やがて、必要以上に自分を押しえつけようとはしない、その優しさの持つ、より高い正しさを見るようになるかもしれない。

私は、この戦争が始まって以来、ドイツの家庭の中に立ち入り、ドイツの男やドイツの女の心の中へ入り込み、しばらくのあいだ、彼らそのものになってきた。そして、私は、彼らを理解し、愛している。私は、彼らを称賛さえしている。なぜなら、彼らが、自分

たちの仲間に向ける献身は、計り知れないほど大きいからである。その力が、もし、いつか、本当の兄弟愛として、全人類へ向かって流れ出るなら、この人々は、本当に偉大になるだろう。それは可能なのか。人間の魂にとって、不可能なことはない。そして、この人々は、非常に人間らしいのである。

欠点は、彼らが誇りとしている教育の中にある。彼らは、自分たちこそが選ばれた民であると、自らに教え込んでいる。そして、戦争において、自分たちが選ばれた民ではないと知るとき、その衝撃の力そのものが、ドイツ人の魂の中心に立っている、自我の柱を倒してしまうかもしれない。世界は、その柱が、激しい音を立てて倒れるままにしてはならない。むしろ、その衝撃を、やわらげてやらなければならない——ただし、あまりにもやわらげすぎて、慈悲が戦争疲れと勘違いされることがないように。

世界の母には、扱いにくく、道を誤った子どもがいる。その子は、罰せられなければならない。しかし、家族の食卓につく席まで、拒まれてはならないのである。

私が、あなたにこれらのことを話したのは、もしあなたがたじろがないなら、次の手紙で、あなたに伝えなければならないことがあるからである。そして、それを受け取るには、強さが必要になる。強さと、慈愛——そのもう一つの名は、愛である。

1915 年 3 月 24 日

第八の手紙

コンゴの亡霊たち

私はポーランドに行き、セルビアにも行った。しかし

今、私はベルギーについて、そしてカルマ——民族のカルマ、古いカルマと新しいカルマについて書きたい。

＊倫理的な因果の法則。

侵攻してきたドイツ軍の背後には、彼らを殺人、略奪、破壊、暴行、放火へと駆り立てるものがいた。それは、活動の時を迎えた外なる広大な世界から来た悪魔たちだけではなかった。ドイツ軍の背後には、コンゴで苦しみを受けた、未発達で地上に縛られた霊たちの群れがいたのである。カルマ、常にカルマである！

世界は、ベルギーで何が行われたか、ドイツ人たちがそこで何をしたかを、ある程度知っている。

私は、男たち、女たち、そして小さな子どもたちが、何のためらいもなく殺されるのを見た。私は、殺さ

れた男の魂が、その男の妻を辱めていた兵士に飛びかかるのを目撃した。私は、母親の魂が、狂気に目がくらんだ獣のような者たちによって幼い娘が虐待されているとき、地上にいたならそうしたであろうように、手を握りしめて苦しんでいるのを見た。こちらの世界にいる一人の老人は、一人の兵士を何日も追い続けた。そして、その復讐がベルギー兵の銃剣によって果たされるのを見ると、そのドイツ兵の魂が肉体を離れた瞬間、再びそれに組みついた。二人は互いに引き裂き合った。その兵士は、自分がすでに肉体を離れたことに気づかず、まだ地上にいる敵と格闘しているのだと思っていた。

コンゴには、ヴードゥーと呼ばれるものが多く存在していた。その実践者たちは、死後、長い間眠りにつかない。彼らは目に見えない世界の中で活動を続け、悪しき準備をし、呪いを織り上げていく。彼らは流された血の周囲に集まり、そこから生命力を

吸い取る。そして、その生命力を、自らの意志を向けた相手に、悪と死をもたらすために用いるのである。

人が脳を脱ぎ捨てたとき、意志の力が弱くなると思っていたのか？ たしかに、選択の自由が少なくなるという意味では弱くなる。しかし、肉体の脳がその意志に結びついていた時にすでに定められていた選択を、そのまま追いつけることには、恐るべきほどの意志の力がある。

だが今、ベルギーの悪しきカルマは、すべて生き尽くされた。そして彼女は、新しい魂のように、時の前に立っている。

別の民族が、彼女の置いていった重荷を背負った。その重荷もまた、早く尽きるのだろうか、それとも遅くまで続くのだろうか。ドイツは、自らのまわり

に、悪しき原因によって織られた衣をまとった。その衣は、何世代にもわたって彼女にまとわりつき、その身を苦しめ続けるだろう。「つまずきが来るのは避けられない。しかし、そのつまずきをもたらす者には災いがある。」

民族のカルマは、マスターたちとアデプトたちに知られている。

イギリスのカルマ！ あなたは、イギリスのカルマについて考えたことがあるだろうか。たしかに、彼女は多くの過ちを犯してきた。古い国々が皆そうであるように。しかし、彼女は、自らを世界の意志に用いられるままにしてきた。彼女は、他のどの古い民族よりも、民族同士を結びつけるための道具となってきたのである。大英帝国が、偶然に集まった原子の寄せ集めだと思っていたのか？ 大英帝国は、ただ偶然にできたものだと思っていたのか？

そして今、大英帝国は、さらに用いられるかもしれない。彼女はベルギーにおいて用いられるかもしれない。私は、単にベルギーにいる彼女の軍隊の存在を言っているのではない。

マスターたち——世界の教師たち——は、この世界の恐るべきカルマを食い止めている、と言われている。私は、ドイツがベルギーで作り出した恐るべきカルマを食い止めるために、ほんのわずかでも力になろうとしている。

ドイツは、ベルギーで人類を辱めた。ベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為について信じられていることは、一つを除いて、すべて真実である。私の知る限りでは——そして私は、私以上によく知っている者たちに尋ねた——ドイツ兵たちは、生きているベルギーの子どもたちの手を切り落としたことはな

い。しかし、彼らは女たちを殺し、女たちを辱め、妊娠している女たちを嘲り、侮辱し、自ら殺した赤子を産んだばかりの母親たちを虐待した。彼らは男たちを生きたまま焼き殺し、生きたまま埋めたのである。

私は、ドイツ人たちがこれらのことをしたと言うべきだろうか。それとも、悪の力、悪しき存在たち、人間を超えた悪の力、かつて人間であった悪の力が、一時のあいだ彼らの道徳的な魂を押しつけ、ドイツ兵たちの肉体を道具として用いて、これらのことをしたと言うべきだろうか。

どちらの言い方でもよい。どちらも真実だからである。ベルギーを荒らし、破壊した人々が、すべて取り憑かれていたわけではない——もっとも、悪は常に一種の取り憑きであると言えるのだが。

ドイツがベルギーで作り出した恐るべきカルマを、
食い止める助けをしなさい。

「あなたがたは、『隣人を愛し、敵を憎め』と言われてきたのを聞いている。しかし、私はあなたがたに言う。敵を愛し、あなたがたを呪う者を祝福し、あなたがたを憎む者に善を行い、あなたがたを侮辱し迫害する者のために祈りなさい。そうすれば、あなたがたは天におられる父の子どもとなるのである。」

1915 年 3 月 27 日

第九の手紙

見えざる守護者たち

ベルギーの荒廃した地域——そしてベルギーの大

部分は荒廃している——の中に、一軒の小さな家が、戦争前と変わらず、損なわれることなく静かに立っている。その周囲には、砲撃の煙で黒くなり、あるいは砲弾の爆発による灰で覆われた、崩れた壁ばかりが残っている。

そこには二人の女性が住んでいる。中年の女性たちである。戦争の波が押し寄せてきたとき、彼女たちは家を捨てて逃げなかった。もちろん恐れてはいた。しかし逃げなかった。彼女たちは、隣の家々が炎に包まれるのを見、砲弾の炸裂する音を聞いた。それでも、薄い四つの壁に囲まれた家の中にとどまり、待ち、祈った。彼女たちは四つの神に祈った。父なる神と子なる神、そしてもう二人——数年前にあちらの世界へ旅立った、自分たちの父と母、すなわちベルギー人の父とドイツ人の母にである。

彼女たちの信仰は非常に強く、自分たちは傷つけ

られないと信じていた。そして実際、傷つけられなかった。信じがたいことに思えるかもしれないが、その小さな家は、荒廃の真ただ中にあっても、今なお安全に立っている。

愛は守る力である。その二人の中年の女性の父と母は、互いを深く愛していた。民族の違いは、その愛の障害にはならなかった。ドイツ人の母とベルギー人の父は、自分たちの子どもに、ドイツは母であり、ベルギーは父であると教えていた。

二人の遺骨は、村の教会墓地に並んで眠っている。そして、その魂は軍隊が通り過ぎるあいだ、見張り続けていた。彼らは、自分たちの愛する子どもたちを守っていたのである。

これはあり得ない話に思えるだろうか。私は、それが事実であることを知っている。私は、その父と母

と話をした。そして、また彼らと話をするつもりでいる。彼らの信仰は稀であり、彼らの愛もまた稀であり、その報いもまた稀なものであった。

小さな家を守ることは、山を動かすことよりも容易である。そして、からし種ほどの信仰があれば、山を動かすことができると言われている。

その二つの魂は、まだ地上の近くから離れてはいなかった。彼らは子どもたちを待っていたのである。戦争の波が押し寄せたとき、彼らは自分たちの家の戸口に立って見張っていた。安らかな死者たちの霊は、砲弾の音を好まない。しかし、その二人は逃げなかった。もし彼らが恐れてその見張りの場を離れていたなら、その小さな家も今ごろは周囲の家々と同じようになっていただろう。

私は、あまりにも信じやすいのだろうか。何年も前

に、私があなたに、あなたは信じる心が足りない、と言ったことを覚えているだろうか。私は、あなたがそれを覚えているのを知っている。この二人——ベルギー人の父とドイツ人の母——もまた、世間の言い方によれば、信じやすかった。そして、その子どもたちも同じだった。もし国々が、愛の力を同じように信じていたなら、戦争は起こらなかっただろう。戦争をするための軍隊そのものが存在しなかっただろうからである。

私は軍隊に反対する説教をしているのではない。ただ愛と信仰を説いているのである。愛と信仰が大きくなればなるほど、軍隊は小さくなり、戦争は終わるだろう。

私は、そのベルギー人の父に、戦争についてどう感じているかを尋ねた。すると彼は、自分のドイツ人の妻の方を見た。私は、そのドイツ人の母に、戦争

についてどう感じているかを尋ねた。すると彼女は、自分のベルギー人の夫の方を見た。どちらも、相手を傷つけることを恐れて、口を開こうとはしなかった。

あなたは、私の国が戦争をしていたら、私は今どう感じるのだろうか、と思うかもしれない。しかし、私の記憶の目が開き、自分の過去の生を見たとき、私は、自分が実に多くの国を持っていたこと、実に多くの軍隊で戦ってきたこと、実に多くの土地で、実に多くの母たちの膝に抱かれてきたことを知った。だから、私の魂は、一つの国に根を下ろしてはいないのである。

私は、大いなる白き兄弟団に加わった。その中では、すべての男は兄弟であり、すべての女は姉妹である。あなたには、私の目で世界を見ることは難しいだろう。私は、ベルギーにいる二人の老いた未

婚の娘の両親のように、見守り、待っている。そして今のところ、私の信仰の家は、戦争の炎によって傷つけられてはいない。

大いなる白き兄弟団には、多くの民族の者たちがいる。今まさに戦争をしている民族の者たちもいる。世界が狂気に陥ったとき、彼らが互いを疑いの目で見たとと思うだろうか。彼らは互いを疑いの目では見なかった。それぞれが、自分に最も善いことのできる場所に立って見守っていた。それぞれが、自分の兄弟の同胞たちへの打撃をやわらげようとし、自分と同じ血を引く者たちの心をやわらげようとした。しかし、この戦争は星々の中に書かれていたので、世界の教師たちは、その時が来たとき、それを防ぐことができなかったのである。

大いなる白き兄弟団の一員であるとは、どういうことか、あなたは知っているだろうか。それは、人類

の幸福のために、地球全体の善のために働くことを意味している。

そして、もう一つ、あなたに話したいことがある。あなたは、黒き兄弟団というものについて聞いたことがあるだろう。それは誤った呼び名である。兄弟愛は決して黒くはならない。黒き兄弟団など存在しない。黒きマスターたちは数多くいる。なぜなら、マスターであることは、衣服のように、白にも黒にもなり得るからである。この戦争では、人間の中に憎しみを吹き込んだ黒い力が、一つの目的のために働いてきた。そして、そのこと自体が、彼らの現在の働きの結果が終わった後、長いあいだ、彼らの悪を行う力を弱めることになるだろう。

私の言いたいことがわかるだろうか。悪の力が結びつくとき、その結びつきそのものによって、構成する者たち一人ひとりの力は弱まる。なぜなら、悪

は、一人でいるときに最も強いからである。

愛に満ちた二人は、共に働くことで、四人分の力を持つことができる。しかし、悪のために共に働く二人は、一人半ほどの力しか持てない——そう言ってよいだろうか。そして、一人半に対して四人である！ もしあなたが力を愛するなら、その力を善のために使いなさい。そうすれば、その力は増していく。

この狂気が可能になったのは、数えきれないほど多くの初歩的な悪の力が、世界に向かって悪意を投げつけていたからであって、それらが結びついていたからではない。

憎しみは、ばらばらにしてしまう力である。この戦争の後にも憎み続ける者は、自らを崩していくだろう。この戦争の後に愛する者は、強くなっていくだ

ろう。とりわけフランスは強くなるだろう。なぜなら、フランスには、憎しみよりも愛の方が多いからである。フランスは、敵でさえ彼女を憎むことができないほど、深く愛している。それは、ただ、フランスが大きな敵ほど残酷に強くないから、というだけではない。

あなたの敵を愛しなさい。それが、彼らに打ち勝つ最も確かな道である。

1915 年 3 月 29 日。

第十の手紙

千年は一日のように

私が戦争について書いている以上、この戦争で愛

する人を失った人々に語りかけたい。

時ならぬ死を遂げた人を悲しんでいるあなた方は、「一日は千年のようであり、千年は一日のようである」と書かれているのを読んだことがないのだろうか。

私たちは、再生というものを土台にして考えなければならない。再生の別の名は律動であり、その進む道は不滅である。不滅とは、始まりを前提とせず、終わりを見込まない。霊は、常に存在しており、これからも常に存在し続ける。霊の生命においては、一日は千年のようであり、千年は一日のようなのである。

誕生は新しい一日の朝であり、死はその一日の夕べである。そして、生と生とのあいだの期間は、眠り、夢を見る期間である。あるいは逆に、人生は夢

であり、死は現実への目覚めだと言ってもよい。しかし、その律動は確かなものである。

眠りに落ちることは、魂が死後に通り抜けるのと同じように、目に見えない世界を通り抜けることである。私のために書いているあなた、そしてごく少数の人々は、それをはっきりと意識したまま通り抜ける。いつの日か、すべての人が、それを意識したまま通り抜け、そしてその記憶を持ち帰るようになるだろう。

死者を悲しんでいるあなた方よ、覚えておきなさい。一生というものは、不滅の霊にとっては、ただの一日にすぎない。あなたはこれまでも、愛する人と一日のあいだ別れ、そのことで深く悲しまなかったことが何度もあったはずである。愛する人は、何か務めを果たすために家を離れ、そしてあなたは、翌日にはまた会えると信じていた。では、魂の

次の日、次の生——永遠においては、それは同じことである——に、再び愛する人と会えるのだと、感じることはできないだろうか。

友人たちは、非常に親しい関係でない限り、すべての生で出会うわけではない。あなたが、一人の友人に一週間に一度しか会わないように、魂のより大きな日々の中では、あなたは毎日すべての友人に出会うわけではない。あなたは、ある友人と月曜日に別れ、金曜日にまた会う約束をする。四日、四つの生——永遠においては、どちらも同じである。

しかし、ある人とは、ほんの数時間だけ別れるだけである。昼から日暮れまで離れ、夕方には家の親しさの中で再び会う。今、人生の真昼にあなたから去っていった人々は、おそらく、人生の夕暮れに、再びあなたのもとへ帰ってくるだろう。それは別の言い方をすれば、この魂の一日の終わり、この人生の

終わりに、彼らはあなたと再会し、目に見えない世界の夕暮れの時を、そしてその向こうにある天国の甘い夢を、あなたと共に過ごすということである。悲しんではならない。愛は、自分のものを待っているのである。

ある友人とは、二つ、四つ、あるいは七つ先の生で再び会うかもしれない。しかし、本当にあなたにとって親しい人、愛する人、あなた自身の人たちとは、人生の夕暮れに、あるいは遅くとも明日——地上における魂の次の日に、再び会うのである。

あなたは、その再会のために、どのように準備するのだろうか。夕暮れに愛があなたのもとへ帰ってくることを知りながら、一日を明るく働いて過ごさないだろうか。日が暮れに近づくにつれて、信仰という白い衣——夕べの衣——をまとい、窓辺で愛を待たないだろうか。愛はやって来る。砂利道を歩い

てくるその足音を、前もって聞くことができないだろうか。持ち上げられた掛け金の鳴る音を聞くことができないだろうか。微笑みながら前に進み、愛を迎えないだろうか。たしかに、一日は千年のようであり、千年は一日のようなのである。

私は、突撃を指揮して死んだ、一人のイギリス人将校の魂と話をした。彼の死は、瞬時で、苦しみのないものであった。心臓を撃ち抜かれ、しばらく意識を失ったあと、彼は、自分がなお突撃を率いているのだと思っていた。

しかし、彼の前には敵はいなかった。あったのは、騒乱の上に広がる静かな野だけであった。なぜなら、彼の魂の高まりは非常に大きく——彼は、心に愛する人への想いを抱いたまま死んだからである——彼は、愛が十分に広がることのできる場所へと、高く、高く昇っていったのである。

前方に何も見えなかったので、彼は立ち止まり、振り返って私を見た。

「兄弟よ」と私は言った。「あなたは、戦争を後にしてきたのだ。」

彼は理解した。何週間も死の天幕の中で生きてきた者たちは、死が幕を上げるとき、それが死であることをすぐに悟る。

「では、突撃はどうなったのですか？」と彼は熱心に尋ねた。「突撃は成功したのですか？」

「はい」と私は答えた。「あなたの魂の力が、それを勝利に導いたのです。」

「それなら、すべてはよいのです」と彼は答えた。

「少し休みなさい」と私は言った。「休んで、私と話
なさい。」

「私たちは以前に会ったことがありますか？」と彼
は尋ねた。「あなたの顔には見覚えがあります。」

「私の顔は、多くの戦場で知られています」と私は
言った。

「あなたは、いつこちらへ来たのですか？」

「三年前です。」

「それなら、あなたは私に多くのことを教えられるで
しょう。」

「何かは教えられるかもしれませんが。あなたは何を

知りたいのですか？」

「私の死によって大きな悲しみを受ける人を、どう慰めればよいか知りたいのです。」

「その人はどこにいますか？」と私は尋ねた。

彼は場所を告げた。

「では、来なさい」と私は言った。「私も一緒に行こう。」

私たちは、イギリスの小さな部屋にいる、美しい女性を見つけた。その小さな部屋には、小さなベッドがあった。そして、そのベッドには、四歳か五歳ほどの男の子が寝ていた。私たちは、母と子が語り合っている声を聞くことができた。

「お父さんは、いつ帰ってくるの？」と小さな子は尋ねた。

「わからないわ」と母親は言った。

「お父さんは帰ってくるよね？ 本当に帰ってくるんだよね？」

「お父さんが早く帰ってくるように祈っているわ」と、母親はそれだけを言った。

子どもたちの目は、目覚めと眠りのあいだの薄明の世界へ入っていくとき、ときに非常にはっきりと見える。

「ほら、お父さんが帰ってきた！」と子どもは叫んだ。そして、喜びの声を上げて、父に向かって腕を伸ばした。

そして母親は、それを悟り、じっと静かになった。

しかし、彼女の悲しみは和らげられた。自分の愛した人が帰ってきたこと、そして、自分の子どもがその人を見たことを知ったからである。私は、彼が、彼女がこちらへ来ることができるようになるまで、彼女のそばに留まるだろうと思う。その遅れが、彼の魂の進歩を妨げることはない。愛は、法を完成するものである。永遠には、愛のための時間があり、愛ゆえの遅れのための時間もある。愛においては、千年は一日のようなのである。

1915 年 3 月 29 日。

第十一の手紙

多くの言葉

言語を学びなさい。私がこの戦争の中で行ってい

る仕事は、私がドイツ語をほとんど知らないために妨げられてきた。

こちらに長くいる魂たちとは、純粋な思考だけで会話をする事ができる。しかし、新しく来た魂たちは、地上で話していた言葉を話し、しかもその言葉は、しばしば地方のなまりにすぎない。そのため、私はイギリス軍の中で最もよい成果を得てきたのである。

私はドイツ人やフランス人の思考を読むことはできる。しかし、彼らは必ずしも私を理解できるとは限らない。ベルギーの二人の女性の父と母は、こちらに長くいたので、私たちは互いの思考を理解することができた。

言語を学びなさい。あなたがこちらの世界で働くようになったとき、地上にいるとき以上に、それを必

要とするかもしれない。なぜなら、こちらでは距離は思考ほど短く、人は瞬く間に場所から場所へ移るからである。

1915 年 3 月 30 日

第十二の手紙
美しき存在

私たちが「美しき存在」と呼んでいる天使——私を

惑星の旅へ導いたその存在——は、ここで愛と憎しみについて、いくつかの言葉を差しはさみたいと望んでいる。それは、戦争の初期における、人間としての自己と、不滅の自己の現れのように思われる。

愛と憎しみ

私が愛した人の一人が、私に敵意を向けた。そして、地上の諸国民は互いに戦争を始めた。緑の野は血に染まり、収穫の時期に鳴いていた虫の羽音は、人々が同じ人間である者たちに憎しみをぶつけようと駆けていく中で、苦痛と怒りの叫びにかき消された。私の心は、ロンドンの冬空よりも悲しかった。地上には、もはや喜びは何一つないように思われた。愛は死にかけ、平和は死に、人々はいたるところで死へ向かっていたからである。

「メネ、メネ、テケル、ウパルシン」が、人間の神殿の

壁に書かれていた。

そして私は、自分の心に言った。

「私たちは、人生の真昼に、どこまで流されてきたの
だろう。そして、なぜ私たちは夕暮れを待っている
のだろう。愛は失われ、世界は失われ、私たちもま
た失われてしまったのではないか？」

そのとき、私は、自分の信仰の空虚を見つめながら
座っていた。そして、あらゆるものの中心から聞こ
えてくるような声を聞いた。その声は言った。

「あなたのペンを取り、書きなさい。すべてを失った
者には、自己の宝が開かれるからである。

私は、あなたが愛を外に求めたときに忘れていた、
その自己である。私は、諸国民が互いを滅ぼしに

出て行ったときに忘れていた、その自己である。私は唯一の自己であり、私の家は、憎しみと愛に鼓動している、これらすべての心の中にある。人々が互いを傷つけるとき、彼らは私を傷つけている。人々が互いを疑うとき、彼らは私を疑っている。人々が互いを愛するとき、彼らは私を愛している。愛と憎しみ、信仰と疑いを通してでなければ、私を知る道はない。愛と憎しみは、一つの磁石の両極であり、疑いと信仰は、私の双子の子どもだからである。

すべてを疑ったことのない者は、信仰の意味を知らない。そして、一度も憎まれたことのない者は、愛の意味を知らない。

心から喜びが失われるとき、私は、自分自身でそれを満たす。地上で、私に属する者たちが互いを滅ぼすとき、彼らは天においては互いに駆け寄る。肉体の盲目さから解放されると、彼らは互いを真実

の姿で見るのである。

二人の兵士が戦争へ赴いた。そして、一方の弾丸は他方の心臓を貫き、他方の弾丸もまた相手の心臓を貫いた。彼らの憎しみは、愛と同じほど激しかった。すると、死の突然の闇の中で、彼らは互いの手を求めた。彼らの憎しみは、その反対の極を見つけ、彼らは愛の中で溶け合ったのである。

二人の友人が、互いに敵として戦争へ赴いた。そして、傷を負うたびに、彼らは互いに近づいていった。それぞれの魂は、相手の苦しみを悲しみ、死においても、生においても、一方が他方から逃れることはできない。

もし愛する人を避けたいのなら、その人を決して憎んではならない。脳が無慈悲であっても、魂はあわれみを持っている。心が疑いで弱っているときにこ

そ、魂の信仰は最も強いことがある。

あなたを憎む脳の魂は、その脳が静まっているときにも見守っている。そして、その目に見えない手で、あなたの目から涙をぬぐっている。

あなたが夢の中で泣くとき、自分の魂が、自分の敵に与えた涙のために泣いているのだと知りなさい。あなたが目をぬらして目覚めるとき、あなたは愛の借りを返しているのである。

あなたを愛する者に優しくしなさい。愛は、頼るところのない迷い子だからである。もしあなたが愛を心から追い出せば、それは、ただ独りでさまようしかなくなる。

あなたを憎む者にも優しくしなさい。なぜなら、その人の迷い子もまた、独りでさまよっているからであ

る。

眠りにつくとき、昼のあいだあなたを傷つけた人に、愛を送りなさい。もし憎しみのまま眠りにつけば、あなたは目をぬらして目覚めるだろう。

私は仲立ちをする者である。私は、あらゆる心の中に家を持つ自己である。私は、闇の中で伝言を運ぶ。私は、誇るにはあまりにも大きい。私は、自分に属する者たちのために、使いをする。

あなたが、どれほど懸命に憎もうとしてきたかを、私はあなたの心の悲しみから知っている。あなたが憎むことに失敗したのは、あなたの魂が眠っていないからである。

私は仲立ちをする者であり、私の灯火は消えずに灯っている。」

1915 年 4 月 1 日。

第十三の手紙

人類という身体

私は、二十人の私たちがポツダム宮殿とヴェルヘ

ルム通りに立っていたとき、もっとも偉大な教師は私たちと共にはいなかった、と言った。

あなたは、私たちがその人を呼ぶ名を知らないし、知る必要もない。その人は、あなたが知っているような人生の個人的な制限を、はるかに後ろへ置き去りにした存在であり、そのため、その人は人生を、惑星のロゴスが見るように見ることができる。彼は、地上で騒ぎ、争っている存在たちを、あなたがレンズを通して微生物を見るように見ることができる。アメーバ、脂肪細胞、膿の細胞——彼は、それらすべてを大いなる全体の一部として見ており、彼らの争いによって、どちらか一方の味方になることはない。

ドイツ皇帝の断言、繰り返し、尊大な祈り——彼は、自分の側に神がいるに違いない、なぜなら、それは自分の側だからだ、という考えを前提にしてい

る——は、このマスターを、微笑ませることすらしない。ばかげたことも悲劇も、彼にとっては同じである。ただ、それが人類という生命体の成長を進めるか、遅らせるかという点を除いては。

もしあなたが、「一」と「多」について、単なる哲学的な理論ではなく、実際の理解を、自分の意識の中に持つことができるなら、あなたは、「一」が、あなたの友人であろうと敵であろうと、すべての「多」の中に存在していることを理解するだろう。

もう一つ覚えておきなさい。あるものを存在すると強く思うことは、それを作り出すことである。兄弟愛を存在すると考え、そうして兄弟愛を作り出しなさい。しかし、それをあまり激しく行ってはならない。そうでなければ、その律動をあまりに早く頂点へ達させてしまい、その反動として、兄弟愛の反対のものを生み出してしまおうだろう。

＊私は、「律動を頂点に達させる」という珍しい表現に、いささか戸惑った。しかし、大きな波には多くの律動的なうねりがあり、波のもっとも高い部分をその頂点と呼ぶことができるのだから、「X」は、生前と同じ厳密さで言葉を用いており、律動的な波の頂点は、「律動の頂点」と呼ばれ得るのだろう。

——編集者

もっとも偉大なマスターは、戦争の雲が集まり始めたとき、新しい何かを生み出そうとしているように、私たちには見えなかった。

私たち——知識が無限ではない者たち——は、医師のように働こうとした。人類という大いなる人間の細胞を焼いていた熱を冷まそうとしたのである。私たちは、その大いなる人間に、精神的な治療を施し、癒しの過程を進めようとしていた、と言える

かもしれない。

私たちが闘っていた目に見えない力は、空気中にある病気の細菌のようなものだった。偉大なマスターの視点から見れば、それらは、あなたがレンズを通して見ることのできる微小な生き物以上のものではなかった。

もしあなたが彼を理解し、その仕事を助けたいなら、自分の見方を、時間だけでなく永遠にも合わせなさい。しかし、自分の仕事を、時間の中にあるからという理由で、重要でないと思っはならない。より大きな視点から見れば、小さく見えるかもしれない、と考へてはならない。

人は、全体の惑星的な生命体の健康が、自分の働きにかかっているかのように仕事をするることによつてしか、マスターになることはできない。生命体の

完全な健康は、実際に、一つ一つの細胞の働きにかかっているのである。

さて、この戦争がなぜ起こらなければならなかったのかを、あなたに話そう。人類は、新しい民族が生まれる準備として、兄弟愛を実現しなければならぬ時を迎えていた。ところが、その代わりに、人々の心はますます分離していった。しかも、過去百年間の物質的な発見や組織は、物質的な世界において兄弟愛を可能にしていたのである。

分離の律動は、この分離の戦争によって頂点に達した。この戦争がなかったなら、人間の兄弟愛は、人間が、すでに物質的な世界で示されていた法則に、感情をもって従うことを拒んだために、さらに遅らされていただろう。

言い換えれば、身体が魂よりも早く成長してしま

い、そのため魂は身体と共に苦しまなければならなかったのである。魂は、自らの力——愛の力——によって、自分自身を癒すために、引き裂かれなければならなかった。

私は、兄弟愛の律動を、あまり激しく頂点に達させてはならない、と言った。それは、あらゆる律動の波に当てはまる。ドイツ人たちは、自分たちが世界の支配的な民族になりたいと望んだ。彼らは、自分たちの優越性を、あまりにも激しく存在すると考えたために、優越性とは反対のものを生み出してしまっている。落ち着いて、それを存在すると考えなさい。

彼らは、新しい統一の精神における指導者となることができたかもしれない。しかし、彼らは失敗し、その機会を失ってしまった。アメリカ合衆国にいる多くのドイツ系の人々は、アメリカとドイツを結びつけ

る力となることができたかもしれない。だが、今の彼らを見なさい！

マスターたちが、ドイツに大きな植民地を持たせなかった理由は、彼女の余った人口が世界中に散らばり、他の民族と混ざるためであった。

ドイツの血は、混ざることを必要としていた。そうすることで、彼女の物質的な面での効率のよさが、世界全体を発酵させる酵母のようになることができたのである。

しかし、その代わりに、彼女は自分自身の偉大さに酔ってしまった。彼女は、自分を着実に前へ進ませることができたはずの律動を、自ら頂点へ達させてしまった。彼女が犯したのは、カルマにおける失敗である。

民族というものは、人類という身体の中の器官のようなものである。もし、一つの民族が、自分自身のためだけでなく、人類という身体と共に、そしてそのために働くことを拒むなら、その民族は病気になる。

もしドイツが、今からでも、至高の統一へ向き直り、自分たちの小さな民族の神ではなく、この体系の唯一なる存在を崇拜するなら、苦しみと試練の時を経たあとで、彼女は失ったものを取り戻すことができるだろう。彼女はそうするだろうか。それは、まだ分からない。マスターたちと共に、その民族の悪いカルマを食い止める助けをなさい。

第十四の手紙

内なる敵

あなたには、私が兄弟愛について語ることを書き留

める以上のことをするべき役目がある。あなたは、私心のない献身によって、世界が兄弟愛を実現するのを助けなければならない。個人にも、個人の集まりにも、その道を示さなければならない。

普遍的兄弟愛！ それは美しい響きを持っており、多くの人が、その音の美しさのために、その言葉を口にしてきた。しかし、その意味は、心にも頭にもなかったのである。

普遍的兄弟愛とは、多くのものを構成する一つ一つの存在の間にある兄弟のような関係だけではない。普遍的兄弟愛とは、それらが、唯一の自己の中において、意識的に、現実には、一つであることでもある。普遍的兄弟愛とは、多くのものが、一つなるものへ帰っていくことであり、同時に、その旅そのものを喜ぶことでもある。

あなたは、古いインドの言葉、公式、マントラである「AUM」を繰り返してきた。ただオウムのように繰り返してきた。しかし、もしあなたが本当に AUM を理解していたなら、私はあなたに兄弟愛を説く必要はなかっただろう。そして、「あなた」とは、普遍的兄弟愛についてしゃべり続けてきた、すべての男と女のことである。

A-U-M——一なるもの、多なるもの、そしてその両者を結びつけるもの。自己、自己でないもの、そして分離の否定。AUM、種、植物、そして香り。

あなたは、自分が何のためにこの世界にいると思っているのだろうか。

神智学者であるあなた方は、ムーラプラクリティ——根源の自然——について聞いたことがある。ムーラプラクリティの三つのグナ、あるいは性質——

サットヴァ、ラジャス、タマス——についても聞いたことがある。サットヴァは、光、存在、平和。ラジャスは、行動、情熱、自己主張。タマスは、闇、惰性、否定である。

あなた方の中には、キリスト、ルシファー、アーリマンについて聞いたことがある者もいるだろう。それもまた、別の名前で呼ばれた、サットヴァ、ラジャス、タマスなのである。

カバラを学ぶあなた方は、ネシャマー、ルアハ、ネフェシュについて聞いたことがある。すなわち、憧れ、個としての知性、物質性である。

あなた方は皆、ヴィシュヌ、ブラフマー、シヴァについて聞いたことがある。維持する者、創造する者、破壊する者である。——そう、それが正しい順序である。なぜなら、ヴィシュヌは世界の周期から世界

の周期へと保ち続け、ブラフマーは再び創造するからである。

クリシュナ(ヴィシュヌ)は『バガヴァッド・ギーター』の中で言っている。「私は、すべての存在の心の中に宿る自己である。」

彼は、一であり、多である。なぜなら、彼は多の中におり、多は彼の中にあるからである。あなたは、すべての存在の心に宿る自己として彼を理解しない限り、クリシュナを理解することはできない。あなたは、すべての存在の心の中にキリストを見ることができるようにならない限り、キリストを理解することはできない。

そう、あなた方は互いに争い、それを憎しみ、あるいは戦争と呼ぶことができる。それは分離である。

分離は、進化の一段階として必要であった。個我が、自分を独立したものとして理解するためである。しかし今や、人類は、自らの源へ、統一へ、すべての人に共通するアートマへと戻るべき時を迎えている。

私は、二年前にあなたのもとを去って以来、多くのことを学んだ。地上にいたころの私は、普遍的兄弟愛について絶えず語っていたわけではない。私は、「比類のない個性」を得たいと望んでいた。そう、私はそれを得た。惑星の間、そしてその他の場所を巡る二年間の旅の中で、私は求めていた力を見いだした。しかし、それと共に、別のものも見いだした——愛、すべての力の中で最も偉大な力を。

兄弟愛とは愛であり、それゆえに私は兄弟愛を説くのである。あなたは、憎むことによって個性を得ることはできる。しかし、「比類のない個性」を得る

ことはできない。

自分という存在を失うのではないかと恐れてはならない。あなたが、自分以外の何かを愛することができる限り、あなたは自分自身を失うことはない。なぜなら、自分以外の何かを愛することは、自分という存在を確かなものとする事だからである。

自分という別々の存在だけを愛することは、かえって、自分という存在を保つ力を失うことである。なぜなら、あなたは、他の自己との関係の中でのみ、一人の個人であり得るからである。もし宇宙にあなた一人しかいなかったなら、あなたは無であるか、あるいはすべてであるかのどちらかでなければならない。そして、あなたはまだ、すべてになることはできない。すべてとの一体によって、すべてであることを除いては。そして、それこそが愛なのである。

あなたがどれほど反抗しようとも、その反抗そのものによって、あなたは他者が自分と等しいことを認めている。あなたは、他者が自分と共に存在していることを認めている。そして、その共なる存在の背後には、統一がある。クリシュナ、「すべての存在の心に宿る自己」がある。

私が、この戦争は、私たちの立場から見ると、非常に子どもじみており、非常に無知に見える、と言っても、驚かないでほしい。

戦争は、人類がまだ外へ向かって進み、分離を理解する必要があった、はるか昔には、高貴なものであった。しかし、やがて戦争は、不要になるだけでなく、取るに足りないものになるだろう。

私は、重大なことを軽く扱っているのではない。私は、この戦争がどれほど深刻であるかを、あなた以

上によく知っている。なぜなら、私は、それを両方の世界から見てきたからである。

善と悪の力の戦いは、取るに足りないものではなかった。その戦いは、人間の心の中で、これからもなお、長い長い時代にわたって続くだろう。しかし今や、人は、自分自身の中の悪と戦うべき時を迎えている。そして、他の人々にも、自分自身の中の悪と戦わせるべきである。戦いの神マルスの剣は、人間の中のマルスが、それを自分自身の中の闇の力に向けて振るう限り、錆びることはない。

私は、人間の中の闇の力が、外へ現れ出たのを見た。それを、はっきりとした姿で見た。そして私は、あなたに断言する。それは、あなたが剣を向けるに値する敵である。あなた方一人ひとりの中に、その剣に値する敵がいる。

そしてまた、一人ひとりの人間の中には、自己、神なるもの、キリスト、クリシュナ——すべての存在の心に宿るもの——も存在している。

私は、私自身の目を見たことを、あなたに話したい。

フランスの戦場で、二人の兵士が銃剣で互いを殺した。そして、それぞれの悪魔が、その魂と共に抜け出した。彼らは普通の人間ではなかった。私は、この二つの悪魔、この二つの「戸口の住人」、この二つの「欲望の精霊」を見た。あなたがどんな名前と呼ぼうともよい。あなたは、それらが互いに飛びかかって、相手を滅ぼそうとしたと思うだろうか。まったくそうではなかった。それぞれは、自分が属していた魂に飛びかかったのである。彼らは、互いには何の関心も持っていなかった。互いに与えるものも、奪うものもなかった。この悪魔たち、この戸口

の住人たち、この精霊たちには。

私の言いたいことがわかるだろうか。

あなたの敵は、あなたの内側にいる。

あなたが外で戦っている相手は、あなたの兄弟である。兄弟として愛しなさい。そうすれば、あなたの悪魔は弱くなり、あなたの天使は強くなっていく。

あなたの天使は、あなたの中のアートマ、キリスト、クリシュナから生まれている。そして、それは、あなたの兄弟の中にあるアートマ、キリスト、クリシュナと同じものである。

悪魔たちは、皆、非常に個別的である。天使たちは、皆、とてもよく似ている。ただし、ある者は他よりも強く、経験も深い。

あなた自身の中にいるキリストを求めなさい。それが立ち上がり、すべての人に大いなる喜びの知らせをもたらすために。

それが、復活祭の前夜に、私が世界に向かって言いたいことである。

1915 年 4 月 3 日。

第十五の手紙

ブリュッセルで耳を澄ます

いや、私に論文を書くことを期待してはならない。

私は手紙を書いているのだ。だから、好きなだけ話をあちこちに広げさせてもらおう。しかし、私の仕事が終わるころには、この建物には骨組みがあり、すべての部分が正しい位置に収まっていることが、あなたにもわかるだろう。

前回は哲学的な話をしたので、今度は一つの話をしてしよう。

ドイツ軍が抵抗しないブリュッセルを通過していったときのことである。(もし記憶が正しければ、三日間にわたって通過していた。長く続く、灰緑色の人間の流れであり、その兜の波の上では、太陽の光や街灯の光がきらめいていた。)私は一時間のあいだ、誰にも気づかれずにバルコニーに立ち、自分のいる場所の前を通り過ぎる一人ひとりの男の思考を読み取っていた。

以前にもあなたに説明したように、私はドイツ人たちの思考を読むことには何の困難もない。ただ、彼らに私を理解させようとする、しばしば失敗するのである。

人間の流れ、そして思考の流れ。ひとりひとりの男が一つの波であり、ひとつひとつの思考もまた一つの波であった。

私の注意の光を引いた思考の波を、いくつか挙げてみよう。

「ブリュッセルはなんて美しい町なんだ！」

「足が疲れた。靴が痛い。」

「あそこの木は、家の玄関のそばにある木に似ている。」

「今ごろ、母さんはコーヒーを入れているだろう。」

「なんてかわいい娘だ——あの、かごにパンを入れている娘！」

「俺がいなくなった今、グレートヒェンはハンスとたくさん話すだろうか。」

「左にあるあの門は、去年マリーが絵はがきで送ってくれたものだ。」

「足が疲れた。靴が痛い。」

「これがブリュッセルか！　ずっと見てみたかったんだ。」

「頭が痛い。」

「ドイツよ、すべてに優れよ！ ドイツよ、すべてに優れよ！」

「中尉は仕立屋にちゃんと金を払っただろうか。」

「なんて暑いんだ！」

「父さんは今ごろ何をしているだろう？」

「ビールが一杯飲みたい！」

「ブリュッセルを破壊しなくてよかった。」

「そもそも、この戦争はいったい何のためなんだ？」

「祖国！ 祖国！」

「夕食には何が出るんだろう。」

「これからどこへ行くんだろう？」

「これはウンター・デン・リンデンほど立派じゃないな。」

「パリに着いたら、ミロのヴィーナスを見なければ。」

「頭が痛い。」

「うちの赤ん坊に歯が生えた！」

「いつになったら夕食の時間になるんだ！」

そして、こうした思考が延々と続いていた。長い灰

緑色の流れが、ブリュッセルの町を流れていく間ずっと。

そして、これらの男たちこそ、まもなく人を殺し、奪い、焼き払い、犯し、また人を殺し、奪い、焼き払う者たちだった。彼らの多くは、すでにそれをしていたのである——疲れ切った男たち、目的もない、戦争らしくない思考を抱えた男たち、家や食べ物や、痛む足や、去年マリーが送ってくれた絵はがきや、母のコーヒーの時間を考えていた、ごくありふれた兵士たちが。

いったい何の力が、彼らを悪魔へと変えたのだろうか。どんな悪霊が、彼らから人間らしさを奪い、疲れを忘れさせたのだろうか。それは、耳障りな戦争ラッパの叫びだったのだろうか。あるいは、そのラッパを吹く悪魔の背後にいた、さらに別の悪魔だったのだろうか。それは、一つの国の邪悪な霊だったの

か、それとも単に戦争そのものの霊だったのか。

それは、そのすべてだった。

おそらく彼らは、行軍を始めたときには、栄光や憎しみや、生と死や、名誉について考えていたのだろう。しかし、彼らは長いあいだ歩き続けていたので、その思考は、疲れた老人の思考のように単純なものになっていた。

それはいったい何だったのか。何の力が彼らを前へと駆り立てていたのか。

これらの男たちの中には、抵抗しない市民を殺し、無力な子どもたちを打ち倒し、修道女や他の処女たちを虐待し、老人や女たちを、自分たちを守る盾として、敵の銃火の前へ追い立てた者もいた。

何が彼らの中の悪魔を目覚めさせたのだろうか。
あなたの友人は、戦争ラッパは、人間の胸の中に眠っている悪魔を呼び覚ます道具であると言っている。彼は、外側にいる悪魔的な力は、ラッパの音に乗って、この世界と私たちの人格の中へ入り込むことができると言っている。彼は正しい。

彼は、それが魂の中に火の要素をもたらすと言っている。まったくその通りだ！ 火——破壊の要素。抵抗できないものを焼き尽くすことによって、浄化する火。魂の中の火、神経の中の火、銃口の先の火——そして、その前に立つすべてのものに、火による死をもたらすのだ！

私は何日ものあいだ、ドイツが自国の兵士たちの心に地獄を注ぎ込もうとして鳴らしている、耳をつんざく騒音を聞いてきた。昨日も、その音が私の耳の中で鳴り響いていた。

なぜ驚くのか。あなたはまだ、私がヨーロッパの地獄とニューヨークの煉獄とのあいだを行き来できる、という考えに慣れていないのか。そう、ニューヨークにいるドイツ人たちは煉獄にいる。なぜなら、彼らは、自分たちの大義が失われたことを知っているからである。煉獄とは、浄化のためにある。彼らの心において、それがその役目を果たしてくれることを願おう。私はこれを、意地悪で言っているのではない。むしろ祝福として言っているのだ。私はドイツ人を愛しているし、他のすべての民族も愛している。あなたもまた、心の最も深いところでは、そうなのだ。

そう、あのドイツ人医師のところへあなたを導いたのは私であった。扱いやすい媒介者を通して、私はあなたを彼のもとへ導いた。私は、ドイツ人がどれほど善良であり得るかを、あなたに見せたかったの

である。あの地獄に苦しむ国の中にも、そのような人々は大勢いる。

あなたは理解しなければならない。人間が地獄へ行くのではない。地獄が人間の中へ入ってくるのである。人間は大宇宙の小宇宙である、と聞いたことがないだろうか。私がブリュッセルを行進していくのを見守った、あの疲れた灰緑色の兵士たちは、一人ひとりが、地獄と天国と、霊たちの世界を宿することができるほど大きな存在だった。彼らは皆、偉大な作曲家たちの音楽を聞いていたときには、何度も天国を自分の中に宿していたのである。戦争ラッパが鳴り響き、戦争の憎しみと戦争の欲望が彼らの中で目を覚ましたとき、彼らは地獄を宿すようになったのだ。

私は何度も、恥ずべき行いをしようとしているドイツ兵を、私のあまりにも実体の薄い手でつかんだ

ことがある。

一度、ナミュールで、私は一人の若者が、自分の生きているあいだずっと、自分自身を暗く見ることになったであろう行為をするのを止めたことがある——もっとも、その命は、その後たった二十一日しか続かなかったのだが。彼は良い若者だった。しかし、他の者たちと同じように、彼の中にも悪魔が目覚めたのである。彼が他の者たちより敏感だったので、私は、彼に私の制止する手を感じさせることができた。彼は、それを、一年前に亡くなった祖父の手だと思った。そんなことは、どうでもよい。彼は、その犠牲者を逃がしたのだから。

(そう、望むなら地図でナミュールを調べてみなさい。そこに正しい場所で見つかるだろう。あなたがベルギーの地理に不案内であることは、私を悩ませはしない。しかし、あなたが自分自身の思考の世

界へ戻ってしまったことで、私の思考の糸は切れてしまった。)

第十六の手紙

第六人種

この戦争の後のアメリカ合衆国について、あなたは

考えたことがあるだろうか。アメリカ合衆国では、新しい人種が準備されつつある。だからこそ、あなた——私がこのように語るためのあなた——は、そこに生まれなければならなかったのだ。だからこそ私は、普遍的兄弟愛のための私の仕事において、あなたを用いようとしているのである。

いや、あなたはアメリカ合衆国に留まる必要はない。むしろ、他の人種の古くからの土地に入り、その中に混じって生き続けるほうがよい。

神智学協会は、他のどこにも生まれることはできなかった。心霊主義も、他のどこにも生まれることはできなかった。アメリカ合衆国には、新しいものに対する受け入れる心、まだ試されていないものへ手を伸ばす気持ち、新しいという理由だけで物事を歓迎する気風がある。

もちろん、この傾向は悪用されることもあるし、実際に悪用もされている。ほとんどどんな詐欺師でも、アメリカ合衆国では追随者を見つけることができる。しかし、新しいものに対するその歓迎する精神がなければ、この偉大な新しい人種は、そこに生まれることができなかっただろう。

この人種は、新しい魂でできているのではなく、過去の生で経験を積んできた、最も古く、最も経験豊かな魂たちによってできている。アメリカ人の素直さや子どものような性質は、霊的成熟の結果なのである。その人種そのものは若いが、魂は時と同じほど古い。

この戦争で死によって去っていく魂たちの多く、あるいはほとんどは、必要とする長い休息を取った後、アメリカ合衆国に再生することになるだろう。ああ、その土地は、七十五年後か百年後には、実に

驚くべき場所になっているだろう！

あなたは、そのときにはここにはいないだろう。不老の泉を見つけるのでなければ、あるいは、天上での休息を捨てて、すぐに戻って来るのでなければ。

Juan Ponce de León は、新世界でその泉を探したとき、靈感を受けていたのだ。それは、あるとすれば、そこにある。しかし、未来においては、オーストラリアとロシアもまた、激しく競い合うことになるだろう。

いや、私は第七人種については語らない。それは、しかるべき時に現れる。しかし今は、第六人種についてあなたに語りたい。そして、あなたもまた、その先駆者の一人なのである。

かつてある敵が、あなたは自己中心的だと言った

からといって、これを私の本から削除してはならない。敵というものは、いつでも、自分自身の性質を私たちの中に見て、それを憎むものなのだ。敵が持っていない性質を育てなさい。そうすれば、その敵は、男であれ女であれ、そのためにあなたを愛するようになるだろう。騎手は、音楽家であるという点で音楽家に嫉妬したりはしない。音楽家に嫉妬するのは音楽家であり、自己中心的な者は、他人の自己中心性を見て、それを憎むのである。もしドイツが弱い国であったなら、イギリスのより大きな力を、それほど憎みはしなかっただろう。

第六人種が完全に肉体を持つようになったとき、本当に発達したすべての男女は、霊的な世界を見ることができるようになり、声に出されていない言葉を聞き、他人の思考を読むことができるようになるだろう。もちろん、その新しい人種の中にも、さまざまな段階の発達をした人々がいるだろう。発達の

平等などというものは、美しい夢にすぎないのだ、社会主義者たちよ。あなた方にも、優れた者、指導者たちがいるではないか。第六人種と共に生まれてくる、あまり発達していない魂たちは、過去において、その人種の活発にする力に心を開く権利を得てきた者たちである。どうやって、その権利を得たのか。それは、変わろうとし、成長しようとしたことによってである。

丘へ出て、育っているものたちを見なさい。自然という本から、一枚の葉を取って学びなさい。

あなたは、イングランドの未来について不思議に思っている。古きイングランドについては、すでに備えられている。あなたが享受している文明を生み出したのは、イングランドではないか。もちろん、他の人種もそこに関わっていた。しかし、言語が、その物語を語っている。

以前に言ったように、イングランドは、人種の兄弟愛を可能にしようとした、これら偉大な存在たちの手の中にある道具であった。イングランドは、その松明を世界中へ運んだ。大陸と大陸を結びつけ、これから来る時代に、人々を互いに結びつける鎖を編み上げた。だから、イングランドを敬いなさい。彼女は敬われるに値する。

すべての国を、魂の集まりとして、あなたの兄弟である魂たちの集まりとして、敬いなさい。しかし、法則に逆らわず、それと共に働いた国々を、最も敬いなさい。

ドイツを新しい人種のゆりかごにしたいと望んでいた人々は、その産室でもっと静かにしているべきだった。彼らは、訪れていた天使を怖がらせて追い払ってしまったのだ。

ヨーロッパには、残酷な人種が四つある。彼らは、神聖な幼子のゆりかごを揺らすことはできない。彼らは、その幼子の背中に刺さっている針を抜こうとはしないだろう。もし苦しんで泣かなければ、その肺に空気が入らない、と考えるからである。私は、その人種の名を挙げる必要はない。

第六人種は、感受性の強い幼子であり、厳しさよりも愛によって多くを学ぶ。第六人種は、自分に厳しさが必要だと感じたとき、自らにそれを課すだろう。その教師は好奇心であり、その遊びは、平和の科学と芸術になるだろう。その子守歌は、兄弟愛の歌になるだろう。いや、それはドイツのゆりかごの中で揺らされることはできなかった。しかし、多くのドイツ系アメリカ人たちが、それを揺らすのを助けることになるだろう。ドイツ人たちは、大人であることの優越感を忘れ、子ども時代の空想、神話を作り

出す空想に戻るとき、美しい子守歌を作るのである。

私たちは、アメリカ合衆国にもっと多くのフランス人が来ることを望んでいる。なぜなら、フランスは、新しい人種に対して、他のどの国よりも多くを教えることができるからである——靈感を受けた預言者としてのフランス、そして何よりも、批評家としてのフランスである。アメリカ人は、十分に批判的ではなく、十分に分析的でもなく、十分に繊細でもない。アメリカにはフランスが必要であり、フランスの男たちと女たちが必要なのだ。あなたは、「すべての人には二つの祖国がある。自分の国とフランスである」という古い言葉を聞いたことがあるだろう。私は少し言い間違えているかもしれないが、その考えはそこにある。

あなたは、フランスの栄光と魅力の中に生まれた者

が、どうして新世界へ来るのかと不思議に思っている。しかし、多くの者たちが来るだろう。そしてさらに多くの者たちが、海を渡る道によっても、再生の道によっても、後にくだろう。あなた自身も、その道を通して来たのだ。もし、それを知っているならば。

過去の生の記憶を取り戻しなさい、第六人種の先駆者たちよ！ あなた方には、それができる。それは、その人種に受け継がれているものの一部なのだ。

アメリカ——諸民族の「るつぼ」！ あなたは、外側に帝国を築いて支配するために作られたのではない。時が来たなら、フィリピン諸島を、それを任せることのできる国へ渡しなさい。あなたの帝国は、あなた自身の身体の内側にある。二十もの人種から成る人種よ、二十もの父たちの継承者よ、一つの

新しい人種の母よ！

不安であるあいだは、陸軍と海軍を増強しなさい。
家には避雷針を立て、扉や窓には盗難警報機をつ
けなさい。安心しなさい。その後で、兄弟愛につい
て夢を見なさい——それを信じられるようになった
ときに。

オランダ人によって地面から掘り出された石炭を、
自分の暖炉で燃やし、アイルランド人の手で作られ
た煉瓦の煙突からその煙を上げ、イギリス人の言
葉で印刷された自分の新聞を、ドイツ人が作ったラ
ンプの明かりで読み、トルコ人あるいはアルメニア
人が作った暖炉の敷物の上で、スウェーデン人に
よって鍛えられた自分の筋肉の感覚を楽しみ、中
国人が洗った自分の麻布を身につけ、自分の娘
が、ロシア人、イタリア人、ポーランド人、あるいは
フランス人の音楽を、自分のピアノで弾くのを聞

き、自分の部屋の中に、十を超える他の人種の息子たちが作ったものがあふれているのを見なさい。彼らは、あなたの隣人であり、あなたと同じ市民であり、あなたと同じアメリカ人なのだ。そのとき、普遍的兄弟愛と、すべての人種の統合である新しい人種とを、信じない勇気があなたにあるかどうか、私に言ってみなさい。

1915 年 4 月 8 日。

第十七の手紙

見張りに立つアメリカ人

私は、フランスについて、そして来たるべき新しい

人種の国であるアメリカのために、フランスが何をすることができるかについて、さらに語りたい。

私は以前、フランスの愛について語った。それは非常に大きな愛であり、その敵でさえ、彼女を憎むことができないほどである。私は、あらゆるものを分析し、互いに比較する、フランスの批評的天才を称賛した。しかし今、私は、フランスの魅力と礼儀について語りたい。

あなた自身が言ったことがある。礼儀作法とは、親切心をまねることである、と。まねることは、見習うことである。魅力ある礼儀を持つ民族には、心がある。ぶっきらぼうな民族は、心を育てる必要がある。

アメリカ人たちよ、学校でフランス人の教師を雇いなさい。フランス人の教師やフランス人の母親は、

子どもたちに、あることをしてはいけないと教えるとき、「それは美しくないから」「それは感じがよくないから」と言う。つまり、「それは親切ではないから」ということである。このようにして親切心をまねるなら、アメリカの子どもたちよ、いつの日か、本当にそれを感じるようになるかもしれない。

ふるまいにおける美しさを基準として立てるなら、倫理を忘れてしまう心配をする必要はない。あなた方は皆、母の乳と共に、ピューリタンの倫理を飲み込んで育った。だから、たまには変化として魅力を実践したからといって、それらの教えが失われる危険はない。

かつてフランスのあらゆる顔は、笑顔の顔であった。今日の午後、私があなたのもとへ向かう途中でフランスを通り過ぎたときは、そうではなかった。しかし、その顔は今でも勇敢である。なぜなら、悲し

みを大げさに見せびらかすのは、美しくないことだからである。もちろん、フランス人が過剰に喪服を着ることは、悲しみの見せびらかしと呼ばれるかもしれない。しかし、その黒い服は、フランスのすべての死者への敬意の印として着られているのである。

趣味のよさ！ それを持っている民族がある。そして、私がアメリカに、フランス人から学ぶよう勧めるとき、私は当然、その民族の良い性質を選んで語っている。私たちは皆、それぞれ自分自身の欠点を持っているのだ。

この時代に、アメリカ合衆国にいるフランス人たちの趣味のよさを見なさい！ 彼らは、自分たちの敵を攻撃する英語の新聞を発行しているだろうか。ワシントンで圧力団体を支え、ニューヨークに宣伝事務所を置いているだろうか。もしそうなら、私は聞

いたことがない。そして、私たちは、ここでほとんどのことを聞いているのだ——私たちは、耳を地面につけている者たちだから。

もし彼らが傷ついた祖国のために悲しむとしても、その涙を、アイロンをかけたばかりのアメ리카のシャツの胸元に落としたりはしない。もし彼らが敵を憎むとしても、彼らは静かで、育ちのよい憎しみ方で憎む。もしフランスが戦場で勝利したなら、彼らはそれについて大騒ぎしない。もしフランスが戦場で敗れたなら、彼らは敵をガラガラヘビや、その他の爬虫類の名前で呼んだりしない。それは美しいからである。それは倫理に反してはいないかもしれない。しかし、趣味が悪いのである。

アメリカ人は、あまりにも大声で騒ぎすぎる。私は、自分自身がまだアメリカ人であったころ、つまり、根を引き抜かれて、目に見えない普遍の世界の市

民になる前から、そう言っていた。そして、天使や達人や師たちと交わるようになってからも、その考えは変わっていない。彼らは決して大騒ぎしない。しかし、悪魔たちは、しばしばそうする。

私がアメリカに、フランスが最も優れていることをフランスから学べと勧めるからといって、他の民族を低く見ているわけではない。それぞれの国は、他のあらゆる国から、何かを学ぶことができる。中国人にも日本人にも、周囲の民族より優れている点がある。アメリカ人にもそうした点がある。

この戦争は、戦っているすべての民族の、支配的な性質と、その補い合う性質とを、はっきりと表に出した。あなたは、「ターバンを巻いたトルコ人」(あるいは、シェイクスピア風でなく言うなら、フェズ帽をかぶったトルコ人)が、だまされやすいということを考えたことがあるだろうか。裏切りやすい民族は、

いつでも、だまされやすいものである。ちょうど、残酷な民族が、自分自身に関わることについては、感傷的になりやすいのと同じように。

「自由なアメリカ」は、あまりにも多くの法律に気をつけなければならない。イングランドは、自分の徳をあまりに意識しすぎているので、いつの日か誘惑に負けるだろう。ドイツは、「すべての上に立つ」と言いながら、今や世界全体を自分の上に乗せてしまった。興奮しやすいイタリアは、今では、他のどの国にとっても危険なほど、慎重に考えている。「中立のアメリカ」は、あまりにも中立ではないので、その右手が左手を脅かし、その両方が身体全体を脅かしている。

Woodrow Wilson に対して、焦れてはいらない。彼は、現在の戦争の問題を、まるで紀元前 500 年の問題であるかのように扱っている。そし

て、長い視野こそが、しばしば最もはっきりした視野なのである。彼の中の教授は、彼の中の政治家よりも安全である。彼は、今は幸せではない。なぜか？ ああ、それは国家の問題である。そして私は、出版のために書いているのだ！ 私はあまりにも多くの秘密を知っているので、家庭医のように慎重なのである。

しかし、「今夜、見張りに立つアメリカ人」がいる。彼は誰だろうか。古き Abraham Lincoln である。彼は、自分が生き、そして死んだ国を見守るために、天国を捨てたのだ。

いや、私は彼について、これ以上は語らない。魂が休息を捨てることには、神聖なものがある。アメリカが次の大きな試練を通り抜けるまでは、彼はあまり遠くへは行かないだろう。それは、いつなのか？ 「美しい存在」が言うように、「だめです、子どもよ、

あなたは求めすぎています。」

それでも、あなたはなおも Abraham Lincoln
について知りたがっている！ 私自身も、ほんの数
年前には、彼について知りたがっていた。しかし、
私はあまり多くを尋ねはしなかった。それは、美しく
ないことだからである——フランスの母親たちが言
うように。

1915 年 4 月 8 日。

第十八の手紙

慈悲の師

私は前の本の中で、霊的な世界へ移ったあなたの

友人たちは、すべてを知っているわけではない、ということをおあなたに思い出させた。彼らの視野は以前より広くなり、その目は物質によって以前ほど曇らされてはいないが、それでも彼らは、占い師のように気軽に未来を予言できるわけではない——少なくとも、そうしようとしないうほうが賢明なのである。今、私はまさにその点を示す一つの例を思い浮かべている。ただし、今回の当事者たちは、霊的な世界の普通の住人たちよりも、はるかに高い存在である。

たとえば、この戦争の終わりに関するすべての細かな点について、私たちの考えが完全に一致しているわけではない。私たちの中には、しばしば方法と手段について話し合う二人がいる。二人とも、平和という同じ結果を望んでいるが、その結果を実現するための最善の方法については、少し違う考えを持っているのである。

私たちの兄弟の一人は、まだ大半の時間を肉体の中で過ごしているが、この戦争の中で、ある一つの国に降りかかろうとしている打撃を、できる限り和らげたいと強く願っている。私たちも皆、その国に対する打撃をできるだけ和らげたいと思っている。しかし、彼の心の中には、それが実行されれば、その打撃を大きく軽くすることになる計画がある。彼は、自分が望むやり方で、おそらくそれを実現できることを知っている。それでも彼は、事態を無理に進めるには、あまりにも賢明すぎる。彼は、無理に進めようとはしない。彼は、自分の考えに沿った平和の始まりを提案する力を持っている人々に、静かに靈感を与えようとしている。私たちは誰も、彼の愛に満ちた思考の流れを妨げようとはしない。なぜなら、彼は私たちの中で唯一の者——ここでいう「私たち」とは、ある程度まで発達した兄弟たちのことである——唯一、他のすべての民族よりも、一

つの民族に対して、より深い優しさを持っている者だからである。彼は、私たちの中の何人かほど古くはない。しかし、彼は最も偉大な者の一人である。

彼は、自分の望むことを実現できるかもしれない。しかし、個人的には、私はそれを確信していない。ある点では、彼は私より賢い。しかし、私の判断は、私自身の祖国に対する優しさには、まったく影響されていない。私の祖国は、まだ直接にはこの戦争に関わっていない。だから、その点では、私は彼よりも、より安全な判断者かもしれない。

これを、私の兄弟の弱さを認めたものだと受け取ってはならない。愛は弱さではない。

この兄弟は、少し前に、自分の弟子の手を通して、一つの予言を書いた。おそらく、それは実現するだろう。私たちの誰も、その実現を妨げるようなこと

はしない。実際、それが最善の方法であるなら、私たち全員がそれを支えることになるだろう。

たとえ師であっても、すべてを知っているわけではない。もっと低い段階の人々の曇った目には、師は何でも知っているように見えるが、そうではない。そして、師は、自分個人の意志を世界に無理に押しつけようとするには、あまりにも賢明である。黒魔術師は、自分の意志の力によって物事を起こそうとする。そして、多くの場合、それを実現することができる。しかし、彼は必ずしも、その反動を計算に入れてはいない。白い師は、常にその反動を計算に入れている。彼は法則と共に働くのである。

今、アメリカには、一つの魔術の学派が生まれつつある。なぜなら、彼らが実践しているのは、一種の魔術だからである。そして、この学派の教師たちは、自分の弟子たちに、どうすれば出来事を起こせ

るか、どうすれば、自分たちの心の物質的な欲望を、物質の世界に実現できるかを教えている。強い者たちは、それを実現することができる。もし、その欲望が、人類を前へ運んでいく大きな欲望の流れに逆らっていないならば。しかし、しばしば、そのような物質的欲望は、その人が背負っているカルマと、厳密には一致していない。つまり、今、解決されつつあるカルマの均衡が、一方向へ激しく引き寄せられすぎてしまい、その結果、その後の人生には、不幸なカルマ、弱いカルマだけが残されてしまうのである。それは、彼らが、この新しいおもちゃ、この魔法の力を用いて、現在の人生を甘く楽しい歌にしようとしている期間に、賢く配分されていなかったカルマである。

自分の望むものを得る方法は、大いなる法則が決めるものを、自分も望むことである。それが、師たちのしていることなのだ。そして、私は、数ページ前

に述べた私の兄弟の偉大さを否定しているのではない。彼もまた、私たち全員と同じように、大いなる法則の意志を望んでいる。そして、もし、彼の祖国への優しさが、その法則と調和しているように見える計画を思いつかせたとしても、その計画が法則に一致していないとわかったなら、たとえ実行できるとしても、彼はそれを実行しないだろう。

師ではない人間が、自分の判断をカルマの法則と戦わせるとき、そこには常に危険がある。もし貧しい人が裕福になりたいと願い、十分に強く願うなら、その人は裕福になることができる。しかし、その途中で、その魂が富よりもはるかに必要としている別のものを、失ってしまうかもしれない。

未来において、アメリカを待ち受けている最大の危険の一つは、黒魔術の危険である。新思想、キリスト教科学、儀式魔術、そしてさらに高尚な言葉を掲

げるいくつかの哲学を学ぶ百人の男や女のうち、その願いが完全に純粹で、私心のない者は、一人いるかどうかである。

アメリカには、大きな力がある。まだ誰も踏み入っていない丘や山々には、人間が利用することのできる、新鮮で新しい力が満ちている。また、アメリカの上に広がる霊的な世界——肉体の大陸のすぐ外側にある霊的な層であり、人間のオーラが肉体の外へ広がるように、大陸の外へ広がっている層——そのアメリカの上の霊的な世界の層には、元素的な力や霊的な力が満ちている。それらは、その使い方を知っている者には、意識して利用することができる。また、自分の個人的欲望が非常に強いために、その比較的個人性の薄い力が、その欲望や意志によって引き寄せられ、従わざるを得なくなる者たちには、無意識のうちに利用されているのである。

そのような力を悪のために用いる者たちには、大きな危険が、その道に潜んでいる。そして、利己的な欲望と悪との間には、非常に薄い幕しかない。

この新しい人種の中へ生まれようとしている者たちの中には、アトランティスの昔に、暗い道に沿って魔術を行っていたが、その仕事を途中で断たれた者たちが、多く含まれている。そう、アトランティスの物語は真実である。これらの魂の多くは、今、再び生まれつつある。ある者はここに、ある者は他の国々に。しかし、その主な流れは、新世界の方向へ向かっている。これからますます、新世界では、魔術の力が使われるようになるだろう。利己的な目的のために使われる魔術は、常に黒魔術であることを知っている、あなたや他の人々が、自分は他人を犠牲にしてでも、自分の運命を作り出せるのだ、という考えに魅了されすぎている者たちに、警告を与

えることが必要なのである。

この警告は、非常に必要である。そして私は、神秘的な知識を求める唯一の理由が、それを自分自身の利己的な目的のために使いたいからであるような人々に、言いたい。もし彼らが、新しい人種の中で、私心のなさのために働いている法則の前に立ち足るなら、彼らは、古代アトランティスで滅ぼされたときと同じように、再び滅ぼされるだろう。そして、私は、彼らの魂が滅ぼされると言っているのではない。彼らの人生が短くされ、彼らの悪い影響力が無効にされる、と言っているのである。

私が、現在の戦争の最中、そして戦争の前から、ヨーロッパでは「人工的な元素霊」が活動していた、と言っても、驚いてはならない。それらは、アトランティスの時代に作られたものである。それらの存在——なぜなら、それらには力と、擬似的な個性があ

るからである——は、この戦争で、はるか昔にそれらを作った者たち(今では再び生まれている者たち)によって、用いられている。それらは、引き寄せの力によって、自分たちの創造者のもとへ流れ着いたのである。

そうした存在の一つは、昨年七月に滅ぼされた。そして、私は、その滅亡を助けた。

新しい人種が生まれる時代には、意志には大きな力がある。あなたの意志を、法則に逆らってではなく、法則と共に使いなさい。

あなた方、自分の欲望を何よりも上に置く人々は、自分一人ひとりが、魂の流れの中の、一滴にすぎないことを理解しているだろうか。その流れから自分を切り離そうとする一滴は、水蒸気となって太陽に吸い上げられ、再び流れの中へ戻るまでに、長い

時間を待たなければならなくなるかもしれない。

さて、これらのことを、祖国のために打撃を和らげようとしている私の兄弟に当てはめて考えてはならない。私も、自分の祖国の未来を和らげたいと思っている。だからこそ、私は、アメリカに生まれようとしている新しい人種について書いているのである。しかし、もし、兄弟たちとの相談や、自分自身の靈感によって、新しい人種は他の場所に生まれるのが最善である、と知ったなら、私は、その別の場所でそれを実現するために、同じ献身をもって働くだらう。そして、私の兄弟もまた、そうするだらう。法則と共に働く私たちは、自分個人の愛よりも、人類全体の幸福を上に置く。すべての人種は、一つの人種——人類という人種——であり、私たちは、一つとなって共に働いているのである。

1915 年 4 月 10 日。

第十九の手紙

薔薇のヴェールをまとった見知らぬ者

ある日、私たちが「美しい存在」と呼んでいる天使

が、別の天使の手を引いて私のところへやって来た。この並外れた存在と長く関わってきたことで、私は、この存在のすることには、もはや何一つ驚かなくなっていた。私は、その気まぐれを、自分の意識を超えた、さらに高い意識状態の表れとして受け入れている。そして、この三年間に私が学んだ多くのことは、その気まぐれではあるが優しさに満ちた友情のおかげなのである。

前の著作で説明したように、私たちがより適切な言葉がないために天使と呼んでいる「美しい存在」は、一度も地上の肉体的な生活を経験したことがない。それは、人間とは別の進化をたどってきた存在であり、そのため、人間の生活についてのその見方は、非常に独特で価値あるものである。

それは微笑みながらやって来た。そして、自分によく似てはいるが、人間にははるかに似ていない別

の存在の手を引いていた。

天上の世界での紹介は、しばしば非常に型破りなものである。しかし、美しい存在は、人間の生活を観察しているので、ときどき人間たちのやり方を見事にまねて、私を楽しませる。

「薔薇のヴェールをまとった方よ」と、それは今、その天使の仲間に向かって言った。「私の友人『X』をあなたに紹介することをお許してください。彼は、最近地球という惑星から来た裁判官です。そして、歴史が作られつつある地域を、あなたに案内する役を、きっと引き受けてくれるでしょう。あなたの望むことを、何でも彼に尋ねてください。彼は答えてくれるでしょう——もし答えられるなら。彼は、あなたの遠い星の言葉については、まだ学んでいる途中です。しかし、最も粗い衣でさえ、思考の身体であるあなたとは、思考によって会話をすることができ

ます。」

私は、その見知らぬ者に会えたことを喜び、戦場を見せましょうか、と尋ねた。

「『戦場』という考えが、私にはわかりません」と、その者は答えた。「しかし、それを見たいです。」

「見たあとには、もっとわからなくなるでしょう」と、美しい存在は微笑みながら言った。

その日はちょうど、春の戦いの始まりで、フランスとベルギーの両軍が、いつもより活発に動いていた。私は、二人の友人を、戦闘を見ることができる場所へ案内した。

「下にいるあの存在たちは、互いに何を送り合っているのですか」と、薔薇のヴェールの見知らぬ者は

尋ねた。

「あれは、砲弾と呼ばれるものです」と、私は答えた。

「砲弾？」と、その者は戸惑って言った。

美しい存在が、私の代わりに答えた。

「シェルとは、壮麗に渦巻くような形をした家のことです。その中で、大海の私たちの兄弟たちが暮らし、遊んでいるのです。」

見知らぬ者の顔に浮かぶ困惑は、さらに強くなった。

「私の友人は忘れているのです」と、私は言った。
「あなたは地上の言葉を知らないのです。地上で

は、一つの言葉——つまり、一つの考えを表すための恣意的な記号——が、まったく異なる二つの意味を持つことがあるのです。」

「下にいるあの存在たちは、互いに何を送り合っているのですか」と、その者は繰り返した。

私は、その存在の話し方を、理解できる普通の英語に翻訳しなければならない。文字通りに訳せば、その言葉はこうなるだろう。「物体 存在たち 相互に送る？」

私は、霊的な身体を持つ天使たちとも、持たない天使たちとも、長く関わってきたので、そのような話し方にも慣れている。そして私は、自分の重くて不器用な母語を、より単純な観念の言葉へ訳しながら、答えた。

「私たちの下の野原にいる存在たちが、互いに投げ合っているものは、爆発する砲弾です。それには、他の物体の形を粉々に砕き、それらをあらゆる方向へ散らしてしまう、驚くべき力があります。」

「それは、一種の遊びなのですか」と、薔薇のヴェールの見知らぬ者は尋ねた。

「違います」と、私は答えた。「それは戦争です。」

「戦争？」

私の心の中で、「戦争」という言葉に結びついてい、あらゆる恐怖が、思考を通して、その天使の訪問者の心に伝わった。そして、その薔薇色のヴェールは、苦しみによって青ざめた。

「私が感じている、この奇妙な感情は何ですか」と、

その者は尋ねた。「本当に、もしここにあなた方が
いなかったなら、私は去りたいと思ったでしょう。」

「あなたが感じている感情は」と、私は言った。「戦
争の感情を、共感によって映し出したものです。」

「では、戦争とは何ですか。」

「それは、二つの敵対する魂の集団が、互いに感
じ、互いに満たそうとする、恐ろしい情熱です。そ
の情熱によって、彼らは本来持っている哀れみを
乗り越え、互いの肉体を大量に破壊できるようにな
るのです。」

見知らぬ者のヴェールは、ほとんど白くなった。

「神は、この恐ろしいことを許しておられるのです
か」と、その者は尋ねた。

「地球という惑星においては、許しておられます。」

もともと、「神」という言葉は、その天使の質問が表している考えを、十分に訳してはいない。しかし、ここではそのままにしておこう。本当の意味は、地上のどんな言葉でも、一語では訳せない。それは、愛と時間と目的とが、最高の力にまで高められたものであり、私は、それを表すほかの言葉を、「神」以外に見つけることができない。

「地球は、不思議な星なのですね」と、その天使は言った。

「この世界の住人たちにも、それと同じ意味のことわざがあります」と、私は答えた。「それは、人種の知恵の断片であり、遠い祖先たちから受け継がれてきたものです。彼らは、この星に置かれ、自分た

ちの天上的な意識を、この理解しがたい世界の条件に合わせようとした最初のころ、お互いにこう言ったのです。『これは不思議な世界だ』と。」

「では、彼らは、この惑星の条件のために、私たちの前で、この恐ろしいことをしなければならないのですか。」

「いいえ。」

「では、なぜ彼らはそうするのですか。」

「習慣の力からです。」

「では、かつては必要だったのですか。」

「遠い昔には」と、私は言った。「人間たちは、今よりももっと孤立しており、肉体を持って生まれている

数も少なかった。そして、彼らの教育を任されていた、輝かしい大天使が、二人ずつ互いに争わせることによって、勇気や工夫する力を育て、個我を強くするように教えたのです。」

「しかし、下には何百万もの存在がいます！」と、その天使は叫んだ。「そして、私は、何千もの身体が倒れるのを見えています！」

「それが、彼らが『大勝利』と呼ぶもののなのです」と、私は言った。「そして、彼らの指揮官の一人は、非常に多くの者を殺した者たちに、小さな鉄の十字章を与えるのです。」

「鉄の十字章？ なぜ鉄なのですか。」

「鉄は、マルスの金属だからです」と、私は言った。
「マルス——彼らの戦争の神です。」

「では、なぜ十字なのですか。」

「それは、彼らのキリストの象徴です。」

「人々がお互いを愛するようにするために、この地上で死んだ、その方ですか。」

「その通りです」と、私は認めた。

「本当に、私は、この人々の遠い祖先たちの意見に賛成です。彼らは、『これは不思議な世界だ』という言葉を、子孫に残しました。」

「もっと近くへ行ってみたいですか」と、私は尋ねた。

その見知らぬ者はためらった。それから、辛抱強い

微笑みを浮かべて言った。

「私の友人は」と、その者は美しい存在を見ながら言った。「私に、この星について、何かを学んでほしいと思っています。もっと近くへ行ってみます。」

私たちは、敵同士を隔てている小道の、百フィートほど上まで降りて行った。

「見てください！」と、その見知らぬ者は叫んだ。「魂が身体を離れています！ この行為の目的は、魂を束縛から解放することなのですか。」

「直接には、そうではありません」と、私は答えた。「彼らは、それぞれ、相手を束縛しておきたいと思っているのです。しかし、それを十分に行うことができないので、逆の方法を取るのです。」

見知らぬ者は、さらに困惑したように見えた。

「私の友人は」と、美しい存在が私に説明した。「対立の法則が存在しない領域から来たのです。」

「あなたは、私たちの旅の中で、そこへ私を連れて行ってくれたことはありませんでした！」と、私は叫んだ。

「ええ。あなたは、対立の法則に、とても愛着を持っていますから。」

これは、私と美しい存在との間にある、昔からの冗談だった。

「見てください！」と、その見知らぬ者が私の言葉をさえぎった。「今、こちらへ魂がやって来ます。」

私は、その新しく来た者を迎えに前へ進んだ。彼は

ドイツ軍の将校だった。

「ようこそ」と、私は言った。しかし、彼には私の言葉がわからないようだった。彼の霊的な身体の顔は、まるで苦しみながら死んだかのように、ゆがんでいた。

ところが、美しい存在は、地上のすべての言語を知っているように見える。そして、その性質があまりにも純粹であるため、地上では、それを理解できる者はほとんどいないのだが、魂が肉体を離れると、その魂の中に、その天使の生命をこれほどまでに強く、素晴らしいものにしている高い振動に応じる何かがあるなら、美しい存在の言葉を理解することができるのである。

「ようこそ」と、美しい存在は、その魂に、その者の祖国の言葉で語りかけた。

「私は、どこにいますか」と、戸惑った魂は尋ねた。

「あなたは、世界の上にある領域にいます」と、美しい存在は答えた。

「それは……」

「つまり、あなたの名前は、死者の名簿に載るということです。」

「では、とうとう来たのですね！」

「そうです。」

「しかし、私はいつも死を恐れていました。」

「見ての通り、恐れるようなものではありません。」

「皇帝陛下は、どこにおられるのですか。」

「司令部にいます。」

「私は、陛下に報告することはできないのですか。」

「望むなら、できます。」

私たちは、さらに東へ移動した——ゆっくりと。なぜなら、新しく自由になったばかりのその魂は、まだ、距離というものが何でもないということを学んでいなかったからである。

私たちは、「戦争の支配者」が、机のそばに座り、地図を見つめているところを見つけた。彼の顔は、やつれ、疲れ果てていた。

「そこにいるのが」と、私は見知らぬ者に言った。
「自分の国以外の全世界から、この巨大な戦争を
引き起こしたと信じられている男です。」

見知らぬ者(そして、その魂もまた)は近づき、戦争
の支配者の脳の中にある思考を読んだ。私は、そ
れを、そのまま書くことにする。まともではないが、
その意味は悲劇的であった。

「我が軍の大虐殺だ！ 神よ、イングランドを罰した
まえ！ 私は主に選ばれた者だ！ 私は間違ふこと
ができない！ 将軍たちが失敗したのだ。私は—
—(今、私たちが連れて来たばかりの者の名前)—
—を降格させよう。この敗北は、あいつの責任だ。
私は、あの塹壕を奪えと命じたのだ。ところが、あ
いつは、我々の塹壕を失った。私は間違ふことがで
きない！ 私は主に選ばれた者だ！」

美しい存在は、かつて将軍であったその魂のほうへ向き直った。

「皇帝に報告したいですか。」

その魂が私たちに向けた目は、悲しみに満ちていた。

「皇帝陛下のお手を煩わせることはありません」と、彼は言った。

私たちのあいだに、沈黙が落ちた。しばらくしてから、美しい存在は、再び将軍のほうへ向き、その顔は、優しい憐れみに満ちていた。

「あなたのために、何かして差し上げられることはありませんか」と、それは尋ねた。

「私を、母のところへ連れて行っていただけますか。
母は、戦争の初めのころ、私のたった一人の兄弟
が死んだ悲しみで亡くなったのです。私は、とても
疲れています。年老いた母に会いたいのです。」

薔薇のヴェールをまとった見知らぬ者の目は、驚き
で輝いていた。

「なんと、この不思議な星にも、愛があるのです
ね！」と、その者は言った。

1915 年 4 月 11 日。

第二十の手紙
戦場の上で

あなたの心に、一つの戦場を思い描いてほしい。

長く続く、不規則に並んだ二重の列——兵士たち、砲、馬、そして戦争に伴うあらゆる道具が並んでいる。

地上にいた昔、私は戦争の理論と実際について、いくらか研究したことがあった。しかし、その労力は、この戦争を理解する準備としては、ほとんど役に立たなかった。それは、もはや存在しない状況を当然のものとしていたばかりか、そのときの私の観察地点は、想像上の戦場の、どちらか一方にある想像上の地点にすぎなかった。だが今、私は本当に、ここにも、そこにも、あらゆる場所にもいる。私は両軍の指揮官たちの思考を読み、塹壕の兵士たちと共に、時には泥と水に半ば埋もれながら過ごす。私は騎兵と共に馬に乗り、砲兵の砲と共に前進する。私は死者たちの逃れ出る魂と共に上へ向かい、そして彼らと共に、彼らが肉体から激しく引き離されたあと、ほとんど必ずしばらくの間飲み込ま

れてしまう、混乱の地獄へと入っていく。

まことに、「戦争は地獄」である！ 平和な場所に住み、自分の知らないことについておしゃべりしながら、戦争に輝かしい幻想を抱いている人々よ、どうかその逆であるという思い込みを捨てなさい。

恐怖は、砲撃が止んだあとに終わるわけではない。雨の降る暗く静かな夜は、困惑と苦痛の中にある魂で満ちている。しばしば、一人の魂が、あちらこちらを手探りでさまよい、戦争という醜い茎に咲く甘い花——戦友の絆——の中で親しくなった塹壕の仲間を探している。しばしば、彼らは攻撃の怒りと狂気を、何度も何度も繰り返して体験する。彼らは、想像上の敵の姿に、想像上の銃剣を突き立てる。あるいは、もし彼らが集団になっているなら——そして彼らはたいてい集団になっている——目の前にあるものなら何にでも、無茶苦茶に打ちか

かる。常に、そこに敵対する力があると感じているのである。

前の手紙で書いた将軍は、際立って霊的に発達した人物だった。彼は、物質のもつれからすぐに抜け出した。彼は、自分の祖国を神とし、皇帝を、憧れを抱いて従うべき英雄とする献身者であった。しかし、戦場で死ぬ大多数の人々は、後ろにいる大勢の意志によって戦う、ごく普通の兵士たちである。彼らは、たいてい、しばらくのあいだ暗闇へ入っていき、そのほとんどが、さまざまな期間、暗闇と困惑の中をさまよう。

反対に、死んだ瞬間から、ほとんどはっきりと意識を保っている者たちもいる。そういう者たちは、眠っている敵軍の兵士たちを攻撃することがある。戦場に関わる夢は、その激しさにおいて恐ろしい。

また時には、全体の混乱の中で、区別というものが完全に失われてしまうために、自分たちは敵同士だと思っていた魂たちが、「見えない世界」を隔てる暗闇の悲しい切望の中で、互いにしがみつくこともある。彼らは、自分たちの深い苦しみの中で、以前の友と以前の敵との区別がつかなくなっている。これもまた、戦争という醜い茎から咲く、もう一つの青白い花である。

霊的な成長の低い人々の霊的な姿は、しばしばここで、恐ろしいほど歪んだ形で見つかる。彼らの意識は、かすかな灯のようなもので、痛み以外には何も感じる力を持っていない。だからこそ、人類を無私に愛する人々の夢が、この世界の暗い夜のあいだ、恐怖で満ちているのも不思議ではない。というのも、あらゆる国に、戦ってはいない人々が大勢いて、その眠りの時間を、あまりにも恐ろしく助けを必要としている魂たちのための献身的な働きに捧

げているからである。あなたの知っている一人の男も、この時期、ほとんど人間離れした重荷を背負っているが、それを誰にも語っていない。

あなた自身が、何か月ものあいだ、夜をどのように過ごしていたかを、私がここで述べる必要はない。そして、私たちがあなたに、その働きをやめるように言ったのは、ただ、私の口述によってこの文章を書く仕事のために、もっと力を残しておいてもらうためだった。まだ肉体の中にある魂は、一日中働き、さらに一晩中働くことはできない。それは、霊的なろうそくを両端から燃やすようなものだからである。

あなたが、今は戦争によって荒れ果てている国々に戻ったとき、あなたの友人たちの中には、この恐ろしい数か月のあいだ、あなた自身とよく似た体験をしたと語る者たちがいるだろう。役に立てる人々

は、必要が最も大きいときに呼ばれる。そして、今の必要は、計り知れないほど大きい。

理解しなさい。霊界の低い領域にいる魂たちは、実際に、物質の惑星の地表近くの空間にいるのである。戦場の上にとどまり、自分が最期を迎えた場所の上を漂っている者たちは、なおも戦いの角笛の音に震え、あるいは恐怖を感じている。彼らは、なおも砲弾の悲鳴のような音を聞き、爆発の粉碎する力を感じることができる。来る日も来る日も、この不幸な地上に縛られた者たちは、戦争の感情を何度も何度も繰り返して生きている。夜ごとに、彼らは、朝になって再びその音が始まることを恐れている。彼らは逃れることができない。自分の身体が数フィートの土の下に埋められているからといって、あるいは、さらに悪いことに、埋葬もされずに放置されているからといって、自由になったわけではないのである。

私は、少なくとも数年間は、こうした戦いの現場を避けるよう、あなたに勧める。スイスへ行くことはできるし、フランス南部の地域へ行くこともできる。しかし、フランス北部やベルギー、または同じような影響を受けた他の場所には、長く滞在してはならない。

イングランドの思考の世界は、今は混乱している。しかし、地表のすぐ上にある霊的な層は、死の恐ろしい放射で満ちてはいない。より恐ろしい地域から、霊的な姿をした者たちがそこへやって来ることはある。しかし、そこへ行くためには、彼ら自身が、自分たちの最もひどい苦しみの現場から抜け出していなければならない。

悲しい思考の形から自分を守ることは、戦場の上にある、混乱した霊的存在や、沸き立つような霊的

物質から自分を守ることより、ずっと容易である。

なぜなら、この戦争の前でさえ、ワーテルローの戦場は、夜を過ごすのに心地よい場所ではなかったからである。時が過ぎたのちには、実際に経験を積むために、最近の戦場を短く訪れることはできるだろう。しかし、まだ今は行ってはならない。長い期間、ヨーロッパで最もよい場所は、スイスの山々である。あなたは、そこに多くの時間を過ごすべきである。

あなたは、自分が子供だったころ、故郷の州の丘や谷で、アメリカ先住民たちの姿を見ていた、と私に話してくれたことを覚えているだろうか。彼らは、何年も前に、太陽の光の中でその丘や谷を歩いていた者たちであり、なおもその地方の上にある、薄い霊的な物質の中にとどまっていたのである。子供の目は、ときに非常に澄んでいる。ヨーロッパのあの

戦場の上では、敏感な目を持つ者には、何年ものあいだ、逃れることのできない者たちの姿が見えるかもしれない。そして、私が言っているのは、アカシック・レコードのことではない。戦争は地獄であり、その地獄は、講和の書類に署名したからといって終わるものではない。

だからこそ、私たちは、あなたや、兄弟愛を信じている他の人々に、戦争をした国々の間に、その兄弟愛の精神を運んでほしいのである。静かで揺るぎない、大きく真実な理念への信仰が、どれほどの力を持っているか、あなたには想像もつかない。真に仲間を愛している人は、自分のすぐ近くの友人たちの輪を越えて、より広い影響を及ぼしている。その人の周囲の雰囲気は、その兄弟愛で満たされており、感受性の強い魂たちは、それを感じることができる。

いつの日か、その気持ちを胸に抱いて、ライン川を
船でさかのぼりなさい。

1915 年 4 月 12 日。

第二十一の手紙

煉獄にいる一つの魂

ほんの少し前までは人間として地上を歩き、家から

会社へ、会社から家へと毎日の生活を送り、妻や子供たちを愛し、仕事の合間には世間話を交わしながら、自分たちが刻一刻と大いなる出来事へ近づいていることに少しも気づいていなかった魂たち——その多くを、戦場の激しい怒りが導いていく煉獄について、私はあなたに語ってもよいだろうか。よい、私は語ろう。

私たちは、私自身が追っていた一つの魂を追っていくことにしよう。彼の物語は、記憶から再現することができる。なぜなら、その一つ一つの出来事が、私の心に焼きついているからだ。いや、私は脳細胞を使って記憶しているのではない。あなたもまた、脳細胞という牢獄から逃れたときには、そうなるだろう。

その男は、イギリス軍のある連隊の士官で、独身だった。外見は他の男たちと大して変わらなかった

が、その意識は違っていた。彼は、自分だけの世界に生きていた。なぜなら、彼は読書をし、考える人間だったからである。彼は、それほど善い人間ではなかった。あなたたち——イギリスが戦争中の今でさえ、愛する母なる島に対するどんな批判にも怒りを見せるあなたたち、そして私のために書いているあなたたち——よ、イギリス人のすべてが善人というわけではない。

この男がそれほど善い人間ではなかったのは、彼の心の中に愛がほとんどなかったからである。彼には愛する力がなかったわけではない。しかし、他人の中に愛を呼び起こすことができず、そのため、魂は飢えていた。だが時折、彼は激しい憧れを感じる事があった。そして、その憧れが訪れると、彼は苛立ち、酒を飲むか、召使いを怒鳴るか、あるいはその両方をした。時には、世の中や自分自身に最も腹を立てているとき、彼は羽目を外して騒ぎ回っ

た。

戦争が始まった。

彼の生まれつきの苛立ちやすさは、遠征の慌ただしさや騒音の中に、自分に合うものを見つけた。彼は出征することを喜んだ。

彼はロンドンで一人のドイツ人を知っており、その男を心の底から嫌っていた。そのドイツ人は話しすぎたし、その大きな声は、洗練されたその士官の敏感な耳には不快だった。彼は部下を率いて戦いに向かうとき、そのドイツ人のことを思い出した。ついに、自分はあの男と真正面から戦っているのだ、と感じた。そして、その感覚は彼に満足の震えを与えた。

憎しみは、ほとんど感覚的な快楽になっていた。そ

のドイツ人は、横柄な性格によって、かなり粗野なタイプの一人の女性を魅了していた。その女性に対して、この士官は、苛立ちながらも惹かれていた。彼は、その惹かれてしまう自分を憎み、その気持ちを妨げたドイツ人を憎んだ。私たちはいつも、自分が嫌っている感情を妨げる者を憎むのである。

その士官は、戦争初期に、ドイツ軍の弾丸によって殺された。どこでか？ いや、それは問題ではない。その男を見分けてしまう人がいるかもしれない。そして私は、本人が望まない秘密を漏らすような人間ではない。私は、人生という鍵穴からのぞくとき、聞いたことを何もかも話すことはしない。私は慎重さを持っている。

私はこの男を、私の友人と呼ぶことにしよう。なぜなら、私は彼の友人であったし、そう呼ぶ権利があ

るからだ。

私の友人が死を迎えた戦いの前、私は彼のそばにとどまり、彼の心の中にある固い感情を和らげたいと思っていた。そのような感情は、北方戦線のある地域の兵士たちには、普通は見られない。彼らにとって、戦いとは、一種の美化された競技のようなものだった——少なくとも、昨年九月までは。

私の友人は例外だった。そして、私が彼について書くことにしたのも、その例外的な性質を示すことによって、読者があまり震え上がらないようにするためである。私は、読者に、自分たちの友人も同じような経験をしたのだと思ってほしくはない。このページの上から見守っているあなた、私の友よ、私の友人は、あなたの友人ではなかった。あなたの友人たちの経験は、もっと穏やかなものだった。彼らは皆、彼よりも善い人々だった。なぜなら、あなたは

彼らを愛していたからである。そして、この男が善くなかったのは、彼が十分に愛されていなかったからだ。

彼は、一発の銃弾によって死んだ。そのあと、彼の前はすべて暗くなり、しばらく意識を失っていた。

彼は、砲弾が炸裂する音によって目を覚ました。

「戦闘が始まったのか」と、彼は思った。「ちくしょう、あの男め！ 夜明けに私を起こすべきだったんだ。」

彼は、自分の連隊の兵士たちの中にいた。彼らは、いつもより大きく見え、輪郭がぼやけていた。彼は目をこすった。

「くそったれ、いったい誰を私の代わりに入れたん

だ！」

なぜなら、自分が指揮していた場所で、下級士官が指揮しているのを見たからである。

彼は一度背を向けたが、また戻ってきた。問いたさなければならぬ！ 彼は、自分の上官がいるはずの、少し離れた場所へ向かった。すると、自分が瞬時にそこへ移動していることに気づいた。

「私はどうしたんだ？」と、彼は思った。「気が狂ったのか？」

彼は上官に敬礼した。しかし、その上官は彼に全く注意を向けなかった。

「私は眠っているのか？」と、彼は不思議に思った。

彼は、銃に弾を込めている一人の兵士のところへ行き、その腕に触れた。その兵士も、やはり彼に注意を払わなかった。彼は、その男の腕を強くつかんだ。それでも、その男は彼に注意を払わず、銃を構えて撃った。

私の友人は、二人の男が話しているところへ向かった。

「かわいそうな……！」と、そのうちの一人が言うのを、彼は聞いた。「心臓を撃たれたんだ！ 気難しい男だったが、いい士官だった。死んだのは気の毒だ。」

彼らが話していた士官とは、彼自身のことだった。

「心臓を撃たれた——いい士官——気難しい男——死んだ！」

彼にはわかった。知るということは、もっとゆっくり訪れることもある。彼は「死んで」いたのだ。

「まったく、私らしい運命だ」と、それが彼のとっきの思いだった。そのとき、また一発の砲弾が彼の後ろで炸裂し、粉々に砕けるような轟音を立てた。

突然、彼は、自分の注意を釘付けにする一つの顔を目の前に見た。それは、悪意に満ちた、傲慢な顔だった。すると、その顔は変わり、彼が憎んでいた、イングランドにいたあのドイツ人の顔になった。

「やっぱり、お前だったのか？」と、彼は言った。

その幻は何も答えなかった。しかし、再び姿を変えた。今度は、私の友人が、好いてしまった自分を憎んでいた、あの女に似ていた。

「お前もか！」と、彼は苛立って言った。

再び、その幻の顔は変わった。今度は、私の友人が、一度叱りすぎて、一年前に彼のもとを去った召使いに似ていた。

「お前も死んだのか？」と、彼は尋ねた。しかし、彼の前の顔は、もう元の姿に戻っていた。それは、ただ、悪意に満ちた、傲慢な顔で、特に誰かに似ているわけではなかった。

「いったい、お前は何なんだ？」と、私の友人は問いただした。しかし、それでも答えはなかった。

その幻の目が、彼の興味を引いた——左の目である。彼がそれを見つめていると、その目は次第に大きくなり、射撃場の標的ほどの大きさに見えるよう

になった。その虹彩は、奇妙な緑がかった青色で、目のちょうど真ん中にあり、そのため白目が周囲にぐるりと見えていた。黒い瞳は、集中的な悪意をもって彼を見つめていた——受け皿ほどもある大きな瞳であった。

「なぜ、そんなことをするんだ？」と、私の友人は尋ねた。しかし、その目もまた、何も答えなかった。

そして、それは消えた。

その代わりに、憎しみに満ちた影の一団が現れた。醜い影たちだった。人間のようなものもいれば、人間以下のようなものもいた。近くでまた一発、砲弾が炸裂し、その影たちは踊り始めた。彼らは彼に飛びつき、彼を巻き込み、ぐるぐると回した。何度も何度も回し続け、彼は目を回した。すると突然、彼らは止まり、その一人一人が、彼の友人がイングリ

ドで憎んでいたあのドイツ人の姿に変わった。さらに、別の狂気じみた存在たちの集団が、その中に混じった。彼らもまた突然姿を変えた——そこには、友人が、好きになってしまった自分を憎んでいたあの女の複製が、十人ほどいた。そして、その女たちと、彼の敵の複製たちは、互いに手を取り合い、口づけを交わした。

気分が悪くなり、嫌悪に震えた友人は、この場所から消えてしまいたいと思った。すると彼は消え、気づくと、野原の向こう側にいるドイツ軍の兵士たちの中にいた。彼は、自分の嫌いな言語の響きを耳にした。

「いったい、悪魔め！」と、彼は思った。すると、悪魔が彼の前に立っていた。ひづめも、角も、尻尾も、すべてそろっていた。

「今まで、私のことを考えたことはなかっただろう？」と、その邪悪な存在は、せせら笑った。

その姿は、醜い付属物をすべて備えていたが、それでも驚くほど彼自身に似ていたので、友人は傷つき、困惑した。

「お前も、すぐに姿を変えるのか？」と、彼は尋ねた。

「ああ、いや」と、悪魔は答えた。「私は、ゆっくりとしか変わらない。私は、お前が変わるのと同じようにしか変わらない。」

「どういう意味だ？」

「お前だけが、私を変えることができるのだ。」

「なら、変われ！」と、友人は言った。しかし、悪魔は以前のままだった。

「変われ！」と、友人はもう一度言った。しかし、彼の前の姿は、少しも変わらなかった。

「では、お前は、私が変えられると言ったとき、嘘をついたのだな！」

「私は、ゆっくり変わると言った。」

「どういう意味だ？」

「私は、お前が変わるのと同じようにしか変わらない。」

「では、私はまだ変わっていないのか？」

「お前が変わらないようにしておくのが、私の仕事なのだ。」

自分の悪魔を連れて、私の友人は、ここで詳しく述べることは控えるような光景を通り抜けていった。ゲーテが『ワルプルギスの夜』で、私よりずっと見事に描いているからである。向こう見ずになり、絶望しきった彼は、その導き手に従った。疲れ果て、力尽きるまで。日々が、そして何週間もの時が、悪夢のように過ぎていった。

「私は、いつになったら、お前から逃れられるのだ？」と、彼は自分の連れに尋ねた。

「お前は、私から逃れることができる」と、悪魔は答えた。

「どうやって？」

「自分自身から逃れることによってだ。」

「言うのは簡単だ。」

「そうだ、言うのは簡単だ。」

しばしば、彼らは戦場の前線や、兵士たちの食事の場にいることに気づいた。コーヒーや、料理された肉の匂いは、私の友人に、一時的な満足を与えた。彼は、自分の姿を見ることも、拒むこともできない兵士たちが口に傾けているブランデーの瓶から、飲もうとした。彼は、飢えと絶望に浸りきった。彼の仲間たちは、いつも、彼が憎んでいた男や、愛していた女の姿に変わった。彼は、彼らの下品な愛のやり取りを目にした。時には、その女の幻が、親しげな言葉を彼に向けることもあった。彼は彼女を罵った。しかし、その手にはしがみついた。だが、彼の口

が彼女の口を求めた瞬間には、いつも彼女は消えてしまった。

時には、大きな戦闘の中で、戦争への怒りが彼の中によみがえった。彼は、自分が味わっているあらゆる苦しみへの復讐をするかのように、敵軍の兵士たちへ飛びかかった。彼は、彼らの手から銃を引きはがそうともがいた。そして、そのうちの一人が肉体から抜け出したときには、その魂を、沈み込んでいく暗闇と眠りの中から目覚めさせようとした。しかし、彼には決してそれができなかった。何一つ、うまくできなかった。彼の存在そのものが、失敗と空しさと絶望だった。

ある日、私は彼のところへ行き、その額に触れた。

「あなたは、ほかの者たちとは違う」と、彼はぼんやりと言った。「どこから来たのですか？」

「私は遠くから来た」と、私は言った。「私と一緒に
行きたいですか？」

「ここから離れられるなら、どこへでも」と、彼は答えた。

「一人になりたいですか？」

「いや。一人のときが、一番つらい。」

「最悪の時期は終わった」と、私は言った。

「どういう意味ですか？」

「つまり、あなたの低い欲望の泉は、今は、しばらく
尽きたということだ。あなたは、自分が肉体から抜
け出して以来送ってきた生活に、疲れ、嫌気がさし

ている。」

「『抜け出した』とは、変な言い方ですね。今になって初めて、私は逃げ出したいと思っているのに。」

「そして、あなたが、自分を閉じ込めている牢獄の、もう一つの層、あなたを包んでいる玉ねぎの皮の、もう一枚から抜け出せるように助けるのが、私なのだ。」

「なぜ、あなたはそんなことをするのですか？」

「その皮を破るために、無駄にもがかず済むようにするためだ」と、私は言った。「眠りたいですか？」

「少し休みたい。」

彼が眠っているあいだ、私はさらに彼をゆるめてやった。そして、彼が、より自由な別の世界に目覚めたときにも、私はまだ彼と一緒にいた。

「何を見たいですか？」と、私は尋ねた。

「美しいものを」と、彼は答えた。「美しくて、清らかなものを。」

「妖精たちの踊りを見てみたいですか？」と、私は微笑みながら尋ねた。

「妖精たちの踊りですって？ 本当に、そんなものが存在するのですか？」

「宇宙には、数えきれないほど多くの生命と意識の形があります」と、私は言った。「そして、あなたは、自分の経験によって悪魔を信じるようになったので

すから、きっと妖精も信じられるでしょう。」

私がそう言うと、彼らは私たちの方へやって来た。しなやかで、かすかな姿をした者たちで、エリュシオンの野の花咲く場所を、喜びながら踊っていた。彼らは私たちのまわりを揺れながら回った。その存在たちは、自分たちが動く空気のように清らかで、自分たちが放っている幸福のように軽やかで、希望のように永く続き、人間の夢よりも美しかった。

私の友人の顔からは、すべての影が消えていた。そして彼もまた、喜びを味わっているように見えた。彼もまた、空気のように軽やかで、清らかだった。彼は彼らの踊りに加わり、私のまわりを、彼らと一緒に回った。

打ち明けるように言うが、私もまた、妖精たちと踊ったことがある。この、美しい存在の仲間であり友

人である者は、普遍的な生命の海を泳ぎ、責任から解き放たれた翼に乗って漂ったことがある。世界の悲しみをあまりにも多く知っている者は、ときには、喜び以外の何も知らないことによって、その重荷を軽くしなければならない。

そのシルフたちが、より汚されることのない自分たちの隠れ家へ去って行くと、別の姿が、私たちの方へやって来た。

「今度は、何を見たいですか？」と、私は彼に尋ねた。

「イングランドでまだ生きている人に、会うことはできますか？」と、彼は少し恥ずかしそうに尋ねた。しかし、その声には、自分の望みを信じている魂たちに特有の、魅力ある自信があった——欲望が浄められることで訪れる、より高い知恵である。

「たぶん、できます」と、私は答えた。

私たちの方へやって来た姿は、私には見覚えがなかった。しかし、私の友人は、その姿を見て、喜んで迎えた。強く、生き生きとした個性を持った女性だった。しかし、私たちがいた領域では、それなしには交わりが不可能である、あの清らかな雰囲気をも持っていた。その女性は、私の友人のそばに立っていた。

「少し、一緒に座りましょう」と、私は言った。「その方が、もっと家にいるような気持ちになるでしょう。」

私のそばにいた二人は、互いの存在を喜んでいるように見えた。二人は、「姉妹のように優しく、手を取り合って」座っていた。そして、私は、そのうちの

一人が、生きている女性の幻影にすぎないことを知っていたが、それでも、その瞬間には、彼女もまた私には現実の存在に思えた。なぜなら、心の優しい感情は現実のものであり、私が友人を連れて来たその領域では、あらゆる感情が優しいものだからである。そこには敵はいない。そして、彼が好いていたその女性も、彼を好いていた。そうでなければ、彼女はそこに来ることはできなかっただろう。

やがて私は、二人をそのままにして、再び戦場の仕事へ戻った。まだ、私を必要としている者たちがいたし、私の友人は、今のところ安全だったからである。

しばらくしたら、私は彼を、さらに制限の少ない体験へ導くつもりである。私たちは、自分たちが助けた者たちに関心を持ち、さらに助けてやりたいと思うものなのだ。

なぜ私が、この男を、自分の親しい助けの対象に選んだのか、とあなたは不思議に思っているだろう。というのも、私はこの手紙の最初で、彼を、魅力的ではない人物として描いたからである。

一つ、小さな秘密を教えよう。私が彼を選んだのは、彼が魅力的ではなかったからである。これまで、誰一人として、彼を十分に愛したことがなかった。そして、そのために、彼は他の人たちよりも、助けを必要としていた。愛されている者は、すでに、その愛によって助けられている。美しい存在が言うように、「私の言いたいことがわかりますか、地上の娘よ？」

今、私は、この戦争の恐怖の中を通して、人類に仕えるために生きている。あなたもまた、自分の愛を最も引きつけない人々を愛することによって、仕え

なさい。そうすれば、あなたは、慈悲のマスターたちが歩んでいる道へ続く小道を学ぶことになるだろう。

1915 年 4 月 14 日。

第二十二の手紙

平和のための働き

私が、濃い物質に縛られた状態と、より清らかな領

域の自由との間にある中間の世界での、あの空しい苦闘について語ったことで、あなたは衝撃を受け、悲しんだだろうか。しかし、それは悲しむべきことではない。それは、ただ必要な移行の段階にすぎない。それは、ほんの少しの間しか続かない——数日、あるいは数年。だが、それが何だというのだろうか。永遠という果てしない時間の中では。あなた自身も、すでに何度もそれを通り抜けてきた。より自由な生命へ向かうときには、誰もがそこを通る。ただし、私の友人のように、それを意識しながら、長く苦しむ者ばかりではない。それは悪夢である。そう、確かに悪夢だ。しかし、悪夢は永遠には続かない。その向こうにある喜びと自由を思いなさい！それらは、渡し守に払う小さな銭の価値くらいは十分にある。

確かに私は、この移行の中で起こりうる最も恐ろしいことを、あなたには語っていない。戦場のまわり

を巡る旅の中で、私が見た最も恐ろしいものも、語ってはいない。それらの、まだ書かれていない章は、この本には必要ではない。この本は、分離の代わりに兄弟愛を、戦争の代わりに平和を教えるために、私が口述しているものだからである。

あなたが、この戦争を少しでも早く終わらせ、平和が訪れるのを早めるために、何ができるかを知りたいだろうか。ならば、聞きなさい！

あなたは、自分自身の力で、平和が来るのを早めることができる！ この考えは、驚くべきものだろうか。私が「あなた」と言うとき、それは他の人々をも意味している。戦争に、そして戦争の母である憎しみに、疲れ果てているすべての人々を意味している。

人生という戦いの中で——人生は、一種の戦争で

ある——誰かがあなたを傷つけたことがあるだろうか。

自分の望みと衝突した望みを持つ人々、自分を傷つけた人々、自分を憎んだ人々のところへ、思いによって向かいなさい。一度に何人もではなく、この試みでは、一人ずつ、その人のところへ行きなさい。そして、一人ずつ、その人を理解しようとしなさい。その人の目で、自分自身を見なさい。その人の心で、自分自身を感じなさい。もし、その人がまだあなたを憎んでいるなら、最初は、その人に共感するあまり、自分自身を憎むかもしれない。しかし、その人に共感したまま、その場所にとどまっていれば、あなたに対するその人の厳しい思いは、次第に変わっていくのを感じるだろう。そして、ついには、その人を通して、自分自身と友になり始めるだろう。

私があなたに勧めていることは、「黒魔術」の一種ではない。なぜなら、その目的は利己的ではないからである。あなたは、世界の敵意を和らげるための始まりを作っているのである。しかし、私は、あなたに警告しておく。自分が利己的に、あるいは激しい情熱をもって愛している人の好意を得るために、この方法を使ってはならない。そうすれば、その反動として、きわめて望ましくない不調和の状態が生まれてしまうだろう。

このようにして、自分の個人的な敵をすべて理解し、許したなら、次には、戦争をしている国々の魂の中へ入りなさい。そして、それらの国々をも、共感によって理解し、その心を和らげなさい。これは、先ほどの方法より、はるかにやさしい試みである。しかし、その結果は、努力に比べて、あまりにも大きく見えるかもしれない。だが、小さなものも、大きなものも、すべては全体の一部なのである。

そして、ここで私は、民族の霊、民族の存在という考えに話を進めたい。なぜなら、どの民族にも、それを守る存在がいるからである。それは、多くのものが集まった存在でありながら、それでいて、一つの独立した意識を持っている——あなたには、おそらく理解しにくい仕方で。

あなたは、国から国へ移るとき、自分自身に起こる変化に気づいたことはないだろうか。あなたの感情——あなたの意識は、国境を越えた瞬間に、ほとんど変わってしまわなかっただろうか。初めてある外国の地に足を踏み入れたとき、あなたが受けたあの衝撃を覚えているだろうか。

民族の霊たちは、自分たち同士の間では、自分たちを、あなたたち人間が友人や知人の中にいるときと同じくらいの大きさにしか感じていない。大きさと

は、相対的なものだからである。私はこれまで、民族を、人類という身体の中の器官のようなものだと語ってきた。しかし、今、それらを独立した存在として語っているからといって、私は前の言葉を否定しているのではない。あなたは、自分の身体の器官が、それぞれ、多少なりとも独立した意識を持っているかもしれない、と考える理由を、なぜ持たないのだろうか。あなたの細胞は、あなたの器官の中に存在している。あなたの器官は、あなたの身体の中に存在している。あなたは、自分の民族の中に存在している。あなたの民族は、地上の人類という身体の中に存在している。地球という存在は、太陽系の中の惑星たちの民主的な集まりの中に存在している。太陽系は、さらに大きな宇宙の民主的な集まりの中で、仲間たちと共に、一つの存在として存在している。

脳の中の、小さな血の塊一つが、あなたの宇宙全

体の働きを深刻に妨げることもある。

だから、あなたが、自分の個人的な敵を許し、和解することによって——とくに、その敵が、この戦争の反対側の民族に属しているなら——民族の霊たちの間の平和を、ごくわずかであっても、早めることができる、と私が言うことに、何もおかしいところはないのである。

小さなものは、あなたが思い込んでいるほど取るに足らないものではない。そして、大きなものは、あなたが思い込んでいるほど重要なものではない。そう、あなた自身が——そして、あなたたち全員が——平和が訪れるのを早めることができるのである。

1915 年 4 月 16 日。

第二十三の手紙

欲望の神秘

私は、霊的な身体を失った人々が、霊界で感じる

飢えや渇きについて書いた。また、この戦争を引き起こした邪悪な霊的存在たちについても書いた。彼らは、自らの悪意を満たすために、この戦争を起こしたのである。彼らもまた、飢えた存在であり、戦争は彼らに食物を与えた。彼らが何を糧にして生きているか、あなたは知っているだろうか。彼らは、血と、殺戮から立ち上るものによって、長く生きることができる。私は、彼らが無数に戦場の上を漂い、苦しむ人々や死者の傷口から滴る血を、むさぼり食っているのを見た。

死者が埋葬されずに放置されることも、彼らの飢えを満たした。吸血する存在たちが、ハンガリーや他の国々から現れ、生きている者たちを糧にした。戦争による恐ろしい疲労は、彼らが欲していた生命の力へ通じる扉を開いてしまったのである。

ゲーテが言ったように、「血は不思議な液体」であ

る。邪悪な存在の生命は、十分な血を得ることができれば、さらに長い期間、新たな存在を続けることができる。

もしあなたが、死んだ動物の肉を食べることをやめれば、自分の中にいるある種の邪悪な存在たちに、食物を与えることもやめることになる。偉大なマスターたちの弟子たちが、動物の肉を避けるように勧められているのは、単に感情的な理由からではない。肉食は、情欲に満ちた性質を養う、とあなたは教えられている。その情欲に満ちた性質とは何だろう。それは、自分自身ではない何かを食べたいと求める、飢えた性質にほかならない。あなたが習慣として肉を食べている限り、血や肉の持つ性質を糧にしている存在たちの影響から、完全に自由になることは決してない。清らかな食事をしなさい。そうすれば、やがて、あなたは清らかに考え、清らかに望むようになるだろう。

私は、今日の午後に、すべての欲望を消し去れと言っているのではない。なぜなら、欲望は、理想のためにさえ働くための力だからである。しかし、血や死んだ動物の肉への欲望を消し去りなさい。そうすれば、あなたの進化にとって必要のない、あらゆる他の欲望も、自然に消えていくだろう。

欲望については、多くの愚かなことが語られている。あなたは、霊的に成長したいと望む。あなたは、マスターたちの仕事をしたいと望む。あなたは、ただ子羊のように導かれて、マスターたちの仕事をすることではない。欲望にも、さまざまな欲望がある。もし、あなたにとって、「すべてなるもの」と意識的に一つになる道を短くすることが望ましいように思えるなら、あなたは、おそらく、その一体化を望むだろう。気づかないうちに、そこへ漂って行くことは、まずない。

私は、野心という激しい欲望について語っているのではない。あなたは、秘教的な成長に対して、野心を持つ必要はない。実際、もし秘教的な成長に対して、あまりにも強い野心を持てば、あなたは黒魔術師になる危険さえある。しかし、神との一体化さえ、静かに「望む」ことはできる。

この世界でのあらゆる行動は、何らかの欲望から生まれる。そして、欲望と意志は同じものだ、と言われることがある。おそらく、その通りだろう。また、欲望は一時的なものに関わり、意志は、それより高い動機之力である、と言われることもある。しかし、もし私がその二つを分けるとしたら、意志とは、そのより高い形においては、単に、より高いものへの欲望にすぎない、と言いたい。

音楽は崇高なものにもなりうるし、安っぽい流行歌

にもなりうる。それでも、それは同じ音楽である。風の力は、あなたの家を燃やす炎をあおることもできるし、あなたを魂の望む場所へ運ぶ船の帆を満たすこともできる。それでも、同じ風なのである。

あなたは、より高いものを望みたい、と望むことさえできる。法に逆らうのではなく、法と共に意志したい、と意志することもできる。それもまた、欲望ではないだろうか。

私は、血の犠牲によって、自分の中にいる、その汚れた食物を求める原始的な力を養ってはならない、とあなたに勧めている。しかし、それは、欲望を消し去れと言っているのではない。あなたは、死んだ動物の肉から、自分の身体を清めたいと望まなければ、意識して、それを食べるのをやめることはないだろう。あなたの中にある悪——飢えた、燃えるような、利己的な性質——は、あなたの口を通る

血を吸い上げる。それは、戦場の上にいる邪悪な存在たちが、倒れた者たちの傷から流れる血を吸い上げるのと、よく似ている。もし、あなたが、もはやそのような存在たちを必要としないなら、血を与えることをやめればよい。

肉を食べるのをやめたからといって、あなたは感情の性質を失うことは決してない。あなたは、ただそれを清めるだけである。魂の世界全体は、感情の世界である。そして、自然界の清らかな存在たちは、非常に感情豊かである。しかし、彼らは血を糧にはしない。

確かに、精神は感情よりも高い。それは感情を超えたものである。精神だけがあって感情がないこともできるし、動物のように、感情はあるが、高い精神はほとんどないこともできる。しかし、人間は、その両方から成り立っている。人間は、自分の中間の

領域——魂の欲望の性質——に頼って、魂の世界の中で、成長する存在として働くのである。あなたが最も高い天に達したとき、あなたは思考の中で生きることになる。しかし、そこには、記憶と同化によって高めてきた欲望の性質が、ほんの少しだけ残っているだろう。もし、あなたが、血のついた食物への欲望によって、自分の足を道の途中で重くしないなら、魂の力を、さらに多く、最高の領域へと持ち上げることができる。それは、戦場でむさぼり食っている悪魔たちに任せておけばよい。

私が、実現しようと助けている兄弟愛の時代には、人類は清らかな食事によって生きようになるだろう。すでに今でも、食事から死んだ動物を取り除こうとする傾向が見られる。

新しい人類の欲望は、清められなければならない。その感情は、高められ、強められなければならない。

い。人間の感情は、ライオンの感情よりも、はるかに強い。神の感情は、宇宙そのものである。

1915 年 4 月 16 日。

第二十四の手紙

正義の秤

私が兄弟愛のために働いていることによって、誰か

が、私が意識してであれ、無意識のうちにであれ、仲間の人間たち、私の兄弟たちによって行われた悪を、だらしなく受け入れる状態を生み出そうとしているのだ、と考えてしまわないように、私は正義について語りたい。

私は、いわゆる法廷の裁判官であった者として、慈悲と厳しさとの間に均衡を保つ実際の働きについて、いくらか経験を持っている。正義は、私がいつも自分の心の神殿の中で、高い場所に置いてきた神々の一つである。そして私は、判決を下すとき、弱さや感傷によって、善なるものの権利を妨げ、悪なるものに迎合したことは、一度もなかった。私は、その方がより多くの善を生み出すと思えたときには、軽い判決を下した。私は、その方が悪を最もよく抑えると思えたときには、厳しい判決を下した。

普遍的な兄弟愛については、人類の他の理想と同

じように、多くの愚かなことが語られ、書かれてきた。普遍的な兄弟愛とは、悪を何でも受け入れることではない。それは、善という理想を、あらゆる者が受け入れることである。そして、あなたが正義の基準を下げるのではなく、高めるまでは、兄弟愛という名に値するものは、決して生まれない。

正義とは、均衡である。正義とは、力と力との釣り合いである。正義とは、落ち着きである。私が、人々に、憎しみではなく愛に意識を向けるよう勧めているのは、より均衡の取れた人類を見たいと願っているからである。

私がヨーロッパ、そして西部戦線のすぐ近くに滞在するようになってから、私は何百もの魂が、自らを助けて、恐ろしい霊界の状態を通り抜けられるように助けてきた。その状態へ、彼らは、突然、そして早すぎる時に肉体を失ったことで、投げ込まれてしま

ったのである。しかし、私は一度も、原因と結果の均衡を乱して、まだ準備のできていない自由を、魂に与えようとしたことはない。私は、苦しみを短くすることができた場合でも、人々を苦しませたことがある。私は、多くの魂が、自分の低い欲望と、霊界でゆっくりと戦い続けるのを、そのままにしておいた。なぜなら、もし彼らが、十分に熟さないうちに、苦しみの木から摘み取られてしまえば、結局は、同じことをもう一度経験しなければならず、しかも、次の人生では、今、苦しみにによって切り離しつつあるその力と、さらに激しく戦わなければならなくなると知っていたからである。霊界では、満足を得る方法が限られているため、基本的な欲望は、地上よりも、もっと容易に飢えさせられるのである。

ある軍隊の中に、非常に残酷な士官がいた。彼は、部下たちから憎まれていた。彼も、こちらへ来た。そして、多くの部下たちも、こちらへ来た。だが、私

は、彼を部下たちの非難から守ろうとはしなかった。なぜなら、彼は、不正は非難されるに値するのだ、ということを学ばなければならなかったからである。地上では、軍隊の規律によって、部下たちの口は閉ざされていた。しかし、こちらでは、彼は、自分がどれほど彼らを傷つけていたかを、思い知らなければならなかった。彼は、他のどんな方法でも、それを理解することはできなかつただろう。もし私が彼に説教していたなら、彼は私に、「余計なことをするな」と言っただろう。正義の法則は、説教しない。それは、示すのである。彼は、自分自身の不正を、その長い間彼を取り囲んでいた、暗く、非難する影たちを通して、経験しなければならなかった。ついでに言えば、彼は今でもなお、それらの影に囲まれている。私は、彼を助けようと何の努力もしなかった。おそらく、助けることはできたかもしれない。しかし、もし私が、正義の法則に逆らってまで、彼を助けようとしたなら、彼は、自分の魂にこれ

ほど重い不正を抱えたまま、自分だけの利己的な天国へ進んでしまい、その結果、次の地上の人生では、その重さに押しつぶされてしまっただろう。部下たちの怒りは、非常に深かった。そして、私は、彼ら自身のためには、その怒りを和らげることもできたかもしれない——彼のためではなく。しかし、私は、その怒りが自然に消えていくのに任せた。

もし、他に、もっと私の助けを必要とし、それに値する者がいなかったなら、私は長い時間を、この人々のために費やしていたかもしれない。それでも、ほとんど効果はなかっただろう。私は、このような事件が地上で私の前に持ち込まれたときに、そうしたであろう通りに行動した。そして、自分は正しかったと信じている。

私は、他人の不当な判断によって苦しめられている魂を見るたびに、均衡を正そうと努める。それ

は、地上にいたときにも、そうしたであろうように。
しかし、私は、原因と結果の法則を覆すために、こ
こにいるのではない。助けることができるときには、
私は助ける。しかし、私は、悪い原因が作られるの
を防ぐことにおいて、結果の正当な流れを曲げるこ
とよりも、はるかに役に立つのである。

私が、人々に、ドイツの恐ろしいカルマを食い止め
るために、マスターたちを助けなさい、と勧めると
き、私は感傷的に語っているのではない。私は、公
正な裁判官として語っている。ドイツ国民は、指導
者たちにだまされ、自分たちでは理解していない道
を、盲目的に進んできた。集団として見れば、彼ら
は他の民族に対して責任がある。しかし、一人一人
として見れば、彼らの責任は、それほど重くはな
い。なぜなら、彼ら自身もまた、だまされていたの
であり、自分たちの国家的な侵略の理由が、不正
であり、悪魔的な起源を持つものであることを知ら

ないからである。

外から、そして上から見守ることのできる教師たちは、従順なドイツ国民が、傲慢な戦争派によって隣国へ投げつけられたからといって、世界から永遠に憎まれ続けることのないように、と願っている。私は、ドイツ人の性格の好ましくない面や、他のどの民族の性格の好ましくない面も、許そうとしているのではない。しかし、この巨大な戦いに巻き込まれているすべての民族の中で、ドイツ民族は、自分たちを突き動かした原因について、最も知らないのである。飼いならされた新聞と、不敬罪による処罰が、彼らを、自分たちの指導者の手の中で、従いやすい道具でなくしてしまうような知識から、遠ざけてきた。

この戦争を引き起こした、向こう見ずで傲慢な政策を進めた者たちのカルマは、個人のカルマであり、

それは、個人の苦しみと、いわゆる罰によって、償われなければならない。しかし、大多数のドイツ国民のカルマは、民族のカルマである。彼らは、自分たちを、自らの敗北へと導くままにしてしまった。この戦争のあと、反動の法則そのものによって、国民と民主主義の調査の光が、ドイツという国家と政府の、最も暗い隅々にまで差し込むことになるだろう。そのことを考えてみなさい。傷つけられるほどだまされた人々は、もう二度と、だまされまいとするだろう。二十年もすれば、ドイツ政府の実情は、アメリカ合衆国のように、明らかなものになるだろう。いわゆる「暴露記者」が、帽子にランタンをつけて現れることになる。

また、同じ反動の法則によって、イングランドもまた、自分たちの店を他国の品物でいっぱいにしてしまった、あの怠けた状態から、目を覚ますことになる。なぜなら、自分たちで作るには、あまりにも怠

情だったからである。

同じ法則によって、フランスでは、腐敗していない政治制度を求める声が起こるだろう。フランスでは、今のところ、自分たちだけの秘密にしておきたいことが、一つか二つ起きている。

この戦争の大きな衝撃は、それぞれの国に、自分自身を、より厳しく見つめさせるだろう。自分たちの動機を見つめ、自分たちが、新しい時代によって求められている、あの非常に厳しい基準に、どこで達していないのかを知るようになるだろう。

ロシアにも変化が起こることを期待しなさい。そして、オーストリアは、変化という別の名前になるだけだろう。

この戦争の大きな不正によって、正義は、大きく前

進するだろう。再び、反対の法則である！ ほとんどすべてのことは、この法則によって説明できる。

私が、世界に兄弟愛の時代が訪れることを願い、そのことについて書いているとき、私は、不可能な理想郷が、ラッパの音と共に、今にも現れようとしているのだ、という幻想にとらわれているのではない。私は、天の王国が、すぐ目の前に来ている、と予言しているのでもない。人類は、まだ天の王国の準備ができていない。そして、長い間、その準備はできないだろう。しかし、もし十人のうち一人でも、兄弟愛とは、努力して目指すべき理想なのだ、と理解するようになれば、その一人が、残りの九人を発酵させ、人間社会というパンを、今よりも、ずっと軽く、ずっと食べやすいものにすることができるだろう。そのパンが、すぐに果物入りの甘い菓子パンになることはない。それを、次の人類に期待するのは、あまりにも無理がある。しかし、もしあなたが、

この予言の記憶を、十分な数の生と死を通して保ち続けることができるなら、その次の次の人類、第七の人類が、太陽の光の中へ生まれ出るとき、あなたは、惑星の炉から、とても甘いパンが出てくるのを見るかもしれない。

1915 年 4 月 17 日。

第二十五の手紙

愛のために

私のここ数通の手紙は、とても真面目で哲学的な

ものだったので、今度は恋愛の話にひたりたい。

あなたは、戦場の看護婦たちの厳しい生活について考えたことがあるだろうか。そして、彼女たちが、昼も夜も続く仕事のための力を、どこから得ているのだろうかと思ひに思ひたことがあるだろうか。愛こそが、多くの女性たちに、ほとんど人間離れした忍耐力を与えている源である。彼女たちは、受け持ちの兵士たちには、光とヒーリングの天使のように思われている。

私たちは、ある看護婦をメアリーと呼ぶことにしよう。彼女は、心の聖母の典型だからである。メアリーは、自分が世話をした人々の魂と共に、何百回も天国へ出かけて行った。このような愛が、地上での人生を通して彼女を守り、さらにその先の天の世界においても彼女に付き添わないはずがあるだろうか。もちろん、必ずそうなる。

メアリーは、学者でも詩人でもない。もし、彼女があなたの前を通り過ぎたとしても、あなたは、彼女を社交会へ招こうとは夢にも思わなかっただろう。しかし、メアリーは、天使たちの仲間に加わるのにふさわしくない人ではない。そして神々も、彼女を自分たちの仲間にするのを軽んじたりはしないだろう。

彼女は、戦場の看護婦になる前は、ただの普通の看護婦であった。そして、自分の国に必要とされる祭壇の上で、自らを犠牲として焼き尽くした、愛の白い炎が彼女の人格に触れる前は、そうだった。

メアリーは、とても美しい看護婦で、休みの時間には、しゃれた帽子をかぶり、レースや飾りのついた服を楽しんでいた。なぜなら、美しさや優雅さを愛する気持ちは、英雄的な心を持つ人の中にも、よく

宿るものだからである。

戦争が始まったとき、メアリーは、一人の兵士と婚約していた。メアリーも前線へ行き、彼もまた前線へ行った。しかし、長い長い間、二人は、お互いがどこにいるのかを知らなかった。

重傷を負って彼女のもとへ運ばれてくる兵士を、メアリーは皆、自分の心にいる不在の恋人であるかのように看護した。そして、彼女の優しい世話と、薔薇から香りが立つように、彼女から放たれる希望の雰囲気によって、多くの命が救われた。

「もし、あの人が傷ついたら」と、彼女は自分に言った。「きっと、どこかの看護婦たちが、私がこの人たちを世話しているように、あの人を世話してくれるだろう。」

メアリーは、自分の愛する人を、他の誰かが看護する特権を持つことを、ねたまなかった。そして、その人の心の中に、自分ではない誰かに対する感謝の花が咲くことを、ねたまなかった。メアリーには、自分のことを考えている時間は、あまりなかった。彼女の心は、他の人々のことで、いっぱいだったのである。

もしかすると、彼女が、ねたみ深くなく、恋人を自分の所有物として、過剰に見張ったりしなかったからこそ、彼が負傷したとき、本当に彼女が忠実に働いていた病院へ運ばれて来たのかもしれない。

もちろん、彼はメアリーに看護されることになった。そうならないはずがなかった。そして、彼は非常に重傷だった。医師たちが彼の命を救おうとして手術をしたとき、その場に立って手伝っていたのはメアリーだった。たとえ、彼の折れた腕——彼女が、こ

の地上の人生の残りの間、その腕に寄りかかって生きていけるかもしれないと夢見ていた、その腕——を切り落としたときでさえ、彼女は気を失うことも、叫ぶこともなかった。メアリーは、彼の母親のことを考えていた。そして、自分が見ているものを、その母親が見なくてよかった、と心から思っていた。

メアリーが眠ることもできたはずの、多くの時間の間、彼女は、その母親に手紙を書いていた。彼女自身の心の中にある恐れを隠そうと努めながら、勇気づける手紙を書いていたのである。

トム——私たちは彼をトムと呼ぶことにしよう。本当の名前ではなかったが——トムは、地上の人生の先に、何らかの生命があるということを、一度も信じるができなかった。そして、メアリーは、彼の力が次第に弱っていくのを見ながら、昼も、そして

夜のほとんどの時間も、何かが起こって、トムが天国と天使を信じるようになりますように、と祈っていた。

戦争の事情のために、砲弾で右腕を砕かれたあとも、彼は長い間、戦場に置き去りにされていた。そして、医師たちが、彼をイングランドとメアリーののために救おうとして行った手術の前に、その傷は感染してしまっていた。

トムは、自分が、この世界を去らなければならないかもしれないことを知っていた。メアリーは、その圧倒的な可能性を、彼からは隠さなかった。けれども、彼の母親からは、まだ隠していた。なぜなら、彼に残されているかもしれない、地上の光の中での最後の数時間、あるいは数日の間に、何かが起こることを願っていたからである。何か思いの奇跡、あるいは愛の奇跡が起こって、彼女が「真実」と呼

ぶものに、彼の目を開かせてくれることを、願っていたのである。

私は毎日、トムが横たわっている、長い白い部屋で、少しの時間を過ごしていた。しかし、たとえ彼に私が見えたとしても、私は、彼にとって、それほど慰めになる存在ではなかっただろう。そして私は、特別な音を聞くよう訓練された耳にしか、語りかけることができない。

私は、メアリーに同情していた。かつて私が書いたものによって、これほど多くの魂に、不滅という真実を信じさせてきた者として、私は、もう一人だけ、信じさせたいと思った——メアリーのために。なぜなら、もしトムが、死はすべての終わりだと固く信じたまま人生を終えるなら、それは本当に、長い間、彼にとって終わりになってしまうかもしれないと知っていたからである。

私は、どうしたらよいか分からず、美しい存在に助言を求めた。あの天使の知識は、私の知識と比べると、ろうそくの小さな火に対するアーク灯ほどの違いがある。

私たちは一緒に病院へ戻った。メアリーは、トムと、来世や、神や、キリストや、天使について話していた。彼女は、多くの兵士を受け持っていた。しかし、他の看護婦たちは、彼女がトムと一緒にいられる時間をもっと持てるように、少し余計に働いていた。世界中の誰もが、恋人たちを愛している——特に、戦争という恐ろしい時代には。

「信じたくないわけじゃないんだ」と、彼はメアリーに言っていた。「ただ、どうしても信じられないんだ。もし、自分の目で天使を見たり、死んだと分かっている誰かを見たりできたなら、話は別だ。でも、

どうしたら、そんなものが見られるんだ？」

美しい存在は、微笑みながら近づき、その薄いヴェールを、死にかけている男の目の前で振った。しかし、彼には見えなかった。

美しい存在は、彼の周りに光の幻を織り上げ、天使にしかできないような歌を歌った。しかし、それでもトムは、見ることも、聞くこともできなかった。

「あなたは『物質化』しなければならないと思うわ」と、美しい存在は、いたずらっぽく微笑みながら、私に言った。「あの目は、物質で塞がれていて、物質より繊細なものを見ることはできないのです。」

私は、その提案に、あまり気が進まなかった。しかし、私の理解しがたい友は、なおも続けた。

「あちらのベッドにいる人」と、それは言った。「あの人は、自然なミディアムと呼ばれている人の一人です。自然な物質化ミディアムです。なぜなら、その人の繊細な身体は、肉体との結びつきがとてもゆるく、簡単に離れて、借りることができるからです。さあ、あなた自身を物質化して、トムに、彼が天使だと思えるようなものを見せてあげなさい。」

「私は天使ではない」と、私は言った。「それに、死にかけての無神論者の目が、私を天使と見間違えるはずがない。」

「やってみて、確かめてもらいなさい」と、美しい存在は言い、隣のベッドにいる、その問題の『ミディアム』を指さした。

私はその男を見て、その周囲から彼の人生の物語を読み取った。彼は粗野な男で、酒場の主人だっ

た。そして、もう一つのよく知られた複合語も、まるであつらえたように彼に当てはまっただろう。

「私が、あの男のエーテル体を身につけるですって！」と、私は嫌悪して言った。「十フィートの棒を使っても、あんな男には触れたくありません！」

「なんて、あなたは指先まで繊細なのかしら！」と、美しい存在は言った。「あなたをこんなによく知っていなかったなら、自分だけが正しいと思っている人なのでは、と信じてしまうところでした。」

「何とでも呼んでください」と、私は答えた。「でも、私は、あの身体を使って現象を起こしたりはしません。」

美しい存在は笑った。

「あれほど簡単なことなのに」と、それは、独り言のように言った。「あれほど簡単で、しかも、あれほど確かな証明になるのに。」

天使は、眠っている酒場の主人——私は、もっと辛辣な複合語を書きかけた——の方へ近づいて行った。すると、次第に、彼の脇から、霧のような流れが出てきた。私は、地上での習慣から、思わず目をこすった。なぜなら、自分が正しく見ているとは信じられなかったからである。あの純粹で、美しい天使が、眠っているミディアムの、不健全な放射物を自分にまとっていたのである。そして、壁の時計が二十回ほど刻む間に、それは完全に物質化し、話すことのできる喉を備えた姿となって、トムのベッドの足元へ行った。

トムは、その光景への驚きと衝撃で、身を起こした。

「あなたは、何なのですか？」と、彼はかすれた声で尋ねた。

「私は天使です」と、美しい存在は、本当のことを言った。「そして、奇跡は起こり得るのだと、あなたに証明するために来ました。そして、あなたが明日、自分の身体を後にして旅立つとき、私は、その変化の向こう側で、あなたを迎えることを約束しに来たのです。」

メアリーもまた、それを見て、聞くことができた。そして彼女は、小さな喜びと驚きの嗚咽をもらしながら、ひざまずいた。彼女は、山をも動かせるほど強い信仰を持っていたが、まだ一度も天使を見たことがなかったのである。

「それでは、本当に本当なのですね！」と、トムは息をのんで言った。「私は、身体と一緒に死んでしま

うわけではないのですね。そして、あなたは、なんて素晴らしいのだろう！」

というのも、美しい存在は、その変化をあまりにも見事に行ったので、借りた身体の中にも、目に見えない世界の無数の存在たちを魅了している、あの姿の栄光と驚くべき美しさのすべてを保っていたからである。

「私は、もう疑いません」と、トムは言った。「私は信じます。そして、幸せな気持ちで死ぬことができます。」

「あなたがこちらへ来るとき、迎えに行くのを忘れませんよ」と、私の友は微笑んだ。「では、しばらくの間、お別れです。あなたをメアリーに託して行きます。彼女もまた、一種の天使なのですから。」

借りた姿は、ゆっくりと、眠っている酒場の主人の身体の方へ戻って行った。そして、しばらくすると、私の友は、再び自分自身の清らかな姿に戻って、私のそばに立っていた。しかし、その肩と足には、泥のように見える黒いしみがついていた。

「外の新鮮な空気の中に出れば、すぐに消えてしまいますよ」と、美しい存在は微笑んだ。「それに、あの魂に、自分自身の不滅を信じさせることができたのですもの。その価値は、十分にあったのではないませんか？」

私たちは、星空の下へ出て行った。しかし、その光景は、私の意識に消すことのできない印象を残した。そして、私が、自分だけが正しいと思い上がりそうになるたびに、私は思い出すだろう。私がこれまで知った中で最も清らかな存在が、下品な酒場の主人の汚れた衣をまとったことを。その衣が、そ

の繊細な肩と輝く足に、しみを残したことを。愛のために、その存在が、生まれて初めて、この世の汚れの中へ、自らを沈めたことを。

第二十六の手紙
精神のマスター

今夜、一九一五年四月十七日、戦争をしている国

の一つの戦線に沿って、偉大な霊的存在が通り過ぎて行った。その存在は、その身体そのものが精神であり、精神だけを通して働く存在である。

ある数の者たち——不運な祖国のために勇敢に戦ってきた者たち——が、自分たちの大義は絶望的に敗れていることを知るべき時が来ていた。今夜、それを知ることができるのは、ごくわずかな者たちだけかもしれない。しかし、その知識は広がっていくだろう。そして、その知識が広がるにつれて、精神にも変化が生まれるだろう。敗れた大義のために戦い続けることは、人の気力をくじく。そこには、特別な献身の性質、まれな献身の力が必要なのである。

「あの天上の存在の訪れによって、何が起こるのか」と、あなたは思うだろう。待って、見ていなさい。私は、めったに予言をすることを自分に許さない。

私は、ただ、自分の知っている原因から、その結果として起こりそうなことを計算するだけである。あなたにも同じことができる。もし、好みや感情の代わりに、理性を用いるならば。

ある原因がもたらす結果を、はっきり判断するためには、心は欲望によって偏っていてはならない。それは、数学の計算のように冷たくなければならない。マスターたちは、この天上的な代数によって、未来を見通しているのである。

あなたが、自分の高次の自己に問いを投げかけ、その答えを、象徴や映像の形で受け取るとき、その内なる存在は、この、より深い数学によって答えを準備している。高次の自己は、あなたには知られていない原因を知っている。そして、その原因から、天文学者が日食を予言するのと、ほとんど同じほどの正確さで、結果を予見することができる。

「ほとんど」と私は言った。「まったく同じ」ではない。なぜなら、人間の事柄を扱う場合には、最も偉大なマスターたちでさえ、人間の中にある自由意志という、予測しがたい要素を考慮に入れなければならないからである。それもまた、推測することはできる。しかし、それでもやはり、推測に過ぎない。自由で、予測しがたい意志が突然わき上がれば、新しい原因が生まれる。そして、計算は、もう一度やり直さなければならない。

この予測しがたい意志という要素を扱うことには、ある種の魅力がある。おそらく、それが、一部の人々が、犬よりも猫に魅力を感じる理由なのだろう。猫は、自分勝手に予測しがたい動物である。そして、多くの人間もまた、そうである。

今夜、戦線に沿って通り過ぎて行った偉大な存在

は、かなり長い間、地上の出来事の流れを見守ってきた。彼は、地球という惑星の霊に仕える者たちの一人であり、歴史の中で、その役割を果たすべき時が来たときに、ある思想を地球全体へ運ぶ役目をしている。

私は、この存在の生涯について、多くを語ることはできない。なぜなら、私は、彼について、ごくわずかな事実しか知らないからである。彼は、私よりも、はるかに高い存在であり、私が彼を理解できる範囲には限界がある。彼は、かつては人間であったのかもしれない。私は、そうだと思っている。しかし、そのことについてさえ、確信はない。

私は、こう聞かされている。アメリカ国民の、ごく少数だが勇気ある人々に、「アメリカにおける人間の奴隷制度は終わるべき時が来た」という確信を、最初に与えたのは、この存在であった、と。また、コロ

ンブスに、「西へ航海すれば陸地を見つけられる」という考えを吹き込んだのも、この存在であった、と。ただし、その場合には、西の海の向こうに、巨大で独立した大陸があり、そのさらに向こうには、アジアの東岸を洗う別の海がある、という大きな事実を、自分の道具であるコロンブスの心にまで、完全に押し込むことはできなかった。さらにまた、人類に電気の知識を明らかにするのに、大きく関わったのも、この存在であった、と私は聞いている。

あなたは、このような存在の生を想像できるだろうか。あなたの意識を広げて、その存在の意識に触れることができるだろうか。私は率直に言おう。自分自身の長い過去を、これほど多く思い出すことができ、自分が遠い昔に作り出した原因の、数多くの結果——それらは、未来の地上での私の人生を形作るだろう——を計算できる私でさえ、その存在を理解することは難しい。

鮮やかな生命を持つ、独立した存在を想像してみなさい。しかし、その存在には、肉体はおろか、霊的身体さえない。それは思考そのものの存在であり、その最も低い表現の手段でさえ、思考なのである。その存在は、自分が選んだ道具となる人々の、むき出しの心に触れることによって、彼らに影響を与える。

そのような存在に、どのような個人的願望があるだろうか。どのような野心があるだろうか。「野心」という、低く、限られた意味を持つ言葉は、そのような存在の動機を表す言葉としては、ばかげているように思える。

その存在には、私たちの間で呼ばれている名前がある。しかし、私は、その名をあなたに伝えることを許されていない。その名前には、非常に大きなマン

トラとしての力がある。そして、もしあなたが、その名をあまりにも頻繁に繰り返したなら、あなた自身の意識と振動を、高すぎるところまで引き上げてしまうかもしれない。そうすると、あなたは、自分の肉体を保ち続けることが、非常に難しくなるだろう。その肉体がなければ、あなたは、自分の進化のこの段階において、行う特権と義務を持っている、ある仕事をすることができないのである。

偉大なマスターたちの弟子たちは、この存在の導きのもとで、ある種の入門を受ける。しかし、その入門を受けた者たちは、人間たちの日常の生活から、永久に退く。彼らは、原因の中心に入るのである。そして、それが、彼らを非常に強力な存在にする——彼らの人格と思想を、非常に大きな力を持つものにする。そのため、世界そのもののために、彼らは世界に近づきすぎてはならない。なぜなら、すべてのものは周期の法則によって働いているのであ

り、人類の進化を、あまりにも急がせすぎることは、人類にとって危険だからである。人類は、ある一定の速さでしか、安全に進むことができない。その速さを超えれば、事故に遭う可能性が高い。

私は、自分自身が、どの段階まで達すれば、この存在が司る入門を受けることができるのかを、正確に知っている。そして、私がその段階に達したとき、もしあなたが、自分の現在の意識よりも、それに見合うだけ高いところまで自分を引き上げていないなら、私は、あなたの手を通して来て、文章を書くことができなくなるだろう。なぜなら、もしそれをすれば、あなた自身の成長の速度を、危険なほどに早めてしまうかもしれないからである。

こちらへ来て以来、私は、人類のより高い進化を任されている存在たちについて、多くのことを学んだ。彼らの発達は、現在の時代の、たとえ啓発され

た人々の大多数にとってでさえ、まったく理解できないものだろう。

彼らは、そして、彼らはそうならざるを得ないのだが、非常に孤独な存在である。もっとも、彼らにも、自分と同じ段階の仲間や、共に働く者たちはいる。あなたは、百年、千年、あるいは一万年もの間、孤独にとどまりながら、それでも絶えず精神において非常に活発であり続けることを想像できるだろうか。そして、自分自身は、はるか以前に成長の過程で通り過ぎてしまった進化の流れを、思考だけによって追い続けるのである。感情の性質さえも、すでに後に残してきてしまったため、思考だけでそれを追うのである。そして、それを、何か個人的な報酬のためではなく、ただ、自分よりさらに高く、その先にいる存在の偉大な法則に従った働きだから、という理由だけで行うのである。

ある種の学校では、服従が教えられる。それは、マスターの利益のために弟子を支配しようとしているのではない。弟子が、そのことによって、宇宙の意志に従う道へと続く最初の一步を踏み出せるようにするためである。その道において、弟子は、今夜、敵対する軍の一方の戦線に沿って通り過ぎて行き、自らの思考の光と、その目的の確かさを、受け取る力を持った少数の心へ注ぎ込んだ、あの存在がしているような働きを任せられるようになるまでに、気の遠くなるほど長い距離を進まなければならない。

いつの日か、あなたをマスターたちへと導く旅の、最初の、そして最もやさしい一步を踏み出しているあなたよ、その道に疲れてはならない。その道は確かに険しい。そして、ある靈感を受けた作家が言ったように、それは、どこまでも上り坂である。しかし、その旅人が立ち止まり、眺めを楽しむことので

きる段階もある。私は、自分自身が、どうやらそのような段階に達したように思う。そして、私は今、いつも働いているけれども、それでも自分の仕事を楽しんでいる。

私たちの何人かが、元素的存在たちと戦った、あの恐ろしい戦いは、今や終わった。人類に降りかかる可能性があった最悪の災厄は、幸いにも避けられた。今の仕事は、あの戦いの仕事に比べれば、軽いものである。もし世界が、大多数の人々が神話だと思っているマスターたちに、自分たちがどれほど負っているかを知ることができたなら！ しかし、そのような教師たちは、感謝や報酬のために働いているのではない。

あなたもまた、その足跡に従いなさい。なぜなら、それこそが、つい最近、人類を飲み込もうとしていた恐ろしい災厄の上へ、人類を導くことのできる唯

一の道だからである。(私は、単にドイツが勝利することを言っているのではない。)

この惑星の生命を支配している、偉大な進化の事実を、一般の人々には知らせないでおくことは、賢明である。心は、日常の小さな関心事の輪から抜け出し、それを超えるところまで高められていなければ、そのような知識に耐えることはできないだろう。

あなたたちは皆、その意味を理解しないまま、言葉を使っている。あなたたちは、守護天使について語る。地獄や煉獄について語る。身代わりの贖いについて語る。そして、秘跡について語る。

秘跡！ 私はあなたに、本当に神の身体を食べ、神の血を飲むことである秘跡について語る事ができる。しかし、私はそれを控える。もし私がそれを語

れば、あなたはそのことを世界に話してしまうだろう。そして、もしあなたが世界に話せば、この世の邪悪な力が、あなたを滅ぼしてしまうだろう。

しかし私は今、語ってはならない事柄に、危うく近づきすぎている。だから、私はあなたに、おやすみを言おう——本当に良い夜を。そして、今夜、戦場に沿って通り過ぎて行った、あの光の存在の後ろに従って、自分の仕事へ戻ることにする。

1915 年 4 月 17 日。

第二十七の手紙

見えない敵

あなたは、私がこれまでに語ってきたように、この

大戦争を引き起こした元素的存在たちが、なぜこの時代に、あれほど悪意に満ちていたのか、なぜ彼らが、人類に向かって、あれほど圧倒的な力で襲いかかったのか、不思議に思ったかもしれない。あなたは、その結果を、これほど多く見てきたのだから、その原因についても、何かを知ってよいはずである。

人間は、この百年の間に、それ以前の二千年よりも、はるかに大きな物質的進歩を遂げた、という言葉は、今では、新聞で繰り返される、ありふれた決まり文句になってしまっている。人間が、それに見合うだけの道徳的進歩を遂げなかったからこそ、自分たちの王国における支配を失うことを恐れている邪悪な元素的存在たちは、人類に対する攻撃に、あと少しで成功するところまで近づくことができたのである。

人間が、これほど驚くべき速さで進歩したのは、単に物質的な面においてだけではない。なぜなら、彼の発明や発見のいくつかは、目に見えない領域にまで触れているからである。人間の心の扉は、これらの存在たちが生きている、まだ足を踏み入れられていないエーテルの空間へ向かって、開かれつつある。人間は、元素を支配しつつある。そして、元素を支配することは、元素的存在たちをも支配することになるのかもしれない。

アメリカには、一人の男がいて、あまりにも偉大で、しかも危険な秘密に近づきすぎたため、人類の進歩があまりにも急速になることを恐れる者たちによって、その目を覆われなければならなかった。

神秘主義の団体は、世界中に点在している。かつて、これらの団体は、本当に秘密のものだった。そして、さらに深い学びや、さらに深い秘密に進む資

格があることを証明する試練を通過するまでは、誰も、その知識に触れることはできなかった。

しかし今では、目に見えない世界の扉は、そうした試練を受けていない、知的好奇心に燃える人々の軍隊によって、包囲されている。かつては、精神の高貴さを持つ者だけに託されていたことを、好奇心が知りたがっているのである。民主主義は、神秘的な教団の中にまで広がってしまった。そして、聖なる秘密は、自分自身の野心を抑えることのできない人々によって、公然と広められてしまった。目に見えない世界の住人たち自身も、侵略を受けてしまったのである。

さて、目に見えない世界の存在たちは、自分たちよりも強いと分かっている偉大な魂には、従う。彼らは、その呼びかけに応じて、従順な子どものように駆けつける。そして、その命令に従って、犬のように

行動する。しかし、目に見えない存在たちは、自分たちの自由を、非常に大切にしている。そして、その自由を譲るのは、自分たちよりも優れていることが、はっきりと分かる者に対してだけである。

今、その領域の扉を開こうとしている者たちの多く——いや、その大半——は、そこで命令を下す資格がない。なぜなら、自分自身の内側にある目に見えない力を支配できる者だけが、自分の外側にある目に見えない力を支配できるからである。

私は、以前の手紙で、アメリカにおける黒魔術の危険について語った。しかし、その危険は、どこにでも存在する。そして、黒魔術とは何だろうか。それは簡単に言えば、目に見えない世界の力を、利己的な目的のために使うことである。人が、自分自身を超えたところまで成長するまでは、目に見えない力は、反抗することなく、その人に長く仕えることはな

い。

普通の新聞を手にとってみなさい。すると、料金を払えば、ある結果を起こしてみせる、と約束する男や女の広告が載っているのが分かるだろう。そのような結果は、目に見えない存在たちを利用することによってしか、起こせないものである。何という冒瀡だろう！ 何という思い上がりだろう！

もし、こうした広告を出している者たちが、本当に自分たちの言うことを実現できるのなら、彼らは、チフスよりも危険な存在である。このような広告は、無知な人々の心の中に潜んでいる、好奇心や野心や、燃えるような利己心を、すべて呼び起こしてしまう。

このような、訓練を受けていない、神秘に手を出す人々は、熟達者なら決してしようと思わないような

ことをしようとする。なぜなら、彼らの努力の大半は、他人の自由意志を攻撃することを目的としているからである。彼らは、自分たちに金を払う者たちの、狭く個人的な利益のために、他人の欲望や判断に影響を与えようとする。

あなたは、子どもに、火のついたマッチ箱を持たせたまま、火薬工場の中を歩かせるだろうか。ここ数年の間、西洋世界全体で行われてきたことは、まさにそれなのである。

目に見えない存在たちが反抗したとしても、不思議ではない。彼らはマスターには従う。しかし、愚か者に干渉されることには、強い怒りを感じるのである。

もっとも、彼らが恐れているのは、愚か者ではない。彼らが恐れているのは、偉大な科学者たちで

ある。科学における人間の進歩は、人間が自分の動機を清めなければ、自ら滅びてしまうほどのところまで来ている。

それが、私が兄弟愛を説いている理由の一つである。私は、人間を、自分自身の愚かさから救おうとしているのである。ひとたび兄弟愛の感情が広く行き渡れば、未知の力を用いるこれらの実験も、もっと危険でなくなるだろう。人類全体が、常に利己的でない動機を持つ、白いマスターの力と共に働くことができるようになるかもしれない。

偉大な科学者たちは、誰よりも近く、精神そのもののために、精神を使って働くという、あの純粋な働きに近づいている。それは、私が最近、ある偉大な存在、ある偉大な入門者について書いたときに説明した働きである。その存在は、進化の法則に従って、進化のために選ばれた人々の思考に影響を与

えることによって、世界に奉仕している。

人間は、自分たちを取り巻く目に見えない世界について、何と少ししか知らないことだろう！

私は最近、あなたを追って、ニューヨークのある講演会場へ入って行った。その会場は、男や女でいっぱいだったが、それ以上に、目に見えない存在たちであふれていた。あなたが、その場所で落ち着かなかったのには、理由があった。そして、あなた自身も、それをよく分かっていた。

その集まりの目的は、目に見えない世界を調べるため、降霊術や儀式魔術のために、好奇心を求める人々の団体の中心を作ることだった。何という狂気の中の狂気だろう！

私は、一人の男が、「この新しい団体は、心霊研究

協会のように、外の世界に対して扉を閉ざすべきではない。むしろ、目に見えない世界の研究に興味を持つすべての人を招くべきだ。新聞記者も含めて」と言うのを聞いた。神秘主義のための広報係とは！

その部屋にいた者たちのうち、そこにいた誰にも見えず、ただ一人だけには見えていた、目に見えない聴衆の何人かを描写してみよう。

長く、やせて、飢えたような存在がいた。その顔は、怪物の彫像のようで、腹は、何も吸っていないヒルのようだった。その存在は、集まりの上に身を乗り出し、ある演者の一人に対しては、ほとんど愛情を持っているかのような関心を示していた。

別の存在は、膨れ上がり、だらしなく、鈍かった。その存在は、部屋に入ってから、すでに十分に食事

を済ませていた。

また別の存在は、おびえ、苦しめられていた。そして、出口を探していた。しかし、その好奇心の狂宴に参加していた一人の欲望の雰囲気の外へ出ることができなかった。

さらに別の存在は、力強く、悪意に満ちていた。それは、あちこちを動き回り、未来の犠牲者を選んでいった。その存在は、その団体の集会に、これからも現れるだろう。そして、その団体を存続させようとするだろう。なぜなら、ここには、非常に魅力的な可能性があることを知っているからである。しかし、その可能性については、私はここに記すつもりはない。

なぜ、あなたは、そのような場所へ行くのか。

1915 年 4 月 18 日。

第二十八の手紙

戦争の栄光

私は、平和の美しさについて書いてきた。しかし、

今は、戦争の栄光について書きたい。なぜなら、戦争にもまた、その栄光があるからである。人間を、熱狂の最も高い高みにまで引き上げるものは、すべて栄光に満ちている。なぜなら、栄光とは何だろうか。それは、光の放射であり、人間の中にある太陽である生命が、激しく輝き出ることだからである。

私は、この戦争を残念に思っている。私が見てきた苦しみ、苦悶、苦痛は、そして、共感によって私自身が感じてきたそれらは、私の中に消えない跡を残した。しかし、もし私が、中立の星々の安全な場所にとどまっていたなら、私は、この戦いの栄光を見逃していただろう。

人間は、従順さの美德を身につけることもないまま、あまりにもおとなしくなりすぎていた。しかし、この戦争は、人間を、生命の根がある、原始的で野

性的なところへ投げ戻すことによって、神々の目的に役立った。そこから流れ出る樹液は、やがて、世界がまだ見たこともないような信仰の花を咲かせるだろう。

苦しみと喜びは、永遠に、互いに反対であり、しかも等しい。人間は、しばらくの間なら、よく食べ、半分眠ったような意識の、中立な状態の中で休むことができる。しかし、苦しみと喜びの極限が人に訪れるとき、人は、もはや半分眠っているのではない。目覚め、生きている。そして、栄光が、その人を取り巻いて輝くのである。

マスターたちは、この戦争を防ぐことができたのだろうか。彼らは、それを遅らせることはできただろう。しかし、その原因は、人間たちの心の中にあった。人間の内側にも、外側にもある、目に見えない力の中に、その原因は存在していた。そして、その

爆発を、さらに遅らせたとしても、この惑星にとって、何の意味もなかっただろう。

死ななかった者たちは、十二か月前よりも、もっと生きている。そして、いわゆる死者たちでさえ、生きた死者なのである。

私たちは、悪の力を押し戻した。そう、それは確かである。しかし、それは戦いの一部だった。それは、私たちの世界における戦いだったのである。

平和な時代に、私が知っていた一人の男の話をしよう。彼は、豊かさによって満たされ、半ば眠っているような状態だった。そして、人生や、倫理や、市民の義務について、ありふれた穏やかなことを、ぺらぺらと話していた。しかし、彼は、本当は、人生について、倫理について、市民の義務について、何を知っていたというのだろうか。

私たちは、彼をジョンソンと呼ぶことにしよう。彼は、この戦争に、何か月も参加している。イングランドのために、そして、イングランドの完全さのために戦っている。そして今、彼が人生について語るとき、その言葉には意味がある。なぜなら、彼にとって人生とは、今や、死と向かい合うものであり、死と結びついたものだからである。彼は、人生に対して熱狂を感じている。その栄光が、彼を取り巻いて輝いている。

ジョンソンには、一人息子がいた。たった一人の子どもだった。父親たちなら、私の言いたいことが分かるだろう。

ジョンソンが指揮官の一人だった、あの大撤退の最中に、彼の息子は、彼の目の前で倒れた。傷を負ってはいたが、まだ死んではいなかった。

ほんの一瞬——鼓動が一度打つほどの短い間だけ——父親は、自分の息子の方を振り返った…
…。そして、そのあと、彼は、自分の指揮を続けるために進んで行った。もし彼がそうしなければ、その部隊は指揮する者を失ってしまっただろう。彼は、自分のたった一人の子どもを、勝利者の容赦のない栄光に酔った軍隊の、あわれみ深いとは言えない手に委ねて、進んで行ったのである。

ジョンソンは、もう二度と、人生について、ありふれたことを軽々しく語ることはないだろう。彼は、死の意味を学んだ。そして、死よりもはるかに苦しい、責めさいなむような不確かさの意味を学んだのである。

1915 年 4 月 20 日。

(この手紙は、私には理由が分からないまま、未完

成のまま残されていた。——編集者)

第二十九の手紙

「X」の友人

昨日、一人の男が、あなたの名前を思い浮かべな

がら死んだ。

いや、その人はあなたの友人ではなかった。あなたが一度も会ったことのない人だった。昨年、イングランドで、彼は、私が以前あなたの手を通して書いた本を読み、それに強く心を動かされていた。何か月もの間、彼はあなたに会いたいと思っていたが、控えめな人だったので、そのまま待っていた。

その後、戦争が始まり、彼は軍隊とともにベルギーへ行った。

最初の戦闘以来、彼は昼も夜も、その本に書かれていた事実や可能性について考え続けていた。地上の人生と続いている未来の生命はあるのだろうか。私が主張したように、人は戻って来ることができるのだろうか。そして、死者たちの中での自分の体験の記録を、まだ生きている国にいる一人の女

性に伝えることができるのだろうか。私は、本当に、自分が語ったものを見たのだろうか。そして私は、原型の世界や、天の世界へ行き、そこで、小羊を腕に抱いた人類の救い主を見たのだろうか、などなど。

この人が決して疑わなかったことが一つあった。それは、その書き手の誠実さであった。その点については、彼は本能によって、そして、ある種のアングロ・サクソンの騎士道精神によって確信していた。それは、ある民族の人々には理解しにくい種類のものだった。

彼は、塹壕の仲間たちに、いつも未来の生命について話していた。彼は、パイプをくわえて、黙って座り、遠くを見つめていた。そして、ほかの兵士たちが、何をそんなに熱心に考えているのかと尋ねると、彼はよくこう言った。

「去年の夏に読んだ本のことを考えているんだ。そして、それが本当だったのかどうかを考えているんだ。」

兵士たちが、どの本のことかと尋ねると、彼は『生きた死者の手紙』について話し、その中の文章を丸ごと引用し、そこに書かれている物語のあらすじを語り、本のあちこちに散りばめられている哲学的な考え方を説明した。丸一晚、その議論に費やされることもあった。

あなたは、兵士としても、看護婦としても、戦場へ行ったことはない。しかし、あなたは、戦場へ行ったのである。

あの本が、世界の歴史の中で最も大規模な人間の魂の旅立ちの、ほんの数か月前に出版されていた

というのは、不思議な偶然だった。そのことを、あなたは考えたことがあっただろうか。私はなかった。教師が、そのことを私に指摘するまでは。

昨日、あなたの名前を思いながら死んだ私たちの友人が、特に興味を持っていた問題が一つあった。それは、もし敵の手によって自分が人生を終えることになったなら、私たちが書いたような「天国の小さな家」を、イングランドにいる、自分の愛する少女のために準備することができるだろうか、という問題だった。そして、もし彼がそれを準備し、彼女を待っていたなら、彼女は、彼の死後も彼に誠実であり続け、数年後に、そこで彼と再会し、その小さな家で彼とともに暮らしてくれるだろうか、ということであった。

この若者は、対になる魂についての理論を書いた、あるアメリカの神秘家の著作を読んでいた。そし

て、イングランドにいるその少女の中に、自分の対になる魂を見つけたのだと信じていた。それは、私が、あの小さな天国の家を建てた男についての話の中で、ほのめかしたことである。

しかし、彼は、そのことについては、塹壕の仲間たちには一言も話さなかった。彼らには、本の中のほかの話については語ったが、その話については語らなかった。不思議なことに、私たちは、自分が最も心の中で大切にしていることについては、他人に話さない。少なくとも、たいていの人はずである。

その本の中で、私たちの友人の興味を引いたもう一つのことは、目に見えない世界にいる女性が、まだ生きている夫とともに、エジプトへの旅をしたという話だった。彼は、自分が死んだなら、自分もまた、魂の姿で——彼自身の言い方を使えば——、かつて恋人と一緒に訪れ、将来の新婚旅行の場所

として二人で選んでいた、北ウェールズの小さな場所へ行くことができるのだろうか、とよく考えていた。

ある夜、彼は彼女に長い手紙を書いた。もし自分が死んだなら、この夏、その場所へ行ってほしい、そして、自分はそこで彼女に会おうとするだろう、と書いたのである。しかし、そのあとで考え直し、その手紙を破ってしまった。それが彼女を悲しませるのではないかと思ったからである。

私は、彼のまわりに、ある特別な光を見た。それは、肉体の中に宿っている魂が、その肉体がまもなく壊されようとするときに、その器のまわりに放つ光である。私は、もうすぐ、しなければならない仕事があると分かって、待っていた。

突然、私は、彼の肉体が地面に倒れるのを見た。そ

して、かすかな身体が、その肉体から流れ出していくのを見た。私はほんの少し待っただけで、前に進み、その魂を、やがて沈み込んでいこうとしていた眠りの中から引き上げた。私は、そのアストラルの額に息を吹きかけた——アストラルにも額がある、ということは間違えないでほしい——私は、人生の最後の瞬間に、私たちの本について、そして私たちについて考えてくれたその男の、アストラルの額に息を吹きかけた。

彼は目を開き、私の顔を見た。

「やあ、『X』！」と彼は言った。「ここで、あなたが迎えてくれることを期待していたんだ。期待を裏切らなかったなんて、あなたはいい人だ。」

「ああ、私はいつだっていい人だったよ！」と私は答えた。「どうして、そんなに早く、自分が肉体を離

れたことが分かったんだ？」

「あなたを見たからです。」

「では、どうして私だと分かったんだ？」

「雑誌で見た、あなたの写真によってです。」

「しかし、私はまだ、あの古びた大きな身体のように見えるのか？」と私は尋ねた。なぜなら、私は、自分の元の若さと美しさのある部分を取り戻したことを、少し誇りに思っていたからである。

「ええ」と彼は言った。「あなたは、その写真そっくりに見えます。」

「それは不思議だ」と私は答えた。すると私は、自分についての彼の思い——つまり、物語の中の、あ

の年老いた判事としての私の姿についての彼の思い——が、私の意志が働かなくても、彼が私だと認識できるように、私の身体を変化させてしまったのかもしれない、ということに気づいた。

「少し眠りたいかい？」と私は尋ねた。しかし、彼の目には、眠たそうな様子はなかった。

「いいえ、結構です、『X』。私はイングランドへ行きたいです。でも、あなたには、私の望みをかなえてやる以外にも、何かするべきことがあるのではありませんか。」

私は笑った。

「君の望みも、私の望みと同じくらい大切なんだ」と私は言った。「一緒にイングランドへ行こう。」

私たちは、行った。

海峡を渡る途中、私たちは兵士たちを満載した輸送船のそばを通った。

「連中みんなが、僕と同じくらい知っていればいいのに」と私の友人は言った。「もし、こっちで僕がどんなに素晴らしい仲間を見つけたかを見ることができたなら、もっと元気を出して戦えるかもしれない。」

「塵は塵に、灰は灰に」と言って、魂の旅立ちに立ち会うときに厳粛な顔をしている聖職者の方々よ、驚かないでほしい。たった今こちらへ来たばかりの若い兵士である私の友人の、陽気な会話に驚いた

り、衝撃を受けたりしないしてほしい。彼は、自分が古い友人と一緒にいることを知っていたし、死は生よりも神聖なものではなく、また、生よりも深刻に扱わなければならないものでもないということも知っていたのである。

私たちは、一人の少女を訪ねに行った。私は若いころ、よく恋人に会いに行ったものだ。しかし、この兵士と一緒に彼の恋人を訪ねに行ったときほど、そのような訪問に強い興味を感じたことはなかった。彼女が私たちを見ることができないという事実は、何の違ひもなかった。私はもう、それには慣れていた。

私たちが着いたとき、彼女は髪をとかしていた。美しい長い髪だった。そして、彼女の前の暖炉棚の上、鏡の下には、私の友人の写真が置かれていた。彼女が愛情を込めてその写真を見つめている

と、突然、彼が彼女と写真の間に入った。そして彼女は叫んだ。

「まあ、目が生きている！」

そう言って、彼女は櫛を床に落とした。

そして、真実が彼女の心にひらめくと、彼女はとても厳かな声で言った。

「あなた、本当にあなたなら、そして、こんな不思議なやり方で私のところへ来てくれたのなら、知ってください。私はあなたを愛しています。そして、これからもずっと愛し続けます。そして、私は天国であなたに会います。」

それから彼女は小さな椅子に座り、泣き始めた。
私は彼を彼女と一緒に残して、その場を去った。し

かし、私は時々戻って来て、私が世話をしている彼がどうしているかを見るつもりである。そして、そのうちに、彼の将来の幸福に必要な教えを、いくつか教えるつもりである。

私は、彼に再び戦場の近くへ戻ってほしいとは思わない。なぜ戻る必要があるだろうか。彼は十分に務めを果たした。そして、その報いを受ける資格があるのである。

おそらく、後になって私は、あなたの名前——そして私の名前——を思いながら死んだ、その男について、さらに何かを話すかもしれない。

4 月 24 日。

第三十の手紙

薔薇と十字架

私はますます、私たちが「美しき存在」と呼ぶあの

存在に魅了され、驚かされている。私は決してそれを理解することはできないだろう。なぜなら、その存在のやり方は、私たちのやり方ではないからである。

昨日、その存在は再び戦場の上を通り過ぎた。そして、その数時間後に私があなたのもとへ来たとき、もしあなたの疲れを気の毒に思わなかったなら、私はすぐにでも書いていただろう。落胆してはならない。時には、慈悲のマスターたちは、そのしもべたちには、まるで慈悲を持っていないように見えることがある。しかし、彼らは知っているのである。しもべたちには分からないことを。最も険しい道こそが、最も高い山へと続いていることを。そして、その頂には休息があることを。

美しき存在は、戦場の上を通り過ぎた。大砲の口の中にある一輪の薔薇、地震のただ中で歌う一羽の

鳥、土砂崩れの中にある真珠、地獄にいる天使を
思い浮かべてほしい。

あなたは、「戦場」という言葉の意味を知らない。昨日、何千人もの人々が、あの恐ろしい騒音の中で死んだ。音、音、音——神経が苦痛に悲鳴を上げ、絶望が魂をつかむまで。あの煮えたぎるような渦の中で人生を終えるということは、たいてい、もう一つの煮えたぎるような渦の中へ移るということである。それは、今しがた去ったばかりのものより、さらに熱く、さらに騒がしい。

どうすれば私は、あなたの心を傷つけないようにしながら、戦争について書くことができるだろうか。偉大な教師たちは、あなたの感情を守ろうとはしていない。彼らは、あなたに感じてほしいのである。何度も、何度も。感情の波の力そのものが、あなたを高く運び、アデプトの境地の岸边へと押し上げる

まで。そして彼らは、あなたに考えてほしいのである。何度も、何度も。論理の抗いがたい冷たさが、あなたの中から自己を凍らせて消し去るまで。氷と火！

もし、あなたが自由でいられるために、諸国の兵士たちがどれほど苦しんだかを知ることを恐れるなら、あなたは、その自由に値しない。苦しみを恐れてはならない。芽が現れる前には、種の殻は砕かれなければならない。

祖国のために死ぬことで、戦場という地獄にいるそれらの魂は、新しい時代を生み出しているのである。そして、あなたの魂が彼らとともに苦しむことによって、あなた自身の中にも、新しいものが生まれつつある。人類が産みの苦しみの中にある間は、喜びを求めてはならない。ただし、苦しみの中に喜びを見いだすことができるなら別である。そう、私

は知っている。いつ、最初に、そして誰によって、その偉大な考えが、あなたの意識の中に根を下ろしたかを。それは、この世界の苦痛の時代における、偉大な魂たちの秘密なのである。

もし、あなたが、もうこれ以上苦しめないというところまで苦しむなら——そのとき、両極は入れ替わり、苦しみの喜びが魂を照らす。そのとき、あなた自身の中の美しき存在が、より小さな自己が殺された戦場の上を漂うのである。

あなた方一人一人の中には、美しき存在がいる。地震のただ中で歌う鳥、大砲の熱い口元に寄り添う薔薇、土砂崩れにも碎かれない真珠、地獄を照らす天使である。

今、人間の心のあらゆる普通の感情が、強められている。戦争が始まる前と同じ人間は、もはやどこ

にもいない。世界のどこにも、一人もいない。人類の魂は、今、産みの苦しみの中にある。この人類という化身は、自分自身に敵対し、自分自身を引き裂いている。人類の心は深い淵であり、人類は、その淵を見るにはあまりにも盲目になっていた。だからこそ、善と悪の守護者たちの燃える松明が、その淵へと差し込まれ、その中で眠っていたすべての者たちが、突然、乱暴に目を覚まされたのである。

ああ、地上の人々の心よ、もう二度と眠ってはならない！ 互いに憐れみ、愛し合いなさい。一人の苦しみは、すべての人の苦しみなのだから。そして、苦しむ人類という種族の戦場の上には、美しき存在が漂っているのである。

人類は、一つである。そして、人類は、多くでもある。そして、あなた方すべては、ともに、天におられる父の遺産を受け継ぐことができるのである。

あなたは、薔薇十字の象徴を知っている。あなたの四肢に、固い木が打ち込まれ、衝撃と傷による神経の苦しみを味わうまでは、愛の大きな赤い薔薇は、十字架の腕の間、あなたの胸の上に、その香り高い花びらを開くことはできない。

あなたの中の人間的な部分は、十字架の苦しみであり、あなたの中の神的な部分は、薔薇の香りである。そして、人間であり神でもあるあなた自身こそが、薔薇十字なのである。

もし、あなたを自分のものとして求める木の、裂けるような苦痛を恐れるなら、同じくあなたを自分のものとして求める薔薇の香りを、あなたは嗅ぐことができない。

ああ、人類よ、偉大な入門を拒んではならない！

偉大なる導き手が来るとき、恐れの下牢に身を隠してはならない！

戦争という恐ろしい十字架の上に、新しい種族の赤い薔薇が咲くだろう。そして、死すべき存在である一人一人の十字架の上にも、その赤い薔薇が咲くことができる。

薔薇は、東と西、昇る太陽と沈む太陽、人間と神との間の均衡を示している。十字架の腕は無限へと伸び、その足は永遠の実体の中に埋められ、その頭は天使と神々の中にあり、薔薇の心は至るところにある。それは、この固い木に触れられて身をすくませる無数の人々の、すべての心の中にある。

私は毎日、人類のために身代わりの贖いをしている人々の叫び声を聞いている。彼らが、戦場で身体を引き裂かれて横たわるとき、十字架の腕は、彼

らの震える肉を貫いて打ち込まれている。そして、薔薇の花びらは、彼らの心の中で開いているのである。

彼らは、憎しみの手によって、愛のために死につつある。なぜなら、愛と憎しみは、互いに反対であり、しかも、どこにでも存在するからである。祖国への愛こそが、彼らを贖いへと呼ぶのであり、それは、東と西、高みと深み、愛と憎しみという対立する力の法則を定めた神との、一致なのである。彼らは、その犠牲を受け入れた。死者たちの中での滞在、地獄での滞在の後に、彼らには、復活と生命が与えられるだろう。

彼らは、墓の入口に立つマグダラのマリアの前に現れるだろう。多く愛したゆえに、その罪を赦されたあの女性の前に。そして彼女は、弟子たちを呼び、大きな喜びの知らせを伝えるのである。

世界の魂こそが、復活したキリストであり、弟子たちは、その知らせを聞いて喜ぶのである。

時がもたらしたこの偉大な出来事を、どうして私は、あなたに隠しておくことができるだろうか。

三十枚の銀貨のために、世界の魂は売られた。そして、世界のユダは、唇に神の名をのせながら、裏切りの口づけをした。そして、ローマ兵たちは、すでに衣を分け合っている。

ポンテオ・ピラトは、この問題について手を洗った。そして、彼の妻は、自分の夢が顧みられなかったことを嘆きながら、自分の部屋で泣いている。サンヘドリンの祭司たちは、満足そうに首を振っている。しかし、人類という神殿の幕は、上から下まで裂けているのである。

ああ、時の扉の前に立つ聞き手よ、もしあなたが苦しまなかったなら、どうしてこのメッセージを受け取ることができただろうか。もし、あなたが贖いの真理をつかんでいなかったなら、誰があなたを信じただろうか。十字架の木が、あなたの四肢を貫いていなかったなら、薔薇は咲くことができなかったのだ。今この時、産みの苦しみの中にある世界よ！

静まりなさい。そして、神が神であることを知りなさい。気づきの静けさの中で、花びらは開き始める。そして、喜びが心を満たし、心は広がる喜びで膨らんでいく。ついには、十字架のすべての繊維が生き、生きと震え、薔薇の中心にある喜びで満たされ、その香りが世界を甘くするまで。

そして、美しき存在——聖霊の一筋の光——は、戦場というカルバリの丘の上を漂っている。

1915 年 4 月 25 日。

第三十一の手紙

セルビアの魔術師

薔薇十字の犠牲から、疫病に苦しむセルビアまで

は遠い道のりである。しかし、今朝あなたが私とともに進むのは、その道である。

以前の手紙で私が書いた、あの忌まわしい存在が、上の世界へと吐き出した病気のアストラルの病原体に対して、なぜあの国が最も影響を受けやすかったのかには、理由がある。

はるか昔、セルビアの山々には、一人の邪悪な魔術師が住んでいた。彼は、より深い秘術の研究を、自分がそこに見いだす知的な喜びと利己的な満足のためだけに行っていた男であった。彼は、普通の人間の意識をはるかに超えるところまで進んでいたため、世俗的な野心は持っていなかった。彼にとって、この世は、ただ逃げ出すべき卑しい場所にすぎず、この世の人々は、自分の目的のために利用できる場合を除いては、気にも留める価値のない虫けらでしかなかった。

彼は、自分を一種の神だと思っていた。そして、その利己的な努力はあまりにも熱心であったため、もし彼が、自分が生まれ出た人類のために、その知識を用いていたなら、彼は本当に、一種の神になっていたかもしれない。しかし、利己的で邪悪な存在は、決して神になることを目指してはならない。せいぜい、人間をほんの少し超えるところまでしか行けないのである。幼虫は蝶になることができる。しかし、もしそれが、より高い領域の陽の光と空気を憎むのなら、その翼は育たない方がよかったのである。

この男、この利己的な魔術師は、ある種の魔法の言葉によって、自分のもとへ自然界の存在たちを呼び寄せることができることを知っていた。そして、それら目に見えない存在たちの助けによって、自分自身は魂を持たないアストラルの存在を作り出し、

そこに自分の力を吹き込むことができることを知っていた。

さて、彼の人生のある時期を特徴づけた、現実的で積極的な悪への転換は、次のようにして起こった。

彼は、自分にとって安全だと思える隠れ場所を山の中に見つけていた。彼は、自分の小屋の周囲を準備し、磁気を帯びさせて、そこをアストラルの力の中心にしていた。そして、その場所を自分だけが独占して持つ権利という考えは、自分自身を守るために、彼が力を注ぎ込んでいた考えの一つだった。

ところが、その魔術師が住んでいた山の持ち主が、小屋の周囲が、その地域の野生動物を狩るのに良い場所だと気づいた。そしてまもなく、狩人たちの

銃声によって、魔術師の静かな研究は乱されるようになった。狩人たちは、彼が自分だけのために準備していたまさにそのサークルの中へ、自分たちの軽蔑すべき肉体をもって入り込むことさえした。

このことは、彼が、それほど高位の魔術師ではなかったことを示している。なぜなら、もし彼が、その中心を、人類の利益を目的とした仕事のために作っていたなら、人類の一員が、それを汚すことなどできなかったはずだからである。慈悲のマスターたちの隠れ家は、侵入を受けないように守られている。

怒りと失望の中で、彼は狩人たちと、その周辺一帯すべてに呪いをかけた。そして、その邪悪な魔術によって、自分の呪いを実行する存在たちを作り出した。彼は、それらを地上にも、空中にも、そして地面の下の領域にも作り出し、それぞれに役目を与え、不従順には恐ろしい罰を課した。彼が得た力の使

い方は、本物のマスターたちが従う法によって、明確に禁じられているものだった。

確かに、それによって狩人たちは、その場所から去った。しかし、彼が呼び出した存在たちと、彼が作り出した存在たちは、その場に残った。なぜなら、彼には、それらを自ら破壊するか追放するだけの十分な知識がなかったか、あるいは、自分の邪悪な行為に対する十分な責任感がなかったからである。

そして彼が、百十二歳という長寿で死に、その意志がそれらの存在から取り去られたあとも、それらは、アストラル世界の低い領域で、半ば生きているような状態のまま残り続けた。

その後、一世紀以上が過ぎてから、大戦争の波がヨーロッパを襲い、目に見えない世界の邪悪な軍

勢が、自分たちの獲物と満足を求めて押し寄せたとき、それら古いアストラルの怪物たちは眠りから目覚め、彼らに加わった。そして、邪悪な魔術師が呪いをかけた一帯は、すべて汚染された場所となった。そこには、自分の利己的な研究を邪魔した人々への憎しみを理由として存在していた、あの存在たちの吐き出すものが満ちていたのである。

私は、彼がどのような方法でそれらを作り出し、一帯に邪悪な呪いをかけたのかについては説明しない。なぜなら、私は、利己的な世界に、将来さらに厄介なことを引き起こすために使える知識を与えたくないと決めているからである。しかし、私は、あなたに、セルビアが本当に危険な場所であることを理解してほしい。だからこそ、そこは、戦争という邪悪な襲撃の中心地点として選ばれたのである。

セルビアの人々は勇敢であり、自分たちに降りかか

ったこのアストラルの邪悪さについては、何の責任もない。彼らは利用されたのである。なぜなら、邪悪な力は、昔から呪われていたこの地域を通して、彼らに近づくことができたからである。

新しい種族の人々が、アストラルの世界には避けるべきものがあることを知らなければならない時が来ている。もし、ある種の教師たちが、これまであまり多くを語らなかったなら、この警告は必要なかったかもしれない。しかし、世界はすでに、自分たちの世界の内側にも外側にも、別の世界があることを、あまりにもはっきり感じ取るようになっている。そのため、人々が、その目に見えない世界と戯れてしまわないように警告によって守られなければならない。少なくとも、人々が、自分の仲間たちへの無私の献身を十分に身につけ、花々の間に潜んでいる蛇の毒に、自分自身が冒されることなく、その世界を探ることができるようになるまでは。

あの古い魔術師は、粗い物質の制限に妨げられることなく、利己的な学者たちが研究を続けている領域へと進んでしまった。しかし、彼が地上にいた最後の時に、セルビアの丘で行ったことに対する完全な責任は、再生の入口で彼を待っているだろう。彼が再びこの世に来るときには、自分自身が、そこで彼が解き放ったすべての疫病の犠牲となるような身体を持って来ることになるだろう。彼は、自分と同じだけその場所に権利を持っていた他者から、自分を守ろうとして、そうしたのである。

あなたの仕事が、疫病を取り除くことに関係していないのなら、セルビアには近づかない方がよい。疫病が取り除かれるまでは。しかし、あの恐怖から人類を救うために、献身的にそこへ向かう医師や科学者たちには、戦争と平和のあらゆる名誉と栄光が与えられるだろう。なぜなら、彼らは、自分たちが

世界への奉仕のために用いられることに同意したからである。彼らのより高い自己が、それに同意したからである。

私は以前、邪悪な自然霊たちは科学者を恐れと言った。そして、科学者たちは、この疫病と物質的な手段によって戦っているけれども、その意志の力と、無私の目的の力は、彼らの活動の物質的な基盤を超えて働き、その影響を、彼らの客観的な心が何も知らない目に見えない世界にまで広げ、生命ある空気によってそれを浄化しているのである。

そう、すべての名誉を、科学者たちに！

第三十二の手紙

ユダとテュポン

私は、人類の魂が今くぐり抜けている十字架刑に

ついて語ってきた。今度は、その人類を銀貨三十枚で裏切ったユダについて語りたい。

この本の読者よ、あなたがユダヤ教徒であれ、キリスト教徒であれ、ヒンドゥー教徒であれ、回教徒であれ、もし魂の入門の過程について何か知っているなら、福音書の劇——それが歴史であろうと伝説であろうと、あなたがどちらと受け取ろうと——は、入門の過程を忠実に劇として表したものだ、知らなければならない。

そして、その過程において、ユダの裏切りは避けられない部分である。それがなければ、苦い杯は満たされなかっただろう。そして、苦い杯は、人類の魂にとっても、一人一人の魂にとっても、キリストの魂にとっても、満たされなければならないのである。

「父よ、なぜ私をお見捨てになったのですか」という言葉は、この人類の恐ろしいカルバリの丘において、身体を引き裂かれた多くの兵士たちの唇にのぼった。

重い十字架は、秋から春までの苦しい旅の間、ずっと担われてきた。そして今、四月になって、人類は苦しみのために十字架に釘づけにされている。茨の冠は血に染まった額の上にあり、釘は手と足を貫き、酢の杯は差し出された。そして今、百万の唇の上に、「エロイ、エロイ、ラマ・サバクタニ！」という叫びがある。

ユダの裏切りは避けられなかった。ちょうど、テュポンの行為が避けられなかったように。もしユダがいなかったなら、この物語は完成しなかっただろう。もし、テュポンがオシリスを殺すという行為がなかったなら、子であるホルスは現れることができなかった。

っただろう。

それにもかかわらず、私はここに立っている——目に見えない世界の幕の向こうの安全な場所に立っているのだ、と反対する人々は言うだろう——そして、私は世界に向かって、できる限り、ユダへの恐ろしい罰を和らげるよう勧めている。なぜなら、あの方ご自身が、十字架の上でこう言われたではないか。

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分たちが何をしているのか分かっていないのです。」

山上の垂訓の中にも、東洋の聖なる記録の中にも、世界中のどの記録の中にも、この十の言葉ほど、壮大で、霊的な意味に満ちたものはない。

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分たちが

何をしているのか分かっていないのです。」

今、人類に対して罪を犯している者たちは、本当に、自分たちが何をしているのか分かっていない。彼らは、破壊への怒りに酔い、自分自身の罪深さを潜在意識の中で感じて狂わされている。しかし、自分たちがしていることを、彼らは知ることができない。ドイツ人の中でも、入門した魂を持つ者たちだけが、ドイツが何をしたのかを、ぼんやりと知っているにすぎない。

それでも私は言う。彼らを赦し、憐れみなさい。なぜなら、彼らの犯した罪は恐ろしいものであり、彼らの苦しみもまた、大きなものとなるからである。

あなたの血を分けた人々が何千人も殺され、そして、あなた自身もまた、霊的なつながりによって殺されたように感じるときでも、恐れてはならない。最

後には、善が勝利しなければならない。なぜなら、人類は上へと向かう旅の途中にあるからである。その血は、無駄に流されるのではない。

人類は、最後の会議でドイツにその一片を与えたとき、裏切るのはドイツであると知らなかったのだろうか。人類は知っていたのである。

そして、あの恐ろしい七月、人々の潜在意識の中の自己は、眠りの中で、恐ろしい試練が近づいていることを知っていた。覚えているだろうか。多くの感受性の強い魂の中では、その劇は、諸国のカルバリの丘で実際に演じられる前に、すでに前もって演じられていたのである。

ドイツが世界を裏切ることは、ドイツの魂の中に書かれていた。しかし、もし世界が、その裏切りに対して、いつまでも続く憎しみをもってドイツを憎むな

ら、それは、人類の心の中に、千年の間痛み続ける傷を残すことになるだろう。

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分たちが何をしているのか分かっていないのです。」

宇宙の仕組みの中で、悪が必要であることを認めることは、悪を許すことではない。罪人を赦すことは、罪を軽く見ることではない。未熟な心には、力の均衡という恐ろしい法則を理解することができない。そのために、聖なる知識の守護者たちは、公の場で語ることに、これまでずっと慎重であったのである。

「つまずきが起こるのは避けられない。しかし、そのつまずきを起こさせる者には災いがある」という言葉は、何千もの教会で繰り返されてきた。しかし、この文の後半は、前半よりも、はるかによく理解さ

れてきた。

「つまり起きるのとは避けられない。」

ドイツは、そのような国である以上、人類をこの十字架刑へと裏切らずにはいられなかった。人類が裏切られることは、すでに定められていた。そして、それを成し遂げることができた国は、ドイツ以外にはなかった。テュポンは、その存在の法則そのものによって、オシリスを殺さなければならなかったのである。そして今、偉大なる母であるイシス——世界の女性性——は、夫の身体の断片を探し求めて、泣きながらさまよっている。

千マイルにも及ぶ戦線の上に、その断片は散らばっている。イシスは、まさに夫を失ったのである。

そして、人間が偉大なる原型の姿であるように、今

日、一人の人間が、裏切り者の姿そのものとして立っている。その人間とは、ドイツのヴィルヘルムである。

長い間、彼の脳をむしばんできた病気——それは、彼の自己崇拜の一因となっていた——こそが、弱点であり、ヨーロッパという魔法のサークルの灯の間にある、守られていない場所だった。そして、そこから邪悪な力が入り込んだのである。まことに、この罪をもたらしただけには、災いがあるだろう。

そして、世界は、悪がその道具として使った国を憎んではならないと言うとき、私は、この最後の清算において、感傷的な弱さを勧めているのではない。世界は、自分自身を守るために、ドイツが二度とこの裏切りを繰り返せないようにしなければならない。その詳細については、専門家たちに任せる。私は控えめな幽霊であり、目に見えない幕の向こう

の安全な隠れ場所から語っているのだから。

1915 年 4 月 27 日。

第三十三の手紙

藁の冠

ドイツのカルマを抑えようと努めるとき、私は正義

の法則、原因と結果の法則を覆そうとしているのではない。むしろ、その反対である。

もしあなたが、カルマの法則についての学びの中で、時間というものが一つの要素であることを学んでいないなら、その学びは表面的なものにすぎなかったのである。多くの健全な会社でも、もしすべての債権者が、一度に全額の支払いを求めたなら、破産してしまうだろう。ドイツの道徳的、財政的負債こそが、その恐るべきカルマなのである。その国が、まったく新しい考え方に自分を合わせるための、少しの時間を与えなさい。

先日、あなたが友人と議論していたのを私は聞いた。* それは、ドイツの誤った主張、「ドイツはすべての上にある」という考えが、非常に強く思い込まれているために、事実そのものを打ち負かすことができるのではないか、という仮説についてだった。

人類は、精神の時代へと進化しつつあり、どれほど誤った考えであっても、強い観念であれば、事実をそれに従わせることができるのではないか、というのである。

この段落の次の部分は、原文では意味がはっきりしなかったため、私が書き直した。——編集者

では、考えてみよう。

ドイツとドイツ人は、この世界の他のすべてより優れているという考えは、その民族の心の中に、あまりにも深く根を下ろしているので、それを取り除くのは難しいだろう。

あなた自身が述べたように、歴史の中には、自分たちこそ神に選ばれた民であると宣言した別の民族がある。そして、その思い上がった考えのために、

今では地上のあちこちに散らされ、祖国を持たない民となり、もはや一つの国家ですらなくなっている。(1915 年)

あるものを、すでに存在しているものとして強く思い込むことによって、それを作り出そうとする試みは、新しいことではない。肯定と否定は、現代のある思想の流派によって、大きな効果をもって使われている。その人々は、自然の事実を完全に無視している。

さて、私たちが自然の事実を無視し、否定するとき、私たちは、ある程度まで、また、ある一定の期間だけ、自分自身の中で働く自然の力を止めることができるかもしれない。あるいは、それに失敗し、その失敗を自覚することによって、以前にも増して、自然の操り人形になってしまうかもしれない。

ヒーリングに失敗し、その失敗を正直に認めるクリスチャン・サイエンスのヒーラーは、そのはっきりした失敗を前にしても、自分の力を主張し続けることができるかもしれない。あるいは、自分自身や、自分の学問の主張を、完全に疑うようになるかもしれない。あるいは、事実に照らして、その両方をもう一度見直し、自然と心の神秘を本当に学ぶ者になるかもしれない。

ドイツもまた、「剣を取る者は剣によって滅びる」という、最も賢い人々の古い言葉を、自ら証明してしまったあとで、この三つの道のうち、どれかを選ぶことになるだろう。

あなたは、ドイツ人に、自分が否定している事実を納得させようとしたことがあるだろうか。私は、あなたがあることを知っている。あなたが彼の間違いを証明したことで、彼は、自分が間違っているかもし

れないと納得しただろうか。おそらく、そうではなかった。

ドイツは、自分たちの偉大さと、あらゆる面での優越を強く思い込むことによって、自分自身を本当に偉大な国家にしてきた。彼らの間違いは、それを証明しようとしたことにあった。ある主張を証明しようとするとき、あなたは、その反対の考えにも、ある程度の根拠があるかもしれないことを、暗黙のうちに認めているのである。そして、もし自分の主張を証明できなければ、あなたは終わりである——あなたがドイツ人でない限りは。ドイツ人は、たとえ本人の意思に反して納得させられても、なお同じ意見を持ち続ける。

もし事実が自分を支持しないなら、では事実の方が間違っているのだ、と彼は考える。しかし、事実は間違っていない。そして、ドイツは、地上のす

すべての国々より、あらゆる面で優れているわけではない。ドイツは、他の二つか三つの国々より、多くの銃と、多くの兵士を持っているかもしれない。それは、私たちも喜んで認める事実である。しかし、銃と兵士において優れているということは、銃と兵士において優れている、ということにすぎない。それは、すべてにおいて優れている、ということではない。

ドイツは、力こそ正義である、と実質的には言ってきた。では、その力を証明してもらおう。そのあとで、私たちは、力が持つ正しさについて議論しよう。

私が地上を去る何年か前、私は、自分の知り合いの大部分の人々よりも力が強かった。しかし、もし私が、その力を理由に、彼らを殴り倒して時計を奪っていたなら、その優れた力は、郡の刑務所の独房

の中を、私の六フィートの身体で行ったり来たりすること以外には、役に立たなかっただろう。私は時計を奪えたかもしれない。しかし、それを持ち続けることはできなかった。なぜなら、私個人の力は、私が暮らしていた社会の力にはかなわなかったからである。ドイツについても同じである。

ほとんどの人は、自分は友人や知人より優れていると思っている。そして、友人や知人が、そのことを認めないことに、ひそかに腹を立てている。しかし、その思い込んだ優越を理由に、普通は近所の人を殴り倒したりはしない。

私が、自分は他のすべての人間や天使より優れていると主張したとしても、それによって私が優れていることになるのは、愚かな思い上がりにおいてだけである。

もし、足を折ったクリスチャン・サイエンティストが、自分は足を折っていない、と言い張ったとしても、それによって事実が変わることはない。その強い主張は、その欠陥を治す方向に働くかもしれない——それは認めよう。実際、そういうこともよくある。

ドイツの思い上がりは、そのエネルギーを呼び起こし、ドイツの物質的な現在を、物質的な過去より優れたものにした。しかし、それによって、ドイツが「すべての上」に立つことはできない。世界がそれを認め、世界自身が、より低い位置を受け入れない限りは。ドイツ人は、人を納得させる弁論家ではない。なぜなら、彼らは、いつも自分に有利な事実を大げさに言いすぎ、自分に不利な事実を否定することによって、反発を招くからである。

彼らは、より批判的な民族の心を、ほとんど理解していない。そのため、ただ主張するだけで、人を納

得させようとする。そして、最初から、自分たちの立場を悪くしてしまうのである。

ドイツは、世界に一つの役割を果たすことになるだろう。それは、世界を鍛えた、ということである。それは悲劇的な役割であり、しかも、最終的には自分自身に返ってくる。多くの親が、盲目的な暴力によって、自分の息子を、自分以上の粗暴な人間にしてしまった。多くの人が、友人を傷つけたことで、逆に自分の魂を刺されてきた。友人は、以前より冷たく、強くなったかもしれない。しかし、それで得をしたのだろうか。おそらく、したのである。経験は財産である。人間は、喜びによってだけでなく、苦しみによっても成長する。もし、ドイツの残酷さが、ヨーロッパの諸民族を、より強くしたなら、利益を得たのは、彼らであって、ドイツではない。あまりに苦い薬を出す医者には、報酬ももらえずに、追い払われることがある。

昔、「精神」の科学者を名乗る男がいた。その男は、自分の娘はピアノの練習をする必要はない、と言った。必要なのは、自分はピアニストである、と強く思い込むことだけであり、そうすれば本当にピアニストになるのだ、と。

ドイツは、その教えに従ってしまった娘と同じ立場にある。そして今や、近所の人々にとっての恐怖になってしまっている。ドイツは、公害のような存在として、追い出される危険にさらされている。

また、一つの主張をしている個人の集まりも、その人数に比例した効果を必ずしも持つわけではない。

白魔術師と黒魔術師について、私があなたに書いたことを覚えているだろうか。善のために協力して働く二人は、四人分の力を持つ。そして、悪のために協力して働く二人は、一人半分の力しか持たない。では、この共同の努力において、ドイツは何のために働いているのだろうか。自分自身のためだけである——まさに、黒魔術師と同じように。

ドイツ人の思い上がりは、あまりにも深くドイツ人の魂に沈み込んでしまっているのです、彼らは、他国を占領し、奴隷にすることによって、その国々のためになることをしているのだと、本当に信じている。いや、私は誇張しているのではない。私は、ドイツ人が、その冗談にもならないようなことを言うのを聞いたことがある。

精神病院には、自分は王だと主張する人間が大勢いる。そして、ときには、自分は王の中の王だと言

い張る入院者もいる。こうした患者たちは、自分が王であると主張するドイツ人たち以上に、そのことを完全に信じ込んでいる。もし、ただ主張することだけで事実を超えることができるのなら、この人たちは王である。だが、本当にそうだろうか。彼ら自身にとっては、そうなのである。そして、ドイツ人たちもまた、精神病院で藁の冠をかぶっている王たちと同じくらい確実に、「すべての上にある」のである。

藁の冠をかぶった王と議論しても無駄である。彼には、抗いようのない論拠がある——その冠である。あなたには、それが見えないのだろうか。もし、あなたが敬礼しないなら、彼は背を向けて立ち去る。

しかし、精神病院の王であっても、治り、仲間たちと同じ健全な立場へ戻ることができる。それが、私

がドイツに望んでいることである。そして、それが、マスターたちの望みでもある——なぜなら、ドイツは、マスターたちの記録帳の中では、高い位置を占めているからである。藁の冠をかぶった王は、自分が王だという誤った主張によって、自分の魂を失ってしまったわけではない。彼は、神の不滅の子である。彼の霊は、あなたや私の霊と同じように、本物である。彼の誤りは、一時的なものでしかなく、たいていは、自分が受けたと思い込んでいる不当な扱いや侮辱について、あまりにも長く考え続けたことから生じている。ドイツと、まったくよく似ている。

この優越感という考えが、あの高貴な民族の心の中で濃み始めたとき、彼らはまだ偉大な国家ではなかった。彼らは、自分たちが受けた不当な扱いや、軽んじられたことを感じていた。傷ついた自尊心にとって、唯一の逃げ場は、主張が自由に行える

精神の世界だった。彼らは背を向け、藁の冠を編んだ。彼らは王だった。そして、それが分からない者は、彼らの友情を受ける価値がない者なのだった。

その後、彼らの狂気が激しい形を取るようになると、偉大な医者である「戦争」が現れ、彼らを比較的狭い場所に閉じ込めた。しかし、彼らが最初の暴力的な発作で打ち倒した小さな国々は、その一撃によって、今もなお地に倒れたままである。これらの王たちの子孫は、賠償を支払わなければならないだろう。国家の法は、人間の法よりも、さらに正しいのである。

国家に道徳はない、と誰が言えるだろうか。国家は、霊的に、人間より劣っているのだろうか。ちょうど、惑星の霊が国家より劣っていないのと同じように、そうではない。宇宙には道徳があり、それに逆

らう者は——国家であれ、人間であれ——必ず清算の日を迎える。カルマは法則なのである。

4 月 29 日。

第三十四の手紙

シルフと父

昨日、強大な敵軍に対して立つフランス大軍の前

線に沿って進み、その軍勢を、まるで長く連なる生きた光の列のように見せている勇気と志の精神を見つめていたとき、私は肉体の外側の領域で、見覚えのある顔を見た。

私はその出会いを大いに喜んで立ち止まった。そして、そのシルフ——私が出会ったのはシルフだった——もまた、認識の微笑を少し浮かべて立ち止まった。

私の以前の本の中で、パリのヴォージュラール通りに住んでいた魔術の研究者の伴侶であり、親しい存在であったシルフ、メリリーヌの話を覚えているだろうか。

私が出会ったのは、そのメリリーヌだった。彼女は、星気の領域をさまよう者たちに、ラ・ベル・フランスの兵士たちが、ジャンヌ・ダルクを鼓舞したのと同じ

理想——異国の者をフランスから追い出すこと——のために戦い、死んでいる場所を示している、その光の列の上にいた。

「あなたの友人であり主人でもある人は、どこにいるのですか？」と私はシルフに尋ねた。すると彼女は、下方にある、一つの塹壕を指差した。その塹壕は、勝利への決意を雄弁に物語っていた。

「私はここにいます。今も彼と一緒にいるために」と彼女は言った。

「そして、ここでも彼と話ができるのですか？」と私は尋ねた。

「私はいつでも彼と話すことができます」と彼女は答えた。「私は彼にとっても役立ってきました——そして、フランスにも。」

「フランスにも？」と私は、ますます興味を抱きながら尋ねた。

「ああ、そうです！ 彼の指揮官が、向こう側で何が企てられているのか知りたがるとき、よく私の友人に尋ねるのです。そして、私の友人は私に尋ねます。」

「なるほど」と私は思った。「軍の将校たちが、見えない世界から導きを求めるとは、やはりフランス人は靈感に満ちた民族だ。だが、ジャンヌにも幻視があったではないか。」

「それで、あなたは、求められている情報をどうやって得るのですか？」と私は尋ね、数年前にパリで会ったときよりも、どこか真剣に見えるメリリーヌに近づいた。

「まあ」と彼女は答えた。「私は向こうへ行って、あたりを見回すのです。何を見るべきかは、彼が私に教えてくれました。そして、私が彼に知らせを持って帰ると、彼は、もっと愛してくれることで私に報いてくれるのです。」

「そして、今でも昔と同じように、彼を愛しているのですか？」

「昔と同じように？」

「ええ、パリにいたころと同じように。」

「あなたにとっては、時間はゆっくり過ぎたのでしょうね」とシルフは言った。「数年前のことを、『昔』と呼ぶのですから。」

「では、数年など、何でもないのでですか？」

「私にとって、数年は何でもありません」と彼女は答えた。「私は長い間、生きてきました。」

「そして、あなたは、その友人の未来を知っているのですか？」と私は尋ねた。

メリリーヌの顔に困惑した表情が浮かび、彼女はゆっくりと言った。

「以前は、彼に何が起こるか、私はすべて知っていました。なぜなら、私は彼の意志を読むことができたからです。そして、彼が望むことは、何でも実現しました。でも、ここへ来てから、彼は自分の意志を失ってしまったようなのです。」

「意志を失った！」と私は驚いて叫んだ。

「ええ、意志を失ったのです。なぜなら、彼は、私よりもはるかに深く愛している偉大な存在に、絶えず祈っているからです。そして、彼はいつも、ただ一つの祈りを唱えています。『御心のままになさってください』と。以前は、いつも彼の意志が実現していました。でも、今では、私が言うように、彼は自分の意志を失ってしまったようなのです。」

「おそらく」と私は言った。「かつて命について言われたことが、意志についても本当なのだろう。すなわち、自分の意志を失う者は、それを見いだすのだ。」

「私は、彼が早くそれを見つけてくれることを願っています」と彼女は答えた。「なぜなら、昔は、彼はいつも、私に面白い仕事を与えてくれて、彼の意志の目的を達成するのを手伝わせてくれました。でも今

では、彼は私を向こうへ送るだけなのです。私は、向こうは好きではありません！」

「どうしてですか？」

「なぜなら、向こうには、私の友人を脅かしている何かがあるからです。」

「そして、彼の意志は、それと何の関係があるのですか？」

「だって、そのことについてさえ、彼は一日中、私よりもずっと愛しているその偉大な存在に、『御心のままになさってください』と言っているのです。」

「あなたも、それを言えるようになると思いますか？」と私は尋ねた。

「ときどき、私は彼のあとで繰り返して言います。でも、それが何を意味するのか、分からないのです。」

「神について聞いたことはないのですか？」

「私は、たくさんの神々について聞いたことがあります。イシスやオシリスやセト、それに、オシリスの子であるホルスについて。」

「そして、彼が『御心のままになさってください』と言っているのは、そのうちの誰かに対してなのですか？」

「ああ、いいえ！　彼が魔術の仕事をするときに呼びかけていた神々の誰に対してでもありません。これは、彼が新しく見つけた神なのです。」

「あるいは、彼が立ち返った、最も古い神なのかもしれません」と私は言った。「彼は、その方を何と呼んでいるのですか？」

『天にまします我らの父よ』です。」

「もしあなたも、『天にまします我らの父』に向かって、『御心のままになさってください』と言うことを覚えるなら」と私は言った。「それは、前にパリで会ったとき、あなたが望み、待ち続けていた、あの魂を得る助けになるかもしれません。」

「どうして、我らの父が、私を助けてくださるのですか？」

「人間に魂を与えたのは、その方だからです」と私は言った。すると、シルフの目は、ほとんど人間のもののような輝きを帯びた。

「では、その方は、私にも魂を与えてくださるのでしょうか？」

「その方は、どんなことでもできると言われています。」

「それなら、私は魂を求めます。」

「しかし、魂を求めることは」と私は言った。「あなたの友人が祈っている祈りを祈ることではありません。」

「彼は、ただ……」

「ええ、分かっています。彼のあとに続いて、そう言ってみなさい。」

「教えてくださるなら、そうします。それが何を意味するのかを。私は、私の友人がすることをしたいのです。」

「『御心のままになさってください』というのは」と私は言った。「それを天にまします父に向かって言うときには、私たちが、快樂や愛や幸福、その他どのようなものに対する願いであっても、そのすべての願いを捨て、それらをすべて父の御足もとに置くことを意味します。自分が持っているものも、望んでいるものも、すべてを父に捧げて犠牲にするのです。」

なぜなら、私たちは、自分自身よりも父を深く愛しているからです。」

「それは、自分の望むものを得るためには、不思議なやり方ですね」と彼女は言った。

「それは、自分の望むものを得るためにするものではありません」と私は答えた。

「では、何のためにするのですか？」

「天にまします父への愛のためです。」

「でも、私は、天にまします父を知りません。その方は、何なのですか？」

「その方は、あなたの友人という存在の源であり、また到達点です。その方は、あなたの友人が、いつの日か再び戻っていく存在なのです。もし彼が、永遠に『御心のままになさってください』と、その方に言い続けることができるならば。」

「彼が、再び戻っていく存在？」

「そうです。なぜなら、彼が自分の意志を天にまします父の意志と一つにするとき、天にまします父は彼の心の中に宿り、二つのものは一つになるからです。」

「では、天にまします父とは、本当に、私の友人自身の真の姿なのですか？」

「最も偉大な哲学者でさえ、それ以上に真実を語ることはできなかったでしょう」と私は言った。

「それなら、本当に私は、天にまします父を愛しています」とシルフは息をつくように言った。「そして、これからは毎日、一日中、その方に向かって、『御心のままになさってください』と言います。」

「たとえば、それによって、あなたが友人と引き離されることになっても？」

「どうして、それが私を友人から引き離すことになるのでしょうか？ もし父が、彼自身の真の姿なのだとしたら。」

「すべての天使が、学ぶことにおいて、あなたと同じほどであればよいのに」と私は言った。

しかし、メリリーヌは、完全に私のことを忘れたように私から顔をそむけ、喜びに輝く顔を上げながら、何度も何度もこう繰り返していた。

「御心のままになさってください！ 御心のままになさってください！」

「なるほど」と、私は前線に沿って進みながら、自分に言った。「愛する者の真の姿として父を礼拝する者は、すでに魂を得ているのだ。」

4 月 29 日。

第三十五の手紙

暗いヴェールの向こう

ある夜、戦いの轟音が静まり、満月の光が、踏みに

じられた泥や、人で埋められた塹壕や、柔らかな春の緑に芽吹く草木や、淡い色の花々の上に降り注いでいたとき、私は、暗い外套をまとった強大な存在と顔を合わせた。その者は、ゆっくりと威厳に満ちた足取りで、戦場の前線に沿って進んでいた。

私を見ると、その者は立ち止まり、私もまた立ち止まった。その背の高い姿の優雅さと、王者のような気品に心を打たれたからである。彼の顔はヴェールで隠されていた。

「あなたは誰だ」と彼は言った。「この時間に、まるで瞑想でもしているかのように、ここを歩いているのは。」

「私は、瞑想をよくする者です」と私は答えた。「そして、この時間は、それにふさわしいように思われます。」

「では、あなたの瞑想の題目は何だったのだ？」

「私たちの下にある戦争です。」

「そして、私の出現によって中断された、あなたの思索は、どのようなものだったのだ？」

「私の考えは平和についてでした」と私は言った。

「そして、この戦争の殺戮を、どうすれば終わらせることができるのかという問いで満ちていました。」

「あなたの問いは正しい」と、その威厳ある存在は答えた。「おそらく、私はあなたの役に立てるだろう。」

「ヴェールを取ってはいいただけませんか」と私は提案した。「私は、言葉を交わす相手の顔を見るのが

好きなのです。」

彼は、頭を覆っていた暗い覆いの一部を後ろへ払った。そして、私は、どう表現してよいのか分からないような顔を見た。その顔には、力と悪とが入り混じっていた。そして、人間を超えたものでもあり、人間以下のものでもある、不思議な美しさがあった。その顔には、永遠にも思える苦しみと闘いの痕が刻まれていた。しかし、その目には、私を驚かせるほど強烈な意志の光が宿っていた。

「あなたは誰なのですか？」と私は尋ねた。

「私が誰であるかなど、何の問題がある？」と彼は答えた。「私は、あなたの瞑想の問題を解くことのできる者だ。」

「あなたは、平和の天使のようには見えません」と私

は言った。「むしろ、自らが引き起こした多くの戦争を見てきた者のように見えます。」

「だからこそ、私は平和について語る資格がある。平和な者たちに、平和の何が分かる？ その言葉の意味を知っているのは、戦士だけだ。」

「私は、あなたの言うことを聞きましょう」と私は言った。「なぜなら、あなたが法について何かを知っていることが分かるからです。」

「私は、法を執行する者たちの一人だ」と彼は答えた。「そして、私は、世界に平和をもたらすための計画を持っている。」

「その計画を話していただけますか？」

「そのために、私はここへ出てきて、あなたに会った

のだ」と彼は言った。

「そして、どうやって私のことを知ったのですか？」

「私は、力ある働き手たちをすべて知っている。そして、力の弱い者たちの多くも知っている。あなたは、力ある働き手だ。」

「本当に、あなたは私を過大評価しています」と私は言った。「私は、法を執行する軍勢の中の、一人のつつましい兵士にすぎません。」

「偉大な者の謙虚さだな」と彼は言った。そして、私をじっと見つめて、その言葉が私にどのような影響を与えるかを確かめようとした。

「あなたが誰であれ」と私は言った。「そして、あなたが普通ではない存在であることは分かりますが、

知っておいてください。私にとって、自分自身の価値に関心を持つことは、もはや最も重要なことではありません。」

「だからこそ、あなたは平和のために利用されることが出来るのだ。」

「続けてください」と私は求めた。

彼は、しばらくの間、輝くような、探るような目で私を見つめていた。そして、こう尋ねた。

「あなたは、戦争に疲れているのだな。戦争の労苦に。」

「私は、苦しんでいる人々への共感によって、疲れているのです。」

「そして、その人々の苦しみを終わらせたいの
な？」

「時には」と私は言った。それは、彼に向かってとい
うより、自分自身に向かって語るようだった。「も
し、それによって、この下界の恐怖を短くできるな
ら、私は喜んで自分の命を差し出すでしょう。」

「あなたの命？ そして、あなたの言う命とは、何を
意味しているのだ？」

「私の自由な意識、自らの意識の自由のこと
です。」

「あなたのような者の命としては、良い定義だ」と彼
は言った。「そして、本当に、あなたはその命を世界
のために犠牲にするのか？」

「もし、それによって世界を救えるなら、喜んでそうします。」

「それは、可能かもしれない」と彼は言った。

「もっとはっきり話してください」と私は求めた。「あなたは、何か重要なことを言おうとして、探りながら話しているように思えます。」

「世界のために、あなたのような命を犠牲にすること以上に重要なことが、あるだろうか」と彼は言い返した。

「続きを。」

「方法があるのだ」と彼は言った。「あなたが『自由な意識と、意識の自由』と呼ぶものを犠牲にすることで、あの下にいる人々を、これ以上の苦しみから

救うことができる方法が。」

「もう一度言います。続きを。」

「私には力がある」と彼は言った。そして、近づいてきて、その燃えるような目で私をじっと見つめた。
「私には、敵対する軍隊の心に働きかける力がある。両側の軍隊にだ。そうして、彼らが、もうこれ以上戦うことを拒むようにできる。」

「それは、自分の国を裏切ることではありませんか？」と私は尋ねた。

「そして、平和をもたらすことだ」と彼は言い直した。

「そして、そのことに、私はどう関わるのですか？」

「あなたは、大いに関わることができる。」

「あなたの言葉は、まだ私には暗いままで」と私は言った。

「では、もっと明らかにしよう」と彼は答えた。「私の意味を理解してもらうためには、まず私自身について説明する必要がある。私は、善に反対することによって善に仕える者たちの一人だ。そうすることで、善に、より大きな活動を与えるのだ。」

「そのことは、すでに察していました。では今、あなたが私に何を望んでいるのかを、はっきりした言葉で話してください。」

「私の目的は、あなたに一つの提案をすることだ。
もし、あなたがこの殺戮を終わらせたいと思うなら
——そして、この殺戮は、すでに、私が仕えている
目的を果たすには十分なほど長く続いている。す
なわち、世界を血で染め、十年の努力でも再建に
は短すぎるほどのものを破壊し、人間の心に巣くっ
ている憎しみや、その他あらゆる邪悪な情念を呼
び覚ますために——もし、あなたがこの殺戮を終
わらせたいのなら、私は、それを終わらせる方法
を持っている。」

「そして、そこに私はどう関わるのですか？」

「私は長い間、あなたを見てきた」と彼は言った。
「あなたが、自分の師から与えられた原理を、熱心
に実践しているのを見てきた。」

「では、少し前に、なぜ私が誰なのかを尋ねたのですか？」

「それは、これから先の会話のための前置きにすぎなかった。」

「ああ」と私は言った。

「私はあなたを見てきた」と彼は繰り返した。「そして、あなたの力と到達した境地を見て、もしあなたが忠誠の向きを変え、私たちに加わるなら、あなたは、もっと大きな働きをすることができると悟った。あなたの自由な意識は、さらに大きくなるだろう。」

「しかし、その自由な意識こそが、私の言う命だったのです！ あなたは、おそらく、私の理解の限界に合わせて議論を組み立て、自分の命を失うこと

で、それを見つけることになる、とでも言うのでしょうか。」

私の前に立つその存在の、しわの刻まれた顔に、かすかな微笑が浮かんだ。

「あなたは、いつでも面白い話し相手になるだろう」と彼は言った。「私の提案を断る前に、よく考えることだ。」

「あなたの提案する契約では」と私は答えた。「対価がはっきり述べられていません。私は昔、弁護士でした。そして、形式にうるさい人間なのです。」

今や、彼の顔に笑みはなかった。彼は私にこう言った。

「もし、あなたが私たちに忠誠を移すなら、私はこの

戦争を終わらせよう。」

「そして、あなたにそれができるのですか？」

「できる。」

「どうやって？」

「すでに、その方法は述べた。」

「しかし、あなたの提案する薬は、病気そのものよりも悪いものです。しかも、患者がそれを飲むと仮定するならばですが——私は、その仮定自体を認めません。」

「しかし、もし私が、約束したことを本当に実現できると証明したなら、あなたは、その犠牲を払わないのか？」

「払いません。」

「では、あなたは、世界のことをほとんど気にかけていないのだな！」

「あなたの議論は、ドイツの宣伝家のようです」と私は言った。

「つまり、彼らが、私のように議論しているのだ」と彼は言い直した。

「私は以前から」と私は言った。「彼らが、どんな論理学の学校で教育を受けたのか、不思議に思っていました。」

「それでも、あなたは私の提案を拒むのか？」

「あなたが、そんな提案をする手間をかけることの方が不思議です。」

「あなたと一緒にいられる喜びを与えてくれることを、なぜ手間と呼ぶのだ？」

「私は以前から聞いています」と私は言った。「悪魔は、大変なお世辞屋だと。」

「悪魔は、非常に巧みな気配りをする。」

私たちは立ったまま、お互いを見つめ、お互いを測っていた。彼は、実に興味深い研究対象だった。

「ひとまず」と私は言った。「私たちの目的や理想の違いを脇に置き、ただ二つの精神として話すなら——」

「輝きにおいて等しい二つの精神として」と彼は口をはさんだ。

「二つの精神として話すなら」と私は続けた。「なぜ、あなたは、私を自分の側へ引き入れようとして、私の世界への愛、世界のために自分を犠牲にしようとする気持ちにつけ込んだのですか？」

「ほかに、何につけ込めたというのだ？」

「きっと、私にも何か欠点や、隠れた罪があるはずです。あなたの巧妙な心なら、それを通して私に近づこうと考えたのではありませんか？」

「ああ」と彼は言った。「私は、あなたの隠れた欠点を通してあなたを誘惑しようとするほど愚かではない。なぜなら、あなたは、それらを克服しようと決意しているからだ！ その方法では、あなたを道から

外すことはできない。あなたの歩む道の初心者だけが、自分の欠点を通して容易に打ち負かされる。より大きな魂は、その美德を通して攻撃されるのだ。」

「続きを」と私は言った。「本当に、あなたは私の興味を引きます。」

「世の中では」と彼は続けた。「猫の皮を剥ぐ方法は一つではない、と言われている。同じように、あなたが従っている教師たちのために働く者を取り除く方法も、一つではない。私たちは、悪しき情念、憎しみ、怒り、貪欲、欲望、嫉妬、恐れによって、その働き手を道から逸らすことができないとき、ときには、その人の善い情念、愛、忠誠、自己犠牲によって、その人を弱らせることができるのだ。」

「あなたの率直さに感謝します」と私は言った。「で

は、これで失礼しましょう。」

私は前線に沿って進みながら、自分に向かってこうつぶやいた。

「まことに、蛇は野のどの獣よりも狡猾である。そして、人がそれに立ち向かうには、自分の知恵をすべて必要とするのだ。」

5月1日。

第三十六の手紙

「ルシタニア号」

(この手紙は、ルシタニア号沈没の一時間後、ニュ

一ヨーク時間午前十時三十分、五月七日に書かれた。そして、筆者がそのことを知る九時間前のことであった。)

それでもなお、彼らは私たちに向かって押し寄せてくる——闇と悪の脅かす力が、世界に怒りをぶつけ、殺された者たちの血をむさぼろうとして。

私は、この数日、あなたのところへ行かなかった。時間がなかったからである。私が時間から逃れたと思っていたのか？ まだだ。もし私が時間から逃れていたなら、時間にとらわれている世界に向かって、このように語ることはできないだろう。もし私が空間を完全に超えていたなら、あなたの部屋に私は収まりきらないだろう。

あなたが私を見ていなかったこの六日間、私はヨーロッパ中を、あちらこちらと動き回っていた——

アジアにさえ行っていた。なぜなら、この攻撃は世界規模だからである。

少し前、私はあなたに、私たちが悪の勢力を押し返したと話した。彼らは立て直し、再び前進してきた。以前ほど強くはないが、より絶望的で、より狂気じみている。

彼らは今、アメリカ合衆国を巻き込もうとしている。そして、はるか昔、魔術の儀式によって彼らに血を与えた、あの古く死に絶えた種族の大陸全体をも巻き込もうとしている。その大陸こそ、この長い産みの苦しみが終わったとき、新しい種族が生まれなければならない場所なのだ。

もし私が律動の法則を覚えていたなら、悪の潮流が再び押し返してくること、そして私たちが二度目にそれと戦わなければならないことを知っていただ

ろう。今でさえ、それは再び力を集め、少し弱まりながらも、攻撃を繰り返すかもしれない。

私たちが倒した悪しき存在たちは、倒された。彼らは、しばらくの間、もはや私たちを苦しめることはできない。しかし、倒された者は、なお活動している多くの者たちに比べれば、ほんのわずかである。あなたの思いによって、私たちを助けてほしい。

この数日の間に、私たちの友人たちの多くが、よろめき、疲れ果ててしまった。しかし、あなたはそうならない。

あなたの日に応じて、あなたの力もまた与えられるであろう。ああ、私たちがそのために戦っている世界よ。そして、私たちは最後には、その世界のために、平和と兄弟愛の冠を勝ち取るであろう！

私が以前にも言ったように、世界は今、入門の儀式の苦しみの中にある。水による試練、空気による試練、火による試練——これらすべてを、世界は通り抜けなければならない。そうして初めて、星々の階梯に属する者たちの仲間入りをすることができる。今さら後戻りはできない。そして、世界は失敗してはならない。もし失敗するなら、黄道のサークルの中に、やがて空席ができるだろう。しかし、世界は失敗しない。

私は再び、これらの手紙の初めの方で書いた、あの悪しき存在に出会った。彼は今、その地位の力に酔いしれ、怒り狂って自分を駆り立てている。自分の時が近づく前に、彼は激しく自己を主張しようとしているのだ。

頂点は近づいている。そして、もし私が以前ほど頻繁にあなたのところへ行けなかったら、それは、

私は自分の持ち場を、それほどしばしば離れることができないからである。

決して勇気を失ってはならない。あなたの信仰は、まだ見えていないものの確かな証となるだろう——以前にもそうであったように。

この闇の力との二度目の戦いは、私たちをより強くし、彼らをより弱くするだろう。

私は、あなたに話せない多くのことを知っている。あなたは、それを受け取るには、まだ十分に強くないからである。しかし、これだけは覚えておいてほしい——律動の法則は働いている。それは、あらゆる法則の中の法則である。そして、この嵐のあとには、それにふさわしい静けさが訪れる。この苦悶のあとには、愛の静寂の中での休息が訪れる。憎しみが自らを燃やし尽くしたとき、愛はその道を歩む

ことができる。

憎んではない。ただ、揺るがずに立ち、攻撃に耐えなさい。力を無駄にしてはならない。その力は、やがて必要になる。もし、私たちが、ときどきあなたを、私たちが星気の足を置き、さらに大きく空間へ飛び出すための物質的な土台として用いるなら、あなた自身が世界への奉仕のために身を捧げたこと、そして、その奉仕は受け入れられたのだということをお出しなさい。

今は、報いについて語る時ではない。しかし、正義の法則は、世界の背後にある。

できる限り、苦しみすぎている人たちを励ましなさい。そうすれば、私たちもあなたを励ますだろう。昨夜あなたが見た天使たちは、マスターたちに仕える者たちの護衛である。あなたの日に応じて、あなた

の力もまた与えられるであろう。

私は、苦難と嵐のときに用いるための言葉をあなたに与えよう。内に宿る霊へと心に向け、こう繰り返しなさい。

「その道は喜ばしい道であり、その歩む道は、すべて平和である。」

霊が苦しみ、もがくのは、心や欲望や物質と接しているときだけである。その本来の住まいにおいては、すべてが平和で、穏やかである。嵐があまりにも激しいときには、その住まいへと心に向けなさい。そうすれば、静寂の場所を見いだすだろう。

肉体を手放してはならない。もしあなたが物質とのつながりを緩めるなら、もはや、物質的な土台として用いられることはできない。そして、今の時期に、

完全に星気の世界だけに生きるようになった者たちは、初めのうちは非常に苦しい思いをする。

落ち着き、安定し、確信を持ちなさい。流される砂地ではなく、岩でありなさい。

今のところは、これだけである。

このわずかな執筆の時間は、あなたと同じように、私をも休ませてくれた。そして、私はまた戻ってくる。

5月7日。

第三十七の手紙

ヴェールに包まれた予言

もしあなたが、もう少し驚かされにくく、私の言葉を

書き取ることのできる唯一の状態である受動的な状態から、もっと動揺しにくく、衝撃によって、あなた本来の外界を意識する状態へ押し戻されにくかったなら、私は昨日、ただ災厄をほのめかすだけでなく、ルシタニア号が沈んだことを、はっきりとあなたに伝えることができただろう。

あなたが、自分自身の脳が働き始めた瞬間に、いつも書き取りをやめるのは、まったく正しい。しかし、それによって、私たちは、はっきりした知らせを伝えることに制限を受けるのだということが、あなたにも分かるだろう。

その船が沈んだとき、私たちはその近くにいた。私たちのうち何人かが——私たちが「美しい存在」と呼んでいる者も含めて。

今は、しっかりしていなさい。今、私があなたに与え

る助言は、それだけである。ただし、当分の間、アメリカにとどまるように、ということは別だ。今のイギリスで、あなたができる善は、八月半ばまでには、あなた自身にも分かる、別の何かによって打ち消されてしまうからである。*

驚くべきことに、八月十四日に検証された。——編集者

もし、私が以前、偉大な「思考の存在」がドイツ軍の前線に沿って進み、理解できる者たちに向かって、彼らの大義は失われたのだと告げていた、という手紙を読み返すなら、私は、その結果を見守りなさい、と書いていたことが分かるだろう。その結果とは、この国家による、あらゆる場所での、この絶望的で狂気じみた攻撃なのである。

五月十五日は、重要な日付である。* いや、それ

以上は言わない。

善の力は、決して敗れない。

まもなく、あなたはヨーロッパから、心を乱す知らせを受けるだろう。どんなことが起ころうとも、静かにしていなさい。私たちは、できる限りのことをしてきたし、今もしている。

私の友人であり弟子でもある者のために、あなたがしてくれたことに感謝する。* * * また、あなたには、私たちのためにできる別のこともある。*
* *

あなたには理解できないことが多くある。しかし、私たちには分かっている。入門への道は、誰にとっても厳しい道である。その道を歩もうとする者たちよ、互いに愛し合いなさい。そうすれば、その道は

歩きやすくなる。

5月8日。

ルシタニア号沈没についてのアメリカ合衆国の抗議文書がドイツに受理された日であり、また、イタリアでの示威運動が、その国の参戦を決定づけた日でもある。——編集者

第三十八の手紙 書記への助言

あなたは、世界が今通り抜けつつあるこの危機に

において、世界の悲しみに押し潰されることを自分に許さないなら、私たちにとって、もっと役に立つことができる。

毎日、霊の領域へと上りなさい。物質の世界を超え、星気の世界の欲望を超え、心の低い層を超えて、さらに上へ、さらに上へと、すべての命とすべての知恵の源へと向かいなさい。

このための時間を、毎日いくらか取っておきなさい。以前に用いていたヘブライ語の言葉を使いなさい。そして、あなたが習熟しているヨーガの実践と結びつけて、それを力強く用いなさい。二つの体系を組み合わせることは、力につながる。なぜなら、それによって、自分自身を、一つの民族や一つの時代とあまりにも強く結びつけてしまうという制限を避けられるからである。秘教的な発達、秘教的な力は、あらゆる時代、あらゆる民族のものである。

る。これから到来しようとしている新しい種族の知識は、過去のすべての体系を含み、その中から、それぞれが他よりも優れている特別なものを取り入れるだろう。

今日、私があなたをそこから呼び戻した、あの落ち込みの泥沼へ、再び沈み込んではいならない。死を知るために、千回も死ぬ必要はない。あなたは、世界の悲しみの中へ、もう十分に深く入り込んだように思える。今度は、それに対応する高さへと上りなさい。

もしあなたが、毎日、共感によって死にそうになるのでなければ、あなたの共感は、それほど優しくなくなるわけではない。

あなたの本当の仕事は、戦争のあとに来る。そのとき、世界は兄弟愛の教えに耳を傾けることができ、

また耳を傾けようとするだろう。だから、前もって滅びてしまってはならない——それが、私の助言であり、私を通して語る私の師の助言でもある。

この危機において、教師たちは非常に深刻である。しかし、彼らは地に打ち倒されてはいない。彼らは、嵐のあとには静けさが来ることを知っており、その信頼は失われていない。

ここ数日、あなたが沈み込んでいたあの恐ろしい落ち込みの中で、どうして誰かを助けることができただろうか？ あなたは、他人に助けを求めるべきではなく、私たちにだけ助けを求めるべきである。あなたは、私たちがどこにいるかを知っている。あなたがなすべきことは、あなたが受けてきた確信を受け取っていない人々の、しおれた心と、弱った信頼を、再び元気づけることである。

この手紙は、叱責ではなく、一つの教えである。私は、あなたに、騒乱の上にある利己的な平安の中へ退いて、そこにとどまり、世界を忘れてほしいのではない。私も、世界を忘れてはいない。私は昼も夜も働いている。しかし、ここへ出てくる、戦争に打ちのめされた魂たちに出会ったとき、もし私が一緒に泣いたなら、どんな助けになれるだろうか？ まったく助けにはならないだろう。その代わりに、私は、自分の力によって彼らを強くし、自分の希望によって彼らを励まそうとしている。

私が、あなたの仕事は戦争のあとに始まる、と言うとき、それは、あなたが今、何もできないという意味ではない。まったく逆である。あなたは、両方の世界において、多くのことができる。しかし、もし、あなたがここで見ている傷によって死んでしまうなら、もし、あなた自身が絶望の渦に巻き込まれてしまうなら、どうして他の人々を、その渦から引き上げる

ことができるだろうか？

私は、この戦争が世界の入門であることを、何度繰り返しても足りない。それは、新しく、より明るい世界が、古い世界の灰の中から立ち上がることになるからである——不死鳥のような世界が。そして、私は、あなたにも、その世界とともに立ち上がってほしい。

この苦悶は、永遠には続かない。今、それがあまりにも激しいということは、頂点が近づいていることを意味している。

私が、ここでは、すでに結果は決まっている、とあなたに言ったとき、それは、戦争が一日か二日で終わる、という意味ではなかった。原因と結果を学びなさい。すべてのものが、循環の法則に従って、上昇し、そして下降することを学びなさい。高潮は、再び

海へ引いていく前に、岸辺で力を使い果たさなければならない。

落ち着きなさい。そして、人類の信頼を支えることを使命とする者たちに、信頼を保ちなさい。

あなたが、世界が苦しむ限り、自分も苦しみたい、
と言うとき、あなたは、私たちの弟子として語っている。そして、私たちは、それを別のものにしてほしいとは思わない。しかし、一つ覚えておきなさい。人は、苦しみの中でも強くあることができる。私たちは、あなたに、その体験から逃げてほしいのではない。しかし、その体験に支配され、利用されるのではなく、その体験を支配し、用いてほしいのである。

アメリカについて言えば、私は以前、「今夜、見張りに立っているアメリカ人」がいる、とあなたに話した

ではないか。それは、天国を捨て、自分が死んだその国を見守り、守るためにとどまった、年老いたエイブラハム・リンカーンである。その約束を、安心して信じなさい。

あなたが愛している他の国々も、また見守られている。そして、あなたが愛していない、別の国もまた見守られている。その国が、人類の兄弟愛の群れの中へ戻る道を見失うほど、遠くまでさまよってしまわないように。その国には、自分たちが、国家の仲間から追放される存在になることなく進める限界まで、すでに進みすぎてしまったことを、鋭く感じている魂たちがいる。アメリカにいるドイツ人の中にさえ、それを知っている者たちがいる。もし私が、その何人かの名を挙げたなら、あなたは驚くだろう。

アメリカにいるドイツ人たちが、この最新の海上で

の海賊行為に対するアメリカの拒絶を、はっきりと
感じることは良いことである。彼らに、それを痛い
ほど感じさせなさい。彼らは、他の方法では学ぶこ
とができないのだから。

あなたは、私が、戦後に出版されるこの本を、あな
たの手を通して書かせているとき、私の思いを、あ
なたにだけ与えているのだと思っているのか？ 私
は、あなた以外の人々にも、自分の思いを与えて
いる。

私が、エイブラハム・リンカーンが見張りについてい
る、とあなたに書いてから数日後、ある新聞の風刺
画家が、偉大なリンカーンの亡霊が、ウィルソン大
統領の背後に立っている絵を描いた。あなたは、そ
れが単なる偶然だと思ったのか？ それは、単なる
偶然ではなかった。私は、自分の思いを、そして、
私の背後にいるマスターたちの思いを、あなた以

外の人々の心にも与えている。私は、星気の世界で働く者である。人々の心に影響を与えることは、私に与えられた任務の一つである。私は、必要とされる場所へ、あちらこちらへ行く。しかし、あなたを通して書いたようには、他のどこでも書くことはできなかった。私は試みた。しかし、結果はあまり良くなかった。二つの世界の間立つ、正確な筆記者は珍しい。彼らは、命じる者の思いと、自分自身の心の思い——外界を意識している心と、内面の心——とを区別するよう訓練されなければならない。また、それらと、現世の出来事に口を出したがる、無責任な存在たちの思いとを区別するようにも訓練されなければならない。

なぜ私が、もっと多くの話をしないのか、不思議に思っているのだろうか？ 次に訪れるとき、私はあなたに一つの話をしてよう。

5月11日。

第三十九の手紙

この小さき者たちのひとり

これからあなたに話す物語は、悲しいものである。

しかし、私たちは戦争について書いているのだ。

ルシタニア号が沈んでから三日後のことだった。戦争に荒らされたフランスの平原と丘を離れ、私は、その時に最も必要とされている場所で奉仕するために、海を渡ってこちらへ来ていた。

災害の現場に近づくと、私は、一人の子どもの魂に出会った。その子は、見つけられない何かを探して、あちらこちらを歩き回っていた——十二歳くらいの少女で、その目は、不安と戸惑いに満ちていた。

「何か手伝えるかな？」と私は尋ね、その子の手を取った。すると、その子は落ち着きなく行ったり来たりするのをやめ、私と一緒に立ち止まった。

「お母さんをなくしてしまったの」と彼女は言った。

「お母さんは、どこ？」

「私には分からない」と私は答えた。「でも、一緒に探そう。」

戸惑っている魂にとって、星気の世界で、探している別の魂を見つけることは、いつでも簡単とは限らない。しかし、落ち着いた魂にとっては、とても簡単なこともある。地上と同じように、心が乱れたまま探している相手は、見えない手によって、自分から遠ざけられているように思えるのだ。

その子と一緒に進んでいると、私は、同じように戸惑っている多くの人々に出会った。みな、誰か、あるいは何かを探していた。

「どうして、私たちはここにいるの？」と、その子は尋ねた。「私は、ロンドンへ行く途中だと思っていた

のに。」

「あなたは、自分が溺れて死んだことを知らないのかい？」と私は尋ねた。

「私、本当に、水の中で溺れてしまったの？」

「そうだ。」

「夢だったと思っていた。だって、私は眠っていたから。」

「そうだ、あなたは眠っていた。でも、溺れたことは夢ではなかった。」

「じゃあ、私はどこにいるの？」

「あなたは、あちらの世界にいる。」

「あちらの世界！ でも、あちらの世界って、天国だ
とっていた。」

「天国も、あちらの世界の中にある。」

「まさか、私、悪い場所へ来てしまったってこと？」

「いや、あなたは、一番暗い場所へ来たわけではない」と私は言った。「そして、やがて天国への道を見
つけるだろう。」

「でも、どうして私は溺れたの？ どうして船は沈ん
だの？ あんなにきれいな船だったし、私たちは甲
板で遊んでいて、とても楽しかったのに！」

「あなたが溺れたのは、ドイツがイギリスと戦争をし
ているからだ。」

「でも、どうして私を溺れさせるの？」

「イギリスが海を支配していないことを証明しようとしたからだ。」

「でも、それ、私と何の関係があるの？」

「何の関係もないよ、かわいそうに。あなたには何の関係もない。あなたは、ただ、抵抗することのできない犠牲者なのだ。」

「でも、誰が私たちを溺れさせたの？」

「潜水艦の艦長だ。」

「その人は、とても悪い人なの？」

「善い人がそんなことをするとは、私には想像できない。」

「それで、どうして私はお母さんを見つけられないの？ お母さんも溺れたの？」

「まだ、私には分からない。」

「じゃあ、あなたは何でも知ってるわけじゃないのね？」

「そうだ。私は、何でも知っているわけではない。」

「あなたは天使なの？」

「いや、私は天使ではない。」

「じゃあ、何なの？」

「人間だ。」

「あなたも、溺れて死んだの？」

「いや、私は、三年以上前に、あちらの世界へ来た。」

その子は泣き出した。死んだ子どもは、決して泣かないと思っていたのか？ 死んだ子どもも、よく泣くのである。もし、あなたが目を覚ましたとき、自分が溺れていて、お母さんが見つからなかったなら、あなたも泣くだろう？

私も、その子と一緒に泣くことができただろう。なぜなら、私にも子どもがいた。そして、そのうちの一人は、幼くして死んだからだ。

「私、自分でも気づかないうちに、そんなに悪い子だったのかな。だから、こんなふうに溺れてしまったのかな」と、その少女は尋ねた。

「いや、あなたがそんなに悪い子だったとは、私は思わない。」

荒れた海の上を進んでいると、青白い光の中で、一人の女の人の死体が、顔を上に向けて浮かんでいるのが見えた。その子にも、それはぼんやりと見えていた。私ほどははっきりではなかったが。

あなたは、生きている子どもが、自分の母親の魂のない死体の上で泣いているのを見たことがあるだろうか？ もし、それが悲しいことに思えるなら、母親の魂がいないまま、その母親の死体のそばで、生きている子どもの魂が泣いているのを見ることは、もっと悲しく思えないだろうか？ 私にとって、

それは、あらゆる悲しい光景の中で、最も哀れなものだった。

「おいで、小さな子」と私は言った。「あなたのお母さんは、ここにはいない。」

もう少し進むと、また、青白い光の中で、一人の子どもの体が、顔を上に向けて浮かんでいるのが見えた。私は、それが誰の体か分かっていて。そして、その子にも分かっていて。

「まあ、もう、きれいじゃないのね！」と彼女は言った。

「おいで、小さな子」と私はもう一度言った。「さあ、お母さんを探しに行こう。」

しかし、彼女は、水の中に浮かんでいるそのものの

近くから、動けないようだった。そう、それは、もうきれいではなかった。しかし、私のそばにいる魂は、その悲しさにもかかわらず、とても美しかった。

「これ、どうなってしまうの？」と彼女は、おびえたように尋ねた。

「私には分からない。」

「誰かが、それをどこかに埋めてくれると思う？」

「もし見つければ、埋めてくれるだろう。」

「その場所を教えてあげることにはできないの？」

「その人たちを探して待っていたら、お母さんを見つけれなくなるかもしれない。」

私たちは、水の上をあちらこちらと行き来している
たくさんの女たちに出会った。子どもを探している
母親たち、夫を探している妻たち、自分の失われた
肉体を探している者たち、ただ戸惑いと悲しみの中
で行ったり来たりしている者たちもいた。

「死ぬのって、とても悲しいのね」と、その子は言っ
た。

「死ぬことが、いつも悲しいとは限らない」と私は答
えた。「死ぬことが、とても美しいこともある。」

「私たちを溺れさせた人は、どこにいるの？」

「どうして？ 会いたいのかい？」

「私が、その人に見えるようになってほしいの。」

「その人は、一生のあいだ夢の中で、あなたを見ることになるだろう」と私は言った。「年老いるまで生きようと、明日死のうと。」

海の向こうから、一人の女の姿が、霧のような手をもみながら、こちらへ向かって来た。

「私の子どもはどこ？ 私の子どもはどこ？」と、その女は何度も何度も言っていた。

「お母さん、私はここよ！」と少女は叫び、二つの姿は、固く抱き合いながら溶け合った。

「見つけた！ 見つけたわ！」と、母と子は、抱き合ったまま、何度も何度も繰り返した。

私は、しばらくそのそばにいた。二人が、自分たちの運命の悲しみから少しでも自由になれるように

助けたかったからである。

「私と一緒に来ませんか？」と、二人が話を聞けるようになったとき、私は尋ねた。

「でも、どこへ行けばいいの？」

「ここから離れた場所へ。」

「家に帰りたい」と、その子は言った。

「私たちは、もう家を失ってしまったの」と母親は答えた。「私たちは、あちらの世界にいるのよ。」

「では、あなたも何が起こったのか知っているのですね？」と私は彼女に尋ねた。

「ああ、ええ、知っています。知っていますとも！」

「私と一緒に来ませんか？」と私はもう一度言った。

「あなたは天使なのですか？」と母親は尋ねた。ちょうど、さっきその子が尋ねたように。

私は、自分が誰であり、ここで何をしているのかを彼女に話した。

「私たちに、助けはないのですか？」と彼女は尋ねた。

「あなたたちを助けるために、私は来たのです。」

「でも、どこへ行けばいいのですか？」

「どこでもいい、ここから離れた場所へ。」

私たちが立って話していると、また別の女が、失われた子どもを探しながら、こちらへやって来た。そしてまた別の子ども——その女の子どもではない——が、失われた母親を探しながら、こちらへやって来た。

正直に言おう。私は、このように打ちのめされた魂たちを、どうしたらよいのか、よく分からなかった。どこへ連れて行けば、休息や慰めを与えられるのだろう？ 地球の周囲の星気の領域全体が、悲しみと泣き声で満ちている。最も強く、最も意志の強い魂だけが、その暗さと恐ろしさから逃れるほど遠くまで行くことができる。そして、今来ただばかりの者たちには、その力がない。なぜなら、この世界では、私たちは自分の望みや考えが向かうところへ行き、また、自分の恐れや悲しみとともに進むのだから。

私は、その母と子を、世界の別の場所へ連れて行

き、この悲しい仕事に身を捧げている二人の年長の魂に託した。しかし、子どもに微分積分を教えることができないように、私たちも、心に平安のない者たちを、平安に満ちた高い領域へ連れて行くことはできないのである。

私は、この恐ろしい状況について、どこまで世の人々に話すべきか、教師に助言を求めようと思う。

たとえ地上に平和が戻ったとしても、それだけでは、星気の世界から戦争の傷跡がすぐに消えることはない。あなたたちは、自分たちが苦しんでいると思っている——そして、あなたたちがどれほど苦しんでいるかを、私ほどよく知っている者はいない。しかし、あなたたちは物質の世界へ逃れることができる。日差しの中、緑の丘を歩くこともできる。時には、星気の争いと物質の争いを超えた、霊的な静けさの場所へ昇ることもできる。しかし、この何

百万もの悲しむ者たちは、もはや肉体の世界へ戻ることはできず、そのうち霊的な高さへ昇ることのできる者も、まだほとんどいない。彼らの近い未来は、最も偉大なマスター達にとってさえ問題であり、その問題は、知恵のマスター達の知恵をも試すのである。

しっかりしていてほしい。あなたには、遠くないうちに、また別の不安の日が訪れる。しっかりしていてほしい。なぜなら、あなたには気づかれないかもしれないが、あなたが力を求めている私も、また、あなたから力を得ているからである。それは、私がいつか説明するかもしれないし、しないかもしれない、不思議なことである。あなたは、私が物質的な基盤の力を必要とするときに、そこから飛び立つことのできる、しっかりした足場なのだ。私は、それを使い過ぎることはしない。

もし、今のように一人でいて、この重圧に耐えられなくなったなら、私の息子と交信してもよい。しかし、それは本当に最後の手段としてにしてほしい。あなたは、一人で立つことを学ばなければならない。

以前の私の書き物のときには、あなたにかかる負担は、ずっと少なかった。あなたへの要求も、あなたの力を必要とする度合いも、ずっと少なかった。あの頃のあなたには、今していることはできなかったし、あの頃の私にも、今していることはできなかった。

もう一度言う。しっかりしてほしい。

夜ごとにあなたが目にする傷、苦痛に歪んだ顔、あなたが応えようとしている哀れな助けを求める声——それらは、私たちが毎夜、毎日、毎時間、見て

助けようとしているものの、ほんの一例に過ぎない。

私は、あなたのエーテル体の実際の物質を使って、自分のための光学器具を作った。それによって、私は日光に照らされた世界——あなたたちの世界——を見ることができる。そのためにあなたが私に貸してくれたことで、長い目で見れば、あなたが傷つくことはない。あなたは、人類への奉仕に自分を捧げたのではなかったか？ 人類は、そちらにいただけでなく、こちらにもいる。そして、あなたの物質から作ったその目によって、私は、そうでなければできなかった奉仕をすることができたのである。

それも、あなたの良いカルマの一つとして数えなさい。

5 月 13 日。

第四十の手紙

高みと深み

世界の未来への信頼を失ってはならない。

あなたは「律動の法則」を学ばなかったのか？ 高みは深みに等しく、物事が最悪になっている時こそ、良くなる準備が始まっているのだということを、知らないのか？

この二十世紀という時代には、生命は急速に動いている。千年前であれば、過去十か月間の恐怖を成し遂げるのに十年はかかっただろう。おそらく、再建も同じように急速に進むだろう。

世界の未来への信頼を失ってはならない。

ルシタニア号の沈没を非難しているドイツ人たちさえいるのだ！ あの帝国の中では、帝国自身の立場から見ても、すべてがうまくいっているわけではない。

落ち着いて、結果を待ちなさい。

5月14日。

第四十一の手紙

マスター達の会議

いつの日か、人類の諸民族は、今は忘れてしまって

いる愛へと戻るだろう。

いつの日か、ドイツ人とイギリス人、イタリア人とオーストリア人、フランス人とトルコ人は、皆そろって人生の宴の食卓につき、互いの死にではなく、互いの健康に乾杯するようになるだろう。

そして、その日は、今の憎しみと殺戮が示しているほど遠くにはない。

争いの後には平和があり、憎しみの後には愛があり、嵐の後には陽光がある。

愛と憎しみ！ 一方を知るためには、もう一方を見ていなければならない。きっと私は、あなたにそのことを説明する必要はないだろう！ あなたは、自分が憎まれるまでは、愛について何を知っていたというのか？

愛と憎しみは、感情から生まれた双子の子どもである。

いつの日か、人間は自分の敵を、自分自身の内に探すようになる。いつの日か、人間は自分の内にある悪と戦うようになり、その時には、もはや兄弟を殺す必要はなくなる。いつの日か、愛は再び世界の玉座に戻り、憎しみは闇の中へと帰って行くだろう。

私は、この戦争を引き起こした邪悪な存在たちについて、あなたに語った。また、兄弟同士の戦争をなくしたいと願っている、愛に満ちた存在たちもいるのである。

今夜、世界の上空には、不思議な静けさがある。それは嵐の前の静けさなのか、それとも嵐の後の静

けさなのか？ すべては律動の中にある。落ち着いて待ちなさい。そして、神を信頼しなさい。

嵐の中には、空気を澄ませるものがある。今の雷と稲妻は、空気を澄ませるだろう。そうだ、世界はあまりにも長いあいだ重苦しく、よどんでいた。そして、その空気は破られなければならなかったのだ。

叫んではならない。泣いてはならない。笑ってもならない。ただ静かにして、神を信頼しなさい。

私が神と言う時、何を意味しているのか？ あなたの心の奥深くを見つめ、「我は我なり」を見出しなさい。

世界が幼かった頃、人間は、自分を越えた力を信じていた。今、世界が成熟した時代には、人間は、自分の内にあり、同時に自分を越えてもいる力を

信じる。それが神である。「我は我なり」である！

霊の高い場所を求め、世界への奉仕のために自分を整えなさい。霊は、世界という十字架の上で磔にされている。キリストは、それを引き上げるために、物質という衣をまとっている。愛は、憎しみの衣を着る。愛と憎しみが、一つになるためである。

私が何を意味しているか分かるか？ 愛と憎しみは、一つのものであることを、あなたは知らないのか——互いを完成させる、永遠の反対の力なのだ。

憎しみが休む時、愛がその本来の位置を取り戻す。愛が休んでいた時、憎しみがその本来の位置を取った。今夜、憎しみと愛は結びつく。できるなら、私の意味を理解しなさい。幻の鏡をのぞき込み、その中にある光景を見つけなさい。

愛と憎しみが結びつくこと！ そこには、二つが手を取り合う、中立の一点がある。

今夜、世界に奉仕する者たちの間で、一つの会議が開かれている——マスター達の会議である。何時にか、とあなたは尋ねる。眠りなさい。そして、その時刻を知りなさい。十分に静かでいられるなら、鍵穴から聞くことができるだろう。十分に静かでなければ、何も聞こえないだろう。

今夜の私の書き方は、奇妙に思えるか？ もし、奇妙という言葉で、いつもとは違うという意味を言うのなら、今夜はすべてが奇妙なのである。

静かにしなさい。そして、神がすべての人の心の中に住んでいることを知りなさい。たとえ、ある人々の中では、その神が眠っているとしても。なぜなら、

あなたの中の神も、あなたが目覚めさせるまでは眠っているからである。

「わたしの戒めはこれである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

あなたを打つ敵をも愛しなさい。なぜなら、憎しみをもって打つ者の中では、神が眠っているからである。

敵を憎んでいるかぎり、あなたは決して敵を理解することはできない。あなたの中の愛と憎しみが一つになるまでは、あなたは決してマスター達を理解することはできない。

平和が宣言された時、あなたの愛は再び敵へと流れ出すだろう。ならば、その時を先取りして、今夜、

敵を愛することはできないのか？ 敵は、最も愛を示さない時にこそ、愛を必要としている。静かにしなさい。そして、世界は霊の足台であることを知りなさい。

憎しみは、あなたの役には立たない。憎しみは、自ら進んで奉仕することは決してない。神なる人の言葉を思い出しなさい。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのか、分かっていないのです。」

さあ、今は眠りなさい。そして、マスター達の会議室の鍵穴に耳を当てなさい。あなたは、世界には話すことのできない何かを聞くかもしれない。

5月14日。

第四十二の手紙

カバラの教え

昨夜あなたが幻の中で見たもの——地上の諸民

族が、カバラの「生命の樹」のセフィロトとして現れていたこと——を、もう一度あなたに語ろうか？

あなたは、私よりもカバラについて多くを知っている。しかし、教師によって示されなければ、諸国民がカバラのどの対応に当たるかを、あなたが知ることとは決してなかっただろう。

確かに、ドイツ(ゲブラー、火星、峻巖、パハド)は、あまりにも極端に峻巖で、あまりにも火星的になってしまい、そのために生命の樹全体の均衡が脅かされている。均衡は崩れてしまっている。そして、あるイエツィラー界の小径によって示されるアメリカ合衆国の強さと、大英帝国を表す別のセフィラに対するアメリカ合衆国の慎重さによって、イギリスとドイツの間に、再び正義が確立されるかもしれない。

教師は、私にカバラを教えてくれている。

また、あなたはその幻によって、世界の未来においてアメリカ合衆国が果たさねばならない役割——すなわち、ケセド、慈悲——を見ることができる。それこそが第六人種の基調なのである。そしてドイツは、血と鉄によって、その第六人種を自分自身の中に打ち立てようとしたのだ！ 何という愚かさ、何という先の見えなさだろう！

あなたが見た生命の樹の幻の中で、他の民族がどこにいたのかを、世の人々に語る必要はない。ただし、「三つの至高のセフィラ」は、この物質の世界に存在する民族によって表されてはいない、ということだけは話してよい。それだけは、私の権威によって語ってよい。そうしなければ、ドイツのカバラ学者の中には、ゲルマン民族がケテルの位置にあると主張する者が現れるかもしれないからだ。いや、三つの至高のセフィラは、物質の世界には現れていな

い。

アメリカが正しく導かれるように、見守り、祈りなさい。これまでのところ、アメリカは正しく導かれてきた。あの静観の日々の間、Abraham Lincoln の偉大な魂は、Woodrow Wilson 大統領と共にあった。私は以前、彼が、自ら命を捧げた祖国が、その大いなる試練の日を迎える時に見守るため、自分の休息を捨てたのだと、あなたに語らなかっただろうか。

私は、日ごとに、自分の判断が許す範囲でしか、これ以上は語らない。

あなたが、あの幻の高さにまで昇ることができたのは、よいことだった。そうでなければ、あなたはあまりにも戦いを好むようになっていたかもしれないからである。

今は、大統領の手が支えられ、その魂が、アメリカ最大の息子である、Abraham Lincoln の生きた魂によって強められるよう、祈りなさい。

未来は、神々の膝の上にある。

5 月 15 日。

第四十三の手紙
再臨

この戦争によって、肉体の傷、あるいは魂の傷を受

けた人々には、キリスト教世界のキリストが背を向けて去ってしまったように思われることがあった。おそらく、どこか別の星へ行ってしまう、そこでこそ、その教えが理解され、その愛の法が、人々の人生と心に本当の力を持つのだ、と。

しかし、人々にどう生きるべきかを教えるために死んだキリストは、この試練の時に、世界を見捨ててはいない。

キリストは、愛と憐れみの、あの同じキリストである。そして、その代わりに、憎しみと容赦のないキリストを据えようとする者は、その聖なる名を冒瀆しているのであり、いつの日か、その冒瀆に対する恐るべき代償を払うことになるだろう。

私は、かつてガリラヤを歩いたキリストを、face to face で見た。あなた方、死んだ時にキリストを

見ることを望んでいるキリスト教徒よ、驚くのか？
どうして私が、キリストに会ってはいけないのか？
私は、生きている間も、死んでからも、奉仕してきたのではないか？ 今も、自分の持てる限りの力で、奉仕しているのではないか？ そうだ、私はキリストを見たのである。

「力と大いなる栄光をもって、天の雲に乗って」再び来るキリストを待ちなさい。たとえ、もはや物質の肉体をまとして地上を歩かないとしても。今さら、キリストが死すべき肉体を持って地上を歩く必要が、どこにあるだろう？ ますます多くの男と女が、霊的な視力を開きつつあり、肉体という衣をまとったままで、キリストを見ることができるようになっているのだから。

私は以前、戦場に現れる「美しい存在」について語った。そして今、私は戦場に現れるキリストについ

て語りたい。

あの光の子は、決して痛みを恐れなかった。人々の縮こまった魂に、苦しみの道を示した者だからである。キリストの十字架は、生きている。そして、その力は、血の洗礼を受けた後、疲れ切った世界が立ち直るにつれて、ますます強く感じられるようになるだろう。

半神たちが去る時、神々がやって来る。半神であり、戦争の神である火星が、その場所へ押し戻される時、愛と憐れみの神は、人々の心の中に、その姿を現すことができる。

キリスト教の信仰に、命の再生が訪れることを望む人々は賢い。その信仰は、古くなり、無関心になっていた。自分は救われたと思い込み、世界を救うことを忘れていた。自分は安全だと思い込み、その安

心を、戦争の神である火星に突き崩されたのである。

苦しみの最後の時に、キリストを見た魂は数多い。フランスで、ベルギーで、ポーランドで、そして戦争に揺れる海の上で、多くの魂が、「兄弟よりも近くにいる友」を認めた。

多くの母親が、本当の幻の中で、死にゆく自分の息子を、キリストが抱き上げているのを見た。カトリックも、プロテスタントも、「自由思想家」も、皆、自分の息子が最後の恐ろしい瞬間と、その先を越えて行けるように、マリアの子に慰めを求めた。

昨日、ベルギーの叫びに満ちた地獄の中で、私は、一人の兵士——ごく普通の兵士——が、死からまっすぐに、星気の混乱すら超えた高い場所へ行くのを見た。なぜなら、死ぬ時に、その兵士は、母の

信じていたキリストに、自分を争いから連れ去り、世界の上にある平和の天へ連れて行ってくれるよう呼びかけたからである。この火の試練が始まって以来、多くの者が、その道をたどって行った。しかし、もっと多くの者は、下に留まっている。大いなる飛翔をするほどの信仰を持っている者は、わずかしいかない。

あなたがどのような宗教とともに働くにしても、その中にキリストと、キリストの十字架を含めなさい！
今という時に、自分の苦しみと、世界全体の恐るべき苦しみを感じている魂にとって、ほかにどんな慰めがあるだろう？ 哲学はよい。私も、自分を哲学者と呼んできた。しかし、愛こそが哲学の最も高い到達点であり、キリストこそが愛の最も高い到達点なのである。

人々は、新しい宗教について語る。まるで、キリスト

の愛が、古びて擦り切れた愛であるかのように。しかし、キリストの愛は、魂が一瞬の光明の中で、自分の心にあるその神秘を見た時마다、再び生まれるのである。

あなた自身の心の中にいるキリストを礼拝しなさい。キリストは、そこにいる。あなたの友の心の中にいるキリストを礼拝しなさい。キリストは、そこにいる。あなたの敵の心の中にいるキリストを礼拝しなさい。キリストは、そこにもいる。そうしたうえで、もしできるなら、その相手を殺してみなさい。自分が誰を殺そうとしているのかを知ってから。

兵士たちの心の中には、新しい霊が入って来ている。彼らは戦い続けている。しかし、夢の中で、自分たちは兄弟と戦っているのだと告げられている。

公海上の殺人者たち、鷲の旗の下の海賊たち——

彼らもまた、あなたの兄弟である。「彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのか分かっていないのです。」あなたは、彼らに勝たなければならない。だから、打ち負かしなさい。しかし、彼らも兄弟であることを、忘れてはならない。

戦場の上に漂っているキリストは、どの国の旗も持っていない。キリストは、すべてを愛しているからである。鷲の旗の下の海賊たちも、公海上の殺人者たちも。だから、キリストは、最初の中立者なのである。ゴルゴタのローマ兵たちも、キリストに呪われはしなかった。

キリストは、自ら肉体の制限を受け入れた時、その制限を超えることによって、その制限を理解した。私たちは、どんな制限であれ、それを超えない限り、本当に理解することはできない。

引き裂かれた肉、砕かれた骨、傷ついた神経の苦しみを、キリスト以上によく知っている者がいるだろうか？ 負傷した兵士たちが、キリストに何かを教えることができるだろうか？ 裏切られた世界が、そのユダとどう決着をつけるべきかについて、キリストに助言できるだろうか？ 「あなたのしていることを、早くしなさい。」

世界を裏切った者は、すでに、その熱狂のあまり、自分自身を吊るしてしまっている。ローマで、その者の人形が焼かれた時、その火を感じなかったなどと思ってはならない。彼は感じたのである。最高の戦争指導者は、一瞬だけ正気を持った。昨日、私は、その者の悪魔が、戦線に沿って唸りながら進んで行くのを見た。何か月も前、初めて私が出会った時には、まだ唸ってはいなかった。

もし私が、自分が空想ではなく事実を語っている

のだということを、あなたに理解させることができたなら！ 私は、自分が描写しているものを、あなたが目の前の机や、手にしている鉛筆を見るのと同じくらい、はっきりと見たのである。私が、「悪魔たちと話した」と言う時、それは、本当に悪魔たちと話したという意味である。私が、「キリストを見た」と言う時、それは、本当にキリストを見たという意味である。私は物語を作っているのではない。また、星々の間を旅して戻って来て、作り話をする者たちと競おうとしているのでもない。私は、そうでなければ明らかにされないことを明らかにするために書いている。世界が結果によって道を誤らないように、その原因を示すために書いている。私は、今や、その同盟者であるトルコ人を含め、あらゆる民族から呪われているその民族でさえ、助けたいのである。

キリストの慈愛だけが、この世界への裏切りを覆うほど広大である。そして私は言う。裏切った者たち

は、文明の時計を逆戻りさせようとする最後の努力の中で、悪の人格的な力に煽られ、鼓舞され、そして彼ら自身もまた裏切られたのだ。

しかし、キリストは悪霊を追い出し、死者をよみがえらせた。ならば、戦争の目的の背後にいる、これらの悪霊たちを追い出すことはできないだろうか？ 最後には、死者たちを平和の領域へ引き上げることはできないだろうか？ あなたを、キリストの慈愛の高さにまで引き上げることはできないだろうか？

第四十四の手紙

毒ガス

今夜は、慈愛について、あなたに長々と語るつもり

はない。その代わり、東風と毒ガス、そして毒ガスに乗って来る悪魔たちについて話そう。

再び、地獄のすべてが世界に解き放たれている。こちらでは、戦争前の一か月間よりも、さらにひどい。

十一日間、私はあなたのもとへ来られなかった。十一日もの間、私は、あなたと一時間を過ごす時間すら持てなかった。

もしあなたが、私が話せることを聞くのに十分な強さを持っていたなら、あなたは決してそれを世の中に公表しないだろう。しかし、あなたが聞くに耐えられること、そして世界が知るに値することなら、私は多くを語ることができる。

東風と毒ガス！ その考えそのものが、まさに地獄

的に思える。なぜなら、人間らしい手段で戦争をしている理性的な人々の陣地に向かって、ドイツ軍の陣地から東風に乗って運ばれて来るガスによって、人々は言葉では表せない苦しみのうちに死んでいくからである。しかし、毒ガスは悪魔的なものであり、悪魔たちはその上に乗って来る。

私は、それらが群れをなして、こちらへ押し寄せて来るのを見た。その目は憎しみに燃え、その口は、悪意と勝利の喜びによって恐ろしくゆがんでいた。

ああ、まだ自分の祖国で安全に暮らしているあなたよ！ もしあなたが、敵の塹壕の向こう側を見ることができたなら、もしあなたが、敵の陣地の上の空気の中に何が潜んでいるのかを見ることができたなら、あなたは敵にさえ憐れみを抱くだろう。私は、あちらには完全に正気を失っている者たちが多くいると、あなたに言うことができる。

人間が、憎しみの力を呼び出し、そのような地獄の煙を送り出して、同じ人間を窒息させ、苦しめる時、その人間たちは、もはや完全には人間ではなくなっている。

彼らの魂を見ている私は、恐怖で吐き気を覚える。おそらく、今あなたが一人でいることは、よいことなのだろう。なぜなら、私は、あなたが一人でいる時にこそ、最も耐えられるようなことを、あなたに話せるからである。

もし、あなたが将来しなければならない仕事が無かったなら、もし、この仕事と、その後続く仕事が無かったなら、私は、この人生に関するかぎり、あなたを世界から遠く離れた場所へ連れて行ってしまおうだろう。＊ ＊ ＊

しかし、あなたは最後まで耐えなければならない。
私も最後まで耐えるように。なぜなら、あなたには、
しなければならない仕事があるからである。

ドイツでは、すべてがうまくいっていると言う者たち
は、真っ赤な嘘をついている。あるいは、ドイツを、
「自分たちは勝てる」と信じ込ませている嘘によっ
て、催眠にかけているのである。

もし地獄が天国に勝つことができるなら、すべての
魂は滅ぼされるだろう。もし今、憎しみが勝つなら、
世界はばらばらに砕かれてしまうだろう。

憎しみ！ あなたは、その言葉の意味を知らない。
イギリスへの憎しみ、アメリカへの憎しみ、イタリア
への憎しみ！ この戦争を引き起こした民族は、そ
の最後の分子に至るまで、憎しみに毒されている。
赤ん坊は、母乳とともにそれを飲み込み、その胃は

酸っぱくなる。子どもたちは、親の目の中にそれを見て、自分の生まれた源そのものを恐れて身をすくませる。いや、あなたは憎しみの意味を知らない。

東風に乗って運ばれて来た毒ガスの上に、一匹の目のない悪魔が、私のもとへやって来た。そいつは、どこから来たのだろうか？ 光が全くなく、それゆえ目を必要としない、地下の地獄のどこかからである。もし私に絵を描く力があつたなら、あなたにそれを見せることができるだろう。しかし、言葉というものは、人類が経験したことのあるものを表すために作られたのであって、そのようなものを見た者は、まだ誰も、それを描写するための言葉を持っていない。手探りしながら、その星気の怪物は、一人の人間に取りついた——フランス軍に捕らえられていた捕虜であり、憎しみに狂って、自分を監視している者たちに唾を吐きかけていた男だった。

いや、その後に何が起こったかは、あなたに話してはならない。しかし、その捕虜の星気の魂は、肉体から出てしまい、そのまま戻らなかった。

私が今知っていることを世界に伝えようとする試みは、一セントの笛でベートーヴェンを演奏しようとするようなものだ。私は、まるで、数学者が、小さな子どもたちに足し算を教えようとして座っている時のような気持ちになる。私は、今以上のことを、あなたに語る勇気がない。なぜなら、あなたには、それを受け止めることができないからである。

世界は古く、世界は自分を賢いと思っていた。そして、その世界は、こんなところまで来てしまったのだ！

星気の世界での体験を望む真面目な魂は多い。私

は、あなたの前で、ある人が「それは、ただ星気のことにすぎない」と言うのを聞いた。私は聞いていたが、何も言わなかった。

あなたたちは、星気の世界について知りたいと願っている。しかし、星気の世界が何であるかを知っているのか？ 星気の世界とは、感情の世界であり、情念の世界であり、愛と憎しみの世界である。今の星気の世界は、悪しき情念であまりにも濃く満ちていて、まるでナイフで切れるほどである。そして今、その世界は、実際にナイフや銃剣によって切られており、押し合いへし合いしている悪魔たちは、その鋼鉄に触れることで苦しんでいる。

「ただ星気のことにすぎない」だって！ あなたが、その恐ろしさを知っているニューヨーク上空の星気の世界でさえ、あの戦場の上空の星気の世界に比べれば、何でもない。近づいてはならない！ あな

たには、あそこでは何の助けもできない。できるなら、山の中へ行き、松の木の清らかな息吹の中で、ニューヨーク上空の星気の世界の毒から、ヒーリングを求めなさい。そして、その圧迫が終わるまで、そこに留まりなさい。あなたは、今いる場所でも、何の助けもできないのだから。

私は、松林の澄んだ空気の中では、もっと上手に書くことができる。中立ではなくなったニューヨークの毒の煙から離れなさい。なぜなら、悪魔たちは憎しみの風に乗って来るのであり、あなたは、それによって滅ぼされてはならないからである。

あなたには、将来、しなければならない仕事がある。

5月27日。

第四十五の手紙

超人

昨夜、私は星気の世界の上層の一つ——純粋な

精神の領域ではないが、その近くの領域で——頭を垂れ、物思いに沈みながら、行ったり来たりしている一人の男に出会った。

「何に悩んでいるのです、友よ？」と、私は彼の前に立って尋ねた。

彼は落ち着かない足取りを止め、私を見つめた。

「あなたは誰ですか？」と、彼は無気力そうに尋ねた。

「私は裁判官です」と私は答えた。

彼の目は、興味を帯びて輝いた。

「きっと、あなたは私の思いに呼ばれて来たのだ」と彼は言った。「私は裁判官を必要としているので

す。」

「誰について、私に裁きを下してほしいのですか？」と、私は彼の奇妙な言葉に半ば微笑みながら尋ねた。

「私について裁いてほしいのです。」

「そして、あなたの罪とは？」

「私の罪——もし、それが罪であるなら、そして、それについては、あなたが判断してくださるのですが——は、一つの民族を破滅へ導いたことです。」

「初めから悪意を持って？」と私は尋ねた。

「悪意は、たぶんありました」と彼は答えた。「しかし、あなたの言う意味ではありません。私は、彼ら

に、私を信じるだけの精神があるとは思っていなかったのです。」

「あなたは私の好奇心をそそります」と私は言った。
「『彼ら』とは誰です？ そして、彼らは、あなたの何を信じたのですか？」

「彼らとはドイツ人です」と彼は答えた。「私が軽蔑していたドイツ人です。そして彼らは、人間は、自分の望むことを行うことによって至高の存在になる、という私の理論を信じたのです。」

「そして、遅れた者は悪魔に食われろ、と？」

「そうです。そして、遅れた者は悪魔に食われろ、です。」

彼は、暗い目を私に向けた。私は、彼の言葉を待つ

た。

「何という民族だ、あのドイツ人たちは！」と彼は言った。「彼らは、何をするにも、あまりに徹底しすぎる。あんな人々には、大きな真理を任せることはできない。」

「どうやら、彼らは、あなたの思想を徹底しすぎて、地面にめり込ませてしまったようですね」と私は答えた。

「私は、彼らを神にしようとしたのです」と彼は嘆いた。「しかし、私は彼らを悪魔にしてしまった。」

「神を神にできるのは、神だけです」と私は言った。「おそらく、あなたは、あまりに野心的すぎたのです。」

「ふん！ おそらく、私は、人を信じすぎたのです。」

「ヘルメス主義のほうが安全です」と私は言った。

「あなたは、彼らに、あまりに多くを語りすぎた。」

「あるいは、あまりに少なすぎたのかもしれませんが。」

「全部で何巻だったのです？」

「図書館員に聞いてください。外国の図書館員ではなく——あちらの者たちは、私の著作を、売りやすい分量にまとめて製本しているから。」

「それで、私は、あなたをどう助ければよいのですか？」と私は尋ねた。

「私を裁いてください。」

「あなた自身が、検察官にも弁護人にもなりながら？」

「私を訴えるにも、弁護するにも、私以外にふさわしい者がいるのでしょうか？」

「では、訴追を続けなさい。」

「私は、一つの民族全体を墮落させ、破滅へ導いたのです。」

「その罪状を詳しく。」

「私は、彼らの意気地のなさを治そうと思った。そして、彼らは、私に従って、持ち前の徹底ぶりで、完全に背骨だけの存在になってしまった。彼らには、心も、はらわたもない。」

「続けてください」と私は言った。

「私は、人間を超えた存在を説いた。彼らは、人間以下のことを実行したのです。」

「今のところ」と私は口をはさんだ。「あなたは、自分自身ではなく、彼らを訴えている。」

「彼らを責めずに、どうやって自分を責められるのです？」と彼は言った。

「それなら、私は裁判官席を降りましょう」と私は言った。「そして、人間として、あなたと話しましょう。」

「魂と魂として、とは言わなかったのですね。」

「ああ、人間で十分ですよ！ 前にも言ったように、

あなたは、あまりに野心的すぎた。」

「そう、私は、人間に対して野心的すぎた。人間にうんざりしていた。そして、人間がなり得るものを、あまりにも愛しすぎていた！」

「私たちは、もうすでに、弁護の段階に入っていますね」と私は言った。

「あなたには、まだ法廷の匂いが残っている」と彼は不機嫌そうに言った。

「あなたが、私に裁判官になれと言ったのです。」

「そうでした。それは本当です。」

「私は、あなたを気の毒に思います」と私は言った。

彼は、悲しげで、しかも相手を見抜くような微笑みを浮かべた。

「あなたには、心も、はらわたも、あるようですね」と彼は言った。

「そして、あなたは、長く一人でいすぎたのです」と私は答えた。「あなたは、言葉の力を失ってしまった。私が、あなたを訴え、弁護し、裁きましょうか？あなたは、好きな時に、いつでも口をはさんでよい。」

「続けてください」と彼は承知した。

「あなたは、落ち着きのない星のもとに生まれた」と、私は語り始めた。「あなたは英雄たちに従った。しかし、彼らが人間にすぎなかったことで、失望した。そして、次には、自分自身を英雄にした。しか

し、それが、あなたを最も失望させたのである。」

「あなたは、私のことをすべて知っているようですね。」

「それが、あなたの偉大さの栄光であり、同時に恥でもある。人は、あなたのことをすべて知っているのです。」

「私は否定します！ あなたは、私のことをすべて知っているわけではない。」

「では、私たちは、何を知らないのですか？」

「あなたたちは、私がどれほど人間を愛していたかを知らない！」

「あなたは、人間について軽蔑をこめて語ってい

た。」

「人間が、“超人”へと高まるためです。」

「なるほど！　そして、その結果が、ルシタニア号の子どもたちを溺れさせ、ベルギーを切り裂き、すべての友を敵に変え、地球の呪いとなることだったのですね！」

彼は、人を制するように指を上げた。

「あなたは、ドイツ人について話しているのです」と彼は言った。

「彼らだけが、あなたの哲学を、その論理的な結末まで押し進めたのです。」

「それを、あなたは私への嘲りにするのですか？」

「私は、あなたを嘲っているのではない。事実を述べているのです。彼らを嘲り、彼らを破滅へ導いたのは、あなた自身です。」

「私は、ただ“超人”を説いただけです。」

「人間をあまりにも超えた存在を説いたので、人間には、あなたの言うことが理解できなかったのです。」

「それが私の罪なのですか？」

「ほかに誰の罪だというのです？」

「彼らの罪ではないのですか？」

「すべてが彼らの罪というわけではない。あなた

は、あまりにも強く憎みすぎた。あなたは、彼らに、人間を憎むことを教えたのです。」

「私は、“超人”でないものを憎めと教えたのです。」

「しかし、人間は“超人”ではない。だから、あなたは、彼らに人間を憎むことを教えたのです。」

「だが、彼ら自身も、“超人”ではない！」

「彼らは、“超人”になろうとしている。そうなることを教えたのは、あなたです。彼らは、自分たちは“超人”であり、善悪を超えていると信じた。あなたは、赤ん坊や乳飲み子に化学を教え、その結果、彼らは世界の子ども部屋を吹き飛ばしてしまったのです。」

「私は、ただ彼らに教えたかっただけなのです。」

「あなたは、まず、いろはから始めるべきだった。」

「では、“超人”の、いろはとは何だと、あなたは思うのです？」と彼は尋ねた。

「いの字は愛、ろの字は謙虚さ、はの字は真実です」と私は答えた。

「では、なぜ私は、彼らに愛と、謙虚さと、真実を教えなかったのでしょうか？」

「あなた自身が、愛も、謙虚さも、真実も知らなかったからです。」

「私は、愛を知らなかった？」

「あなたは、愛を知らなかった。」

「そして、私は、謙虚さも知らなかった？」

「あなたの傲慢さは、有名です。」

「そして、私は、真実も知らなかった？」

「あなたは、真実の半分だけを知っていた。しかし、真実の半分は真実ではない。ちょうど、半分のリンゴがリンゴではないように。」

「あなたは、私が彼らに偽りを教えたと思っているのですか？」

「最も大きな偽りを教えた。彼らは、“超人”になれるのだ、と。彼らは、まだ“超人”になる準備ができていないのです。」

「しかし、人間は超えられなければならない！」

「人間は、自分自身を超えなければならないのです」と私は答えた。「分かりますか？ そこには違いがある。」

「では、私は、彼らに何を教えるべきだったのでしょうか？」

「“超人”とは、人間のしもべであって、人間をいじめる者でも、支配する者でもない、ということです。」

「しかし、彼らには理解できなかったでしょう。」

「それは、どうでしょうか。そう決めつけないことです。“人の子”を理解した者も、少数ながらいたのですから。」

「ああ、あの人はですか！」

「あなたが否定した、その人です。」

「しかし、あの人は、人間に奴隷になれと教えた！」

「良いしもべは、良い主人を作る。そして、あなたがたの中で最も偉い者は、すべての人に仕える者となりなさい。」

「ああ、もしあなたが聖書を持ち出すつもりなら——」

「私は、“超人”を引用しているのです。」

「そして、あなたは信じている——」

「私は、あなたが、自分自身の理想を示した、ただ一つのよく知られた実例を否定したのだと信じています。」

「そして、あなたは、さらに——」

「そう、私は、あなたが、自分の教えがすべて偽りだったことを、あまりにも遅く知ってしまったために、狂ってしまったのだとも信じています。私は、あなたには、自分自身を否定する勇気がなかったのだと信じています。そして、そのために、あなたは、自分自身を超えることができなかった。自分自身を超え、本当に“超人”である自分になることができなかったのです。」

「では、あなたは、私が知っていたと思うのですか？」

「私は、あなたが知っていたことを知っています。私は、あなたが、あの方の幻を見たことを知っています。あなた自身が理解し損ねていたものが、どこにあったのかを、あなたは見た。そして、あまりにも遅く訪れた、その新しい理解を、あなたは認めようとしなかった。」

「あなたは、知りすぎています」と彼は言った。

「あなたが、私に裁判官になれと頼んだのです」と私は言い返した。

「しかし、死刑執行人にではない。」

「あなたは、自分自身の死刑執行人であり、また、自分の民族の死刑執行人でもあったのです。」

「私の民族だって！」彼の口調には、軽蔑がこもっ

ていた。

「私は、あなたには愛がなかったと言わなかったですか？」と私は問い返した。

「それで、今、あなたは私に何をしろと言うのですか？」

「地上へ戻りなさい。そして、人間がどのようにして自分自身を超えることができるのかを、人類に教えなさい。地上へ戻りなさい。そして、あなたが人々に軽蔑するよう教えた、大工の息子に従うことを、人々に教えなさい。ドイツへ戻りなさい。そして、自分自身を否定しなさい。」

「どうやって戻ればよいのですか？」

「もちろん、別の肉体に入っでです。清らかで健全

な肉体に。そして、あなたは、その肉体を清らかに保たなければならない。」

「それは、どういう意味ですか？」

「あなたは、私の言う意味を、よく分かっているはずですよ！ 私は、あなたには愛がなかったと言った。あなたにあったのは、ただ、神経質な潔癖さと、傲慢さと、刺激を求める欲望だけだった。」

「あなたは、私に難しい仕事を与えました」と彼は言った。

「永遠は長いのです」と私は答えた。「そして、新しいドイツは、あなたの新しい教えを必要とするでしょう。」

「私は、あなたに感謝すべきでしょうか？」と彼は尋

ねた。

「その必要はありません。あなたが、私の判決に異議を申し立てなかったことに、むしろ私のほうが感謝しています。」

「おやすみなさい」と彼は言った。

「おやすみなさい」と私は繰り返した。

そして、Friedrich Nietzsche の魂は、去って行った。それは、再生の門へ向かってだったのだろうか。

6月1日。

第四十六の手紙
くさびの打ち込み

昨夜、苦悩する魂が、自分の教えが一国民を墮落

させてしまったことについて、私の判断を求めてきた話を書いたあと、私は再びフランスの戦線へ戻った。(ドイツ軍も、魚雷で私を沈めることはできない。)

ドイツ側をゆっくり進んでいると、以前の手紙であなたに話した、頭を暗い覆いで包んだ、背の高い威厳ある姿を、また見かけた。

今度は、彼から声をかけてくるのを待たず、私のほうから呼びかけた。

「あなたの仕事は、どう進んでいますか？」と私は尋ねた。

彼は顔を覆っていたヴェールを後ろへ払いのけた。すると私は、深い思索と悪によって刻まれた、暗く堂々とした顔を見た。

「私の仕事は、進むように進んでいる」と彼は答えた。「それで、あなたは何をしていたのだ？」

「今夜は、世界に向けて文章を書いていた」と私は答えた。

彼は笑った。

「平和について書いていたのか？」

「今回は違います。私は、偉大で苦悩する魂と交わした会話について書いていた。」

「そう、知っている。」

「知っているのですか？ 聞いていたのですか？」

「私の長距離電話を通してな。」

「電話というのは見事な発明ですね」と私は言った。「あなたが、その発明に影響を与えたのですか？」

「私が？ いや、違う！ 私は、それに反対していた。」

「なぜです？」

「人間が知りすぎるのは、よくないからだ。」

「ですが、人間が、あなたの妨害にもかかわらず発見を成し遂げると、あなたはその発見を人間に対して利用しようとするのでしょうか？」

「もちろんだ。」

「あなたには興味をそそられます」と私は言った。
「では、Friedrich Nietzsche の魂との私の会話にも、興味を持ったのですか？」

「あなたが私の理由を聞くまでは、想像もつかないほど興味を持った。」

「では、その理由を教えてくださいませんか？」

「教えない理由はない。

私の正体を見抜く者には、私は率直だ。」

「それをドイツ人にも教えたらどうです？」

「それでは私のゲームが台無しになる。私は、彼らを利用したあとで滅ぼしたいのだ。もし彼らが率直

になったなら、彼らは率直さにおいても徹底的だろう。そうなれば、怒っている世界の心を和らげてしまう。」

「彼らは、その残虐さについては十分に率直です」と私は言った。

「ああ、そうだ！　だが、それは別の問題だ。もし彼らが、自らの悔悟について率直になれば、世界は彼らを赦してしまうだろう。」

「しかし、ニーチェについては？」と私は尋ねた。

「ただ一つ。彼に影響を与えたのは、私だったということだ。」

「あなたは、ずいぶん徹底的に仕事をしたのですね。」

「私は、自分の仕事を、できる限り徹底してやる。」

「もっと話してください」と私は促した。

「あなたが善を自分の旗印に選んだ時、なんと惜しい働き手を失ったことか！」と彼は叫んだ。

「ですが、私は優れた働き手ですよ」と私は言い返した。「実際、私はあなたの仕事のいくつかを邪魔してきました。」

彼は、鋭く短く笑った。

「私は、それをあまり気にしてはいない」と彼は言った。「私には道が一つだけではない。もし戸を塞がれても、窓から入ることができる。」

「では、あなたはどのようにしてニーチェの中に入り込んだのですか？」

「ある時は一つの道から、またある時は別の道からだ。彼は、人間に対してだけ戸を閉ざしていた。そして、私もまた、人間を超えた存在であることが分かるだろう。」

「それは最初に会った時に感じました。人間を超えようとする者は、善と悪のどちらを選ぶかを決めなければならない。」

「あなたには誤魔化しが通じない」と彼は言った。
「だから私は、もう試そうとはしない。そうだ、ドイツ人に『超人』を説くようニーチェに影響を与えたのは、私だった。彼らは、自分たちが強いと思い込んだ時、悪しか選べなかったのだ。」

「そして、そのことで、あなたは何を得るのですか？」

答える代わりに、彼は問いを返した。

「あなたは、チェスをしたことがありますか？」

「何度も、いくつもの人生で」と私は答えた。

「そのゲームに興味がありましたか？」

「大いにありました。」

「賭けをして遊んだのですか？」

「いいや。」

「では、何に興味があったのです？」

「もちろん、ゲームそのものだ。」

「その通り」と彼は言った。「私が自分のゲームを楽しむのも、それと同じだ。できるなら勝つためにプレイする。勝てなかったとしても、私はゲームを楽しんだことになる。」

「そして、あなたは、あの偉大な男の魂を相手にゲームをしたのですね？」

「猫がネズミをもてあそぶようにな。私は彼の中に、真面目な精神と、頭と心に傷を持つ人間を見つけた。彼は、簡単な相手だった。」

「どのようにしたのですか？」

「いつもの方法で。」

「それは？」

「お世辞だ。」

「そして、彼は怪しいと気づかなかったのですか？」

「そのネズミは香水をつけていた。彼は美を愛する人間だった。」

「あなたは、いつもネズミに香水をつけるのですか？」

「いつも必要というわけではない。あなたにも香水をつけた。」

「ええ」と私は言った。「平和というパチュリの香りを。しかし、私は鼻が利くのです。」

「そうだな。あの方々は、あなたを教えすぎた。」

「ニーチェは、私が今あなたを見ているように、あなたを見たことがあったのですか？」

「彼は、私の高貴な顔を見た。そして、私の力の刺激を感じ、自分も私のようになりたいと願った。こうした真面目な人間達が、私に似ようと野心を抱く時、それは実に面白い遊びだ！」

「それで、あなたは彼に『超人』を教えたのですね？」

「そうだ。そして、本当に超人であった方を軽蔑するよう、彼に教えた。」

「では、あなた自身は、本当は超人ではないのです

ね？」

「私の頭はそうだ。だが、その他の部分は、もっと地上に近い。」

「その威厳ある姿にもかかわらず？」

「ああ、地上にも、そして地上に属するものにも、一種の威厳はある！」

「そのドイツの哲学者は、ついには、あなたの正体を知ったのですか？」

「そうだ、最後には。しかし、その時には、私の仕事を取り消すには遅すぎた。」

「では最後には」と私は叫んだ。「彼は、超人の二つの姿、あなたとキリストを見たのですね！」

「そうだ、彼は見た。その光景が、彼を狂わせた。」

「そして、あなたは、自分のしたことに対して、少しも後悔していないのですか？」

「後悔？ それは何だ？」

「後悔とは、自分が悪を行ったと気づいた時に、人間が感じる感情です。」

「人間が感じる感情か」と彼は繰り返した。

「だが私は、人間の感情のうち、感じるものが快いものしか感じない。」

「たとえば？」

「あなたは、本当に知りたがりで、詮索好きだな！」

「ええ、私は好奇心が強く、詮索好きです」と私は言った。「ですが、私には興味があるのです。たった一人の人間を、一生かけて、このようなものを生み出す道具に作り上げる——」そう言って、私は身振りで、私達の下に広がる戦線を示した。

彼は、燃えるような目を輝かせて答えた。

「人間一人の一生など、この光景の栄光に比べれば、何だというのだ？ 千年かけて働いても、これに比べれば何も生み出せまい！」

「では、この虐殺は、あなたを喜ばせるのですか？」

「なんとつまらぬ質問だ！ それは私を満足させ、栄光を与え、高める——私と私の仲間が生み出し

た、この戦場の大虐殺すべてが。」

「そして、あなたは、一人の人間を、その著作によって一国民を墮落させるために準備していた時から、すでにこのすべてを思い描いていたのですか？」

「そうだ。彼は、完璧な道具だった。他の誰も、これほど見事に我々の目的に役立つことはできなかった——野心的で、不満に満ち、貴族的で、傲慢で、広い意味での愛を持たず、熱狂し、それゆえに幻滅することもでき、そして最後にして最も重要なのは、幻を見る目を持っていた。」

「あなたの幻を？」

「そうだ。彼はまず夢の中で私を見て、私に憧れ、私のようになりたいた願った。」

「そして、それからあなたは、彼に『超人』を語ったのですね？」

「そうだ。そして私は、女など取るに足らぬものだという古い議論を使った。女への愛は、男の進歩の妨げになるということ。女は、男が支配しなければ、男を奴隷にするということ。自然とは偉大なる母ではなく悪魔であり、だから可能な限り戦わねばならないということ。人間は、自分に影響を与えるもの——自然も含めて——すべてを否定し、自分に自由を与えるもの、たとえば、自分が他のすべての存在より優れているという考え、自分が他者を支配できるという考え、自分の思考を支配できるという考え、善と悪を支配できるという考え、事実と虚偽を支配できるという考えを強く主張することによって、超人へと上がっていくのだ、と。」

「事実と虚偽を見事に混ぜ合わせた教えですね」と私は言った。

「もちろんだ」と彼は答えた。「だが、どうしろというのだ？ 真実だけでは、こんなものは決して生み出せなかっただろう。」そう言って、彼は長い腕で、私達の下の戦線を指し示した。

「そして、あなたは、選んだ弟子に、ほかに何を教えたのですか？」と私は尋ねた。

「彼が世界に教えたことは、すべて私が教えた。彼が女の顔を心から追い払うたびに、私は一点を得て、彼は自分が超人に近づいたと思った。彼が誇りと優越感で膨れ上がるたびに、私は一点を得て、彼は自分が超人に近づいたと思った。彼が福音書を読み、いわゆる『人の子』の謙遜を心の中で嘲笑するたびに、私は二点を得た——一点は彼に対し

て、もう一点は、あなた方のキリストに対して。」

「ありがとう」と私は言った。「私を、十字架につけられた方の従者の一人に数えてくれて。私は、そのような従者なのです。」

彼は私の最後の言葉を無視し、そのまま続けた。

「私は彼に、新しい指導者の理想、新しいキリスト、反キリスト、愛と憐れみによってではなく、残酷さと冷酷さによって人々を導く、険しい顔をしたドイツ的なキリストを生み出したいという願いを抱かせた。ああ、私はその仕事を見事にやり遂げた！ 多くのドイツ人が、私の理想を、マリアの子の位置にまで高めた。多くのドイツ人が、私を太陽神の代わりに置き、私を超人として讃えた。もっとも、彼らは、私を率直に反キリストと呼ぶ勇氣はなかった。代わりに、彼らは私の性質をキリストに付け加え、

私達を一つの名前で呼んだ。そして、その名のもとに、自分の中にも他人の中にもある、あらゆる憐れみと慈悲を滅ぼそうとした。彼らは、自分が私のようになる妨げとなる、あらゆる愛を滅ぼそうとした。十字架を、残酷さの象徴、自分自身への犠牲の象徴として高め、人間への愛のために自分を捧げる象徴とはしないよう教えたのは、私だった。」

彼はそこで言葉を止め、私達の上で静かに輝く星々のほうを見つめた。

「あなたは」と私は言った。「自分でも、キリストが反キリストより優れていることを感じているように思えます。」

彼は再び私の言葉を見無視し、自分の考えをそのまま続けた。

「キリスト教国を、自分達のものではないすべてに
対して、利己主義と残酷さの怪物へと変えていくこ
とは、私に、どれほど知的な喜びを与えたことか！
外国人は、憎まれ、軽蔑され、利用され、嘲笑され、
できるなら侮辱されるべきだとされた。私は、その
ようなことこそが超人の道であり、それによって人
間は自分を超えるのだと、彼らに教えた。」

「ですが、なぜ、そのすべてを私に話すのです
か？」と私は尋ねた。「私のほうが良い札を持って
いると知っていながら、なぜ、あなたは自分の札を
すべて表に出すのですか？」

彼が私に向けた目は、くすぶる炎の湖のようだった。

「あなたが羨ましいからだ」と彼は言った。

「それは、私や、私が立っている原則に対する、新しい、より巧妙な攻撃なのですか？」

暗い者は再び笑った。その笑いは、鋭く、喜びのないものだった。

「率直に言えば、違う」と彼は言った。「あなたは、もはや敵として、私を楽しませない。」

「それは、どういう意味ですか……？」

「私は、疲れて、この勝負を投げ出すということだ——少なくとも、今のところは。私が欺いた魂達は、すでに私と私の教えに疲れ始めている。彼らの中には、新しい光を見た者もいる。」

「おそらく」と私は言った。「彼らは、キリストの光、本当の超人の光を見たのでしょう。」

「おそらく」と彼は繰り返した。

「そして、あなたもまた、それを見たのですか？」

「ふん！」と彼は言った。「あなたは、悪魔を改心させたいのか？」

「いいえ、まったく。」

突然、彼は私のほうを向いた。

「私を弟子にしてくれないか？」

「それも、だめです」と私は答えた。「あなたは、その頼みを、もっと騙しやすいような、善良な女性にしてください。」

「では、あなたは、こちらの手口をすべて知っているのか？」

「私の教師は、あなた達のような者達のやり方について、多くを教えてくださいました。」

「では、おやすみ」と彼は言い、暗闇の中へ消えた。

私が書いている世界よ、私は、あなたが知識によって武装できるように、これらのことを語っている。サタンが、自分を改心させてくれとあなたに頼む時には、かえってあなたが改心させられないよう、気をつけなさい。サタンが、超人を、あるいはキリストさえも指し示す時には、そのキリストが反キリストではないかを、よく確かめなさい。その方が、憐れみに満ちていることを、その心が、この世界の苦しみと弱さのために血を流していることを、その茨の冠が、人間のために自らを犠牲にした印であって、た

だ見栄えの良い飾りではないことを、確かめなさい。なぜなら、その方は、こう言われたからである。

「あなたがたが互いに愛し合うなら、それによって、すべての人は、あなたがたが私の弟子であることを知るであろう。」

また、こうも言われた。

「だれにも惑わされないように気をつけなさい。多くの者が、私の名を名乗って現れ、『私がキリストである』と言い、多くの人を惑わすであろう。……偽りのキリストや偽りの預言者達が現れ、大きなしるしや不思議を行い、もし可能なら、選ばれた者達さえ惑わそうとするであろう。」

6月2日。

第四十七の手紙

新しい兄弟愛

私は、新しい種族、来たるべき種族について語れた

い。世界は大きな子を宿しており、現在の世代は、自らを救うことになるその子の、澄んだ目を驚きをもって見つめるだろう。

あなたの信仰を、新しい種族の旗に結びつけなさい。そのために働きなさい。その者達が身にまとう衣を作り、その到来に備えなさい。

すでにあなたは、その教育を助ける者達、その教師や導き手となる者達と接している。これから来る日々にアメリカのために計画されている大いなる仕事にも、自分を捧げなさい。いや、あなたは、すべての時間をそこで過ごす必要はない。しかし、あまり長く離れていてはいけない。行き、また帰って来なさい。離れることで新しい印象を受け取り、戻って来ることで、古い国々の物語を、新しい国を楽しませ、励ますために持ち帰るのだ。

だが、常に新しいものに忠実でありなさい。

アメリカの、まだ踏み荒らされていない荒野には、あなたを何度でも新たにする力がある。アメリカの都市は、荒野によって救われるだろう。都市は、あまりにも世俗的になっている。彼らは神を忘れてしまった。広い空気の中、広い空の下で、目覚めた魂は、そのメッセージを受け取ることができる。

子供達を荒野へ送り出し、汚されていない泉から飲ませなさい。鉛の管を通して流れる水は、身体を元気にするかもしれない。だが、山の泉の水は、魂を元気にする。

自然のヴェールの向こうには、偉大なる母の顔がある。そして、彼女はいつも微笑んでいるわけではないが、その目は夢と神秘に満ちている。自然は悪魔ではない。悪魔は、常に自然と戦っている。自然

とは、母なるイシスである。冒涇する者達の言葉を聞いてはならない。彼らは、イシスとテュポンの役目を取り違えている。ホルスを生み出すのは、イシス、すなわち自然である。自然のもとへ戻り、そのメッセージを求めなさい。彼女は森の静けさの中で待っている。小川のせせらぎは彼女のささやきであり、木々の間を風が揺らす時、それは彼女の衣擦れの音である。母が来ようとしている、新しい種族の子供達よ！ その腕の中で、あなた達は心休まる憩いを知り、その目の中に、利己心を知らない愛、自らを与える喜びを読むだろう。

あなた達は、あまりにも長い間、あなた達を生んだ母を忘れ、都市に住み続けてきた。あまりにも長い間、裸足で大地に触れることから得られる、優しい地面の力を持たずに生きてきた。あまりにも長い間、あなた達は、あなたから奪うばかりで何も与えない、死んだ石のような、力のない街路を歩いてき

た。森と流れのもとへ戻りなさい。印刷された図ではなく、星そのものの目の中に、あなたの運命を読みなさい。木星は、あなたに対して、一対一でしか語らないメッセージを持っている。そして、穏やかな金星も、情熱的な火星も、同じようにメッセージを持っている。丘の上の静けさの中、母と二人きりになって、彼らのもとへ学びに行きなさい。

市場の真ん中に神殿を建ててはならない。あなたの大聖堂は、森の木立でありなさい。

行かなければならない時には、都市へ行きなさい。反対のものを知るのは、常に良いことだからである。市場の騒ぎを聞いた後では、大聖堂はいっそう静かに感じられる。

古代の生活の神秘を学ばせるために、子供達を外へ導き出した者達に、当然の敬意を払いなさい。大

人であるあなた達も、ただ背が高くなった子供にすぎない。桑の木の周りで、あるいはキャンプファイヤーの周りで、輪になって踊りなさい。燃える木の匂いの中で、幻が訪れることがある。私は以前、あなたに、パリの暖炉の薪火について書いた。しかし、パリの暖炉の薪火が、森の中のキャンプファイヤーに比べて、何ほどのものだろう？ そう、私は先夜、集まりの外れにいて、私もまた、それを楽しんだ。

族長に、私からの挨拶を！

アメリカの救いは、この森林運動の中にある。運動！ まさに、その名はふさわしい。それは、大地そのものの力によって動かされている。それは、種族の魂に鼓舞されている。そして、それは、ますます大きく広がる輪となって、進み続けるだろう。

この仕事の前に石を置く者は、自分自身がその石

につまづく。サタニズムをこの運動の中へ持ち込む者は、悪魔的な力に食い尽くされるだろう。キャンプファイヤーのために二本の棒に油を塗るだけのものさえ、その者には残らないだろう。

安らかに休みなさい。私達は見守っている。そして私達と共に、何千、何万、何百万というアメリカ先住民の魂達も見守っている。彼らは、遠い祖先から受け継いだ自然の神秘のたいまつを渡し終えるまでは、安らぎの中へ進むことができない。

彼らは、自分達からすべてを奪った者達に軽蔑されるかもしれない。だが、彼らの赦しが、あなたを救うだろう。新しい種族のアメリカよ！

あなたは知らないのか。かつて「幸福な狩場」の休息へと去って行った者達の多くが、すでに、以前に愛したその土地に、再び生まれ変わって戻って来

ていることを。多くの子供達の高い頬骨を見なさい。鷺のような目を、まっすぐに引き締まった身体を見なさい。

おお、アメリカよ。あなたはかつて、自らの運命を追う中で、大きな過ちを犯した！ そう、確かに犯した。今こそ、それを償おうと努めなさい。生まれ変わった赤い肌の子供達を、森の中で遊ばせなさい。そして、昔からの名誉と勇気の掟を教えなさい。そうすれば、彼らは、ヨーロッパを経てやって来た生まれ変わりの魂達と、手を取り合って働くだろう。手を取り合って、彼らは森林兄弟団の中に立つだろう。

族長に、私からの敬礼を！

7月9日。

第四十八の手紙
るつぼの中で

私は、今でも、自分を生んだ国に深い関心を抱い

ている。その国には、これから暗い日々が待っている。そして、平和と戦争が天秤にかけられ、一日の行動がその答えを決めるかもしれないこの時、Abraham Lincoln の偉大な魂は、国家の舵のすぐそばにいる。

この国には、取り返しのつかない害が及んではならない。この国は、種族の自由を切り開く偉大な先駆者だからである。私が数か月前にあなたに話したように、アメリカの片方の手は、もう一方の手を脅かしている。そして、その両方が、身体全体を脅かしている。

どうか、この国が、名誉を保ちながら平和を持てる限り、平和を守ることができますように！ だが、もし暗い日が来るなら、どうか、その時には肩をしっかりと張って立ち向かうことができますように。そして、もし敵が、自分自身の家の中にもいるなら、そ

れは初めてのことはない。かつてある人が、自分の敵には自分で対処できるから、友人達から救ってほしいと祈ったことがあった。

今この時の、アメリカにいるドイツ人達の静けさは、危険に満ちている。もし、厳しい行動が必要となる時が来るなら、彼らには、帰化によって得た立場の内側へ戻るよう勧めるべきである。そして、それを拒む者達には、国外追放に至るまで、厳しく対処すべきである。彼らを送り返す先としては、まだ一つの国が残っている。彼らが、今では乱用し、裏切ってしまった自由を求めて去った、その祖国である。

世界は、るつぼの中にある。そして、サタンは、そのすべての仲間達と共に、実験室の中にいる。私達の務めは、立ち続けることだ。しっかり立ち続けることは、いつも簡単ではない。

落ち着きなさい。そして、やがて新しい種族、種族
の統合を生み出す母なる国を信じなさい。

第四十九の手紙

アメリカにおける黒魔術

あなたは、悪の力が、進歩を妨げ、何世紀にもわた

る仕事を破壊し、未来のために働く人々を滅ぼし、そして、この悪意に干渉しようとする人々を脅して追い払うために、どのような方法を用いているかを、かなりはつきり見てきた。

注目しなさい。これらのことには、一つとして建設的な仕事はない。すべてが破壊であり、すべてが壊すことだけである。建設のための戦いは、天使達によって導かれてきた。しかし、これは建設のための戦いではない。

さて、新しい種族がアメリカで自らを守らなければならない事柄のいくつかを、あなたに話そう。進歩の力が強いところでは、いつでも、それに対する反対の力も強い。私は、この新しい誕生に働く良い影響について、十分に書いてきた。だが私は、いくつかの警告を与えたい。破壊的な性質を持つ、いくつかの影響について分析したい。

アメリカでは、他人の欲望の性質や意志を支配し、それを自分達の目的のために利用しようとする、大きな集団が育ちつつある。これらの人々は、すべてが一か所にいるわけではない。彼らは一つの組織にまとまっているのではなく、多くの団体に分かれている。そして、その中には、まったく独立して活動している者達もいる。しかし、霊的世界において、そして、その世界で働く私達の言葉では、彼らは「集団」として知られている。

彼らは、金銭か奉仕によって代価を払う者達に対し、自分自身や他人の心を支配するための、ある種の規則を教えている。彼らは、多くの人々に、霊的知識の初歩を教え、少数の人々には、さらに進んだ原理を教えている。彼らの教えの一部は真実であり、一部は偽りである。だが、その中で、自分の生徒達に、本当の人格訓練を行う者はほとんど

いない。ある深い教師が言ったように、霊的能力の発達における一步ごとに、人格の発達においては三歩進まなければならない。

人々に黒魔術の方法を教えている者達の中で、特に罪深く活動している者達の名を、私は挙げる必要はない。彼らは、その知識を任せるにはまったくふさわしくない男達や女達に、黒魔術のやり方を教えている。

読者は当然、「黒魔術とは何か」と考えるだろう。私は以前にも似た定義を与えたと思うが、もう一度こう言い直すことができる。

黒魔術とは、言葉や文章による普通の身体的手段や、正当な精神的影響以外の方法によって、自分の仲間の意志や、霊的な感情の部分や、精神を支配しようとする試みである。それは、自然の精霊で

あれ、人為的に作られた精霊であれ、あるいは、自分自身の精神的・霊的性質であれ、それらを利用して行われる。

黒魔術は、意図的に他人に影響を与えるために使われることもあれば、意図的に傷つけるために使われることもある。そして、その信奉者達は、しばしば、犠牲者の身体の一部を利用し、その人の霊的・エーテル的な性質を、共鳴によって支配しようとする。

こうしたものを、賢いことや面白いことだと思って扱っている人々に、私は言いたい。普通の方法であれ異常な方法であれ、あなたの身体から出る液体、特に血液やその他の生命に関わる液体を手に入れようとする男や女には、注意しなさい。

ここで私は、それ以上の詳しいことには立ち入らな

い。私の警告を受け入れる者は、私に感謝する必要はない。私の警告を無視する者は、自分自身の危険を引き受けることになる。

私にとって、悪の力とその犠牲者達との間に立って、このようなことをするのは、少しも楽しいことではない。だが、そうすることによって、私は、自分ができる限り妨げている、その悪の力の怒りを、自らに引き寄せるのである。

そうであればよい！ 私は、彼らに対処する力を持っている。そして、ここで、私の仕事を壊そうと考えている者、あるいは、自らを捨て、自分のことを顧みない勇気をもって、今ヨーロッパを荒らしている地獄の力から、私の国を救おうとするこの仕事を助けている人々を壊そうと考えている者に、知らせておきたい——この問題に関心を持っている、いかなる悪しき魔術師にも知らせておきたい。もし、

その者が私の決意の邪魔をするなら、苦しむのは私ではなく、その者自身である。

私と、私の後ろにいるマスター達が、私達の働き手達の周りに描く輪は、悪意を持ってそれを越えようとする者にとっては、自分自身の危険を意味する。

これは、悪い魔術を使うという脅しではない。私達は、悪い魔術は使わない。だが私達は、悪意ある流れを、その選ばれた犠牲者からそらし、それが圧倒的な力をもって、その源へと戻るようにする方法を知っている。

また私は、無知や軽はずみから、自分自身を、悪魔の栗を火から取り出すための猫の手として使わせている人々にも言いたい。火は燃える。そして、悪魔の熱い栗は、指に張りつく。これは、不快な話題である。もう、この話は終わりにしよう。

これらのことを知らない人々に向かって話そう。たいていの人々は、知らない——「心霊学を学んだ」人々でさえも。

多くの罪のない(あるいは半ば罪のない)魂が、他人の悪意ある思考、他人の意志によって送り込まれた思考の圧力によって、ほとんど狂気に追い込まれてきた。

そのような人々に、私は勧めたい。恐れによって、さらに自分を弱めてはならない。祈りによって、自分を強くしなさい。

私は、あなた達一人ひとりの中に、神と悪魔がいると言った。悪魔から守ってもらうために、神へ向かいなさい。もし、あなたの中に悪魔がいなければ、他人の悪魔も、あなたを傷つけることはできない。

それを忘れてはならない。

あなた自身の悪魔を、あなた自身の神に仕えさせなさい。

もし、しるしや象徴を使いたいなら、キリストの十字架について瞑想しなさい。キリストの十字架は、一生かけて瞑想するに足るほど深い。

悪い魔術から身を守るために、悪い魔術を使ってはならない。あなたの内なる神に、悪をその源へ送り返してもらいなさい。

眠る前には、守ってくださいと、あなたの神に祈ることで、自分を守りなさい。悪しき働き手達は、あなたが目覚めている時には近づけなくても、眠っている間には、あなたの魂に近づくことがある。「今から眠りにつきます。どうか主よ、私の魂を守ってくだ

さい」という子供の祈りは、魔術師の呪文よりも強い力を持っている。

子供っぽい、とあなたは言うかもしれない。そうだ。しかし私は今、これらのことに関しては子供である人々のために書いている。その人が七歳であろうと、七十歳であろうと。

地上のすべての国の中で、アメリカは、悪い魔術の危険について、もっとも恐ろしいほど無知である。これらのことについて、大人の知識を身につけるまでは、子供でいることを受け入れなさい。

「私は危険ではない。なぜなら、私はこれらのことを理解しているからだ」と、自分に満足しながら言う人々がいる。だが、そのような人々こそ、実際には、悪の力にしっかり捕らえられていることが多い。まことに、少しばかりの知識は危険なものである。

もし、さらに強い守りが欲しいなら、私の子供達よ、自分自身の悪い情熱や、恨みに満ちた思いを見張りなさい。嫉妬の感情や、他人への不親切な批判を見張りなさい。悪魔達は、怒りと恨みの波に乗ってやって来る。

また、誘惑にも気をつけなさい。若い魂は、自分の欠点を通して誘惑される。そして、より大きな魂は、自分の長所を通して誘惑されることを、忘れてはならない。

悪は存在しない、と言って、自分を欺いてはならない。善がある限り、悪もまた存在する。

「善悪を超えて」という状態は、あなた達のうち、ごく少数の者しか目指すことのできないものであり、あなた達は、それが何であることを理解していない。

しかし、「善悪を超えて」という言葉は、うぬぼれた魂を誘惑し、混乱させるためには、非常に強力な合言葉である。

あなたが本当に善悪を超えた時には、近所の人との噂話をしなくなるだろうし、その人の魅力や持ち物を羨まなくなるだろうし、自分の目的のためにその人を利用しようとしなくなるだろうし、悪い人が自分に害を加えるのではないかと心配もしなくなるだろうし、自分の欠点をねじ曲げて長所のように見せようとしなくなるだろうし、自分の動機について自分を欺くこともなくなるだろう。

自分を調べなさい、私の子供達よ。自分の欠点を探しなさい。もし、自分の中に何の欠点も見つけれないなら、一番近くの柳の木に竖琴を掛けなさい。なぜなら、あなたの成長は、そこで終わっているからである。

人間は、自分の欠点を認め、それを変え、それを超えていくことによって成長する。もし、あなたが完全であるなら、この世界は、あなたのいる場所ではない。

「善悪を超えて」だと、本当に！

裁いてはならない。裁かれないためである。だが、自分が裁いていないことを証明するために、悪魔と戯れてはならない。

そうだ、すべての人は、あなたの兄弟である。悪い人でさえも。あなたは、自分のことをしなさい。そして、その結末は、神に任せなさい。

世界の愛しい子供達よ。あなた達の情熱よりも高い場所から、私は、これだけをあなた達に伝える。

7 月 25 日。

第五十の手紙

覚えておくべきこと

この本の内容が、それを必要とする人々のものとな

るように、私は今、これで終わりにしよう。

この戦争における霊的世界の出来事については、いくらでも書き続けることができるだろう。そして、その主題が尽きることはない。私を与えることのできたものは、ただの概略にすぎない。いくつかの出来事、いくつかの暗示にすぎない。

だが、次のことを覚えておきなさい。

戦場の近くには、悪魔達だけでなく、天使達もいるということ。

上から戦争を見る者達は、結果だけでなく原因も見ているということ。そして、その原因から、地上の人間達が持っているよりも豊かな材料に基づいて、正しい結論を引き出すことができるということ。

戦争も、ほかのすべてと同じように、一定の流れと繰り返しを持っているということ。あなたが自分の側だと考えている側が、戦いの重圧に苦しんでいる時でも、落胆してはならない。もし、あなたの側があまりに急速に前進しすぎたなら、パリ郊外からの撤退の時のように、激しい反動を覚悟しなければならない。

悪が存在する限り、悪は必要なものであり、悪は磁石のもう一方の極である。だが、それでもなお、白い道を歩こうと望む者達の務めは、常に正しいもののために戦うことである。そして、これは、「悪に逆らうな」というキリストの言葉を否定するものではない。矛盾している、とあなたは言うだろうか？ 大きな知恵は、鍵を持つ者にとっては、矛盾の中に隠されている。悪の存在は、善をさらに強くする。これは、ヒンドゥー教徒達が言うように、カリ・ユガなのである。

この戦争は、個人的な悪の力が、人類を滅ぼそうとする試みであるということ。これ以前にも、いわゆる暗黒時代の前に、ヨーロッパで同じような試みがなされた。しかし、その後にルネサンスが訪れ、再び均衡を取り戻した。

人間の中には、キリストの原理も、悪魔的な原理も、両方とも存在しているということ。意志は自由であり、人間は、そのどちらを選ぶかを決めることができるということ。

新しい種族は、革命と戦争の中から生まれるということ。聞く耳のある者は、聞きなさい。

私があなたより広い視野を持っているとしても、私は、すべてを知っているわけではないということ。私も、あなたと同じように、前提から結論を引き出

している。私は、自分の知っている原因から、その原因がもたらすであろう可能性の高い結果を予測している。だが、突然、自由に予測できない意志が入り込むと、新しい原因が生まれ、私の計算は、もう一度やり直さなければならなくなる。私の予言は、神の全知から生まれているのではない。ただ、私があなたより遠くまで見えるというだけだ。私の論理が、あなたの論理より優れているとは限らない。たとえば、戦争の初期の数か月の間に、私達が悪の力を押し返した時、私は、彼らが新しい力を蓄えた後で、再び前へ押し寄せてくることを可能にする、流れと繰り返しの法則を忘れていた。悪魔達でさえ、自分達の力を生み出す。そう、彼らもまた力の単位であり、そのようなものとして計算に入れなければならない。私は、もう二度と、その間違いはしない。

今この瞬間、私のそばに立っている私の教師は、マ

スター達でさえ、すべてを知っているわけではない
と言うように、私に命じている。私の視野があなたの
視野より広いように、彼らの視野は、私の視野より
広い。だが、彼らでさえ、もっとも遠い星々で何
が起こっているかを、いつも見ることができるわけ
ではない。彼らは、あなたが彼らのようになることを
望んでいる。だが、彼らは、あなたが、一定の流れ
と繰り返しの法則に縛られていることを知ってい
る。そして、あなたが彼らへ向かって二歩進むごと
に、少なくとも一步は後ろへ戻るだろうということ
を知っている。あなたが二歩後ろへ戻らないのは、あ
なたの自由意志のおかげであり、また、人類を満ち
潮へと押し進めている、より大きな流れのおかげで
ある。ひとつひとつの達成は、あなたにはいつも見
えるわけではない、もっと大きな波の中の、小さな
波紋なのである。

私は、私の教師について、さらに書くよう頼まれた。

だが、私の教師は、表に出ることを望まない。それでも、世界よ、私は、これだけはあなたに言うことができる！ 私の教師は、今もなお肉体を持ち、人間として地上を歩いている。彼は、物質の世界と霊的世界の両方で働いており、それらを超えた、さらに高い世界でも働いている。そして、彼の人生の目的は、あなたには理解できない。彼は法則の僕であり、その喜びは、法則と共に働くことにある。黒のマスター達——そう、黒のマスター達も存在する——は、その法則に逆らって働く。

私は、そのうちの一人との会話についてあなたに話し、その方法についても、少しだけ示してきた。

あなたが強くなった時には、黒のマスター達を恐れる必要はない。あなたは、私がしているように、彼らと挨拶を交わすことさえできる。彼らのほうが、私が彼らを恐れる以上に、私を恐れている。私は、一

人がこちらへ来るのを見ても、わざわざ道を変えたりはしない。私は、彼らを、むしろ面白い存在だと思っている。もっとも、彼らの運命の悲劇は理解している。彼らは、満たされなければならない恐ろしい役目を担っており、その苦しみは大きい。彼らは、白のマスター達の、道を誤った兄弟達である。初めのうちは、彼らは同じ学校で訓練を受けていた。だが、大いなる「選択の時」が訪れ、悪しき者達は、自らを、その源から引き離した。白のマスター達は、彼らを滅ぼそうとはしない。なぜなら、最後には、彼らは自分自身を滅ぼすことを知っているからである。沈みゆく夕日を、急がせようとして、なぜ力を無駄にする必要があるだろうか？

黒のマスター達や、その僕達に、あなたを惑わされてはならない。そして、あなたが彼らより強くなるまでは、できるなら、彼らを避けなさい。だが、あなたが彼らより強くなった時には、彼らを恐れる必要は

何もない。

彼らが、あなたに直接影響を与えることができない時には、あなたが愛している人々を通して、あなたに影響を与えようとする。心を静かにしなさい。あなたは、自分の兄弟の番人ではない。もし、あなたの兄弟が悪魔を喜んでいるなら、その好みを楽しませておきなさい。意志は自由である。

あなたの中にある真実については、証言しなさい。だが、魔女達の宴への呼び声に向かって吠える猟犬達の口を、無理に塞ごうとしてはならない。

聖なる神殿へ入り、扉を閉じなさい。そして、天使達を呼びなさい。猟犬達の吠え声も、天使達の声の音楽をかき消すことはできない。

静かにしなさい。そして、神が神であることを知りな

さい。

試練の時の後に、アメリカには偉大な日が明けようとしている。太陽は、厚い雲のかたまりの後ろから昇るだろう。だが、その夜明けの新鮮な空気の中で、新しい種族のために、そして種族の兄弟愛のために、多くの働きがなされるだろう。アメリカ中で、人類を育て、より良くするための運動が始められるだろう。それらを助けなさい。そうすることで、あなたは法則と共に働くことになる。そうすることで、あなたは、合言葉を「奉仕」とする白のマスター達の学校で、最初の教えを学ぶことになる。

私は、今回は、それほど遠くへ行くわけではない。だが、私が働き、苦しんできた世界よ——あなたが、この困難な一年の間に、私がどれほど多く働き、苦しんだかを知っている以上に——私は、あなたに祝福を残して行く。

そして、私は、世界が、私の前の本、Letters from a Living Dead Man に大きな関心を寄せてくれたことに、感謝したい。そう、私は、今も生きている。そして、以前、あなたのために書いた時よりも、はるかに生きている。少しずつ私は、かつて人間として地上を歩いていた時には想像もできなかったほどの、激しい生命の中へと成長している。

この、もう一つの世界からの戦争の手紙の中で、私は、星々の間を旅して戻って来た後の、今の私が送っている、その、より強い生命を、少しでもあなたに見せようとしてきた。私は、もう一度戻って来た時には、その旅について語ろうと思っていた。だが、今の時には、その物語は、この霊的世界における戦争の物語ほど、あなたの役には立たなかっただろう。なぜなら、あなたは、星々よりも、霊的世界のほうに近いからである。そして、あなたがまず、

いろはを学ぶまでは、物語を読んで理解することはできない。

私は、ただ、法則に仕える小さな僕であり、私より賢い人々の学校で学んでいる者にすぎない。得るためには、私は与えなければならない。学ぶためには、私は教えなければならない。前へ進むためには、私は、あなたと一緒に前へ進ませようと努めなければならない。

今の世界に、もっとも必要なものは、この戦争の背後にある神秘についての知識だと、私には思われてきた。私は、この戦争において、目には見えない兵士だった。そして、その中で、私は何度も傷を負った。私は、見張り続ける夜を過ごし、働き続ける日々を送ってきた。だが、それらは、私に、ほかの方法では得られなかった強さを与えてくれた。私は、奉仕してきたからこそ、強いのである。

あなたも奉仕しなさい。そうすれば、報いは、しかるべき時にやって来る！

私は、近い将来、また別の奉仕をしなければならないので、今は、しばらく休むことにする。

私は、それほど遠くへは行かない。

「X」

1915 年 7 月 28 日。

終わり。